

# *Lagrime* (涙)

—愛・くるしくて—



岡 史彦

# 目次

---

## Lagrime (涙)

—愛・くるしくて—

岡 史彦

注・本作品はフィクションであり、

本文中に出て来る団体や個人名あるいは個人に関する情報等はすべて架空のものである。

## 目次

### プロローグ

1. 涙 (なみだ)
2. 回想
3. 最後の夜
4. 春休み

### 第1章 初恋の頃

1. 僕と友人達
2. 初恋
3. 大学生となる
4. 初恋の終わり

### 第2章 愛の虜 (とりこ)

1. はがき
2. 忠告
3. 初めての来訪
4. 貴方の誤解は私の誤解
5. 迷い
6. 初めてのキス
7. 夏の終わりに
8. 初夜

### 第3章 事件

1. 何かが起こった
2. 麗子の誘惑
3. 家族会議
4. 薔薇の花束
5. 追い討ち

### 第4章 終焉 (しゅうえん)

1. 激突

2. 揺れ惑う心
3. 微かな望み
4. 最後の夜
5. 卒業したのに
6. 未練
7. 手紙を焼いて

#### 第5章 運命（さだめ）

1. 出会い
2. 落とし穴
3. 一枚のメモ
4. それなら前の方が良かった
5. 仕掛けられた罠
6. 四面楚歌
7. 配置転換

#### 第6章 駆け落ち

#### エピローグ

1. アパート
2. 涙
3. 回想

# プロローグ

---

## プロローグ

### 1. 涙（なみだ）

慌てて手配したタクシーの中で痛む腹に顔をしかめながら彼女は悲しみの流産をしてしまった。

まだ完全に麻酔から醒めていなかった。

薄暗いアパートの自室に敷いた粗末なせんべい布団の中で、彼女は時折うなされたように幾度も顔を左右に振りながら、

「泣いて、赤ちゃんとお別れしたの・・・」

そう僕に答えると彼女はまた沢山の涙をまぶたに溜め、その目を閉じた。

涙は、無色透明の一条の線を引きながら蒼白い彼女の頬に零れ落ちて行った。

### 2. 回想

再び僕はギターを弾いた。

「ね、ねえ・・・、それ、何て・いう・の・・・？」

まだ混濁の眼差しで彼女はうわ言のように何かを言った。

僕の答えを待つまでもなく、彼女はまた夢の世界へと戻って行った。

混濁していたのは彼女だけではなく、目の前で身を横たえているのが誰なのかさえ判然としていなかった。僕はその時ギターを弾きながらその中に色濃く塗り込まれた数奇な運命に、ただ気の遠くなる様な深い想いを巡らしていたのであった。

### 3. 最後の夜

「なんだ、もう寝ちゃったの・・・？」

そう僕が呟くと、とっぴりと毛布をかぶったまま、

「うーん、ちゃんと聴いてるわ・・・。」

彼女は布団の中でそう言いながら、その身を半分だけ起こした。

その眼には涙が流れていた。それが何ゆえの涙か、僕には解らない。

### 4. 春休み

あの頃は違っていた。僕の用意したコーラを飲みながら、人懐っこく頷く様に聴いていくれた。

「兄貴の結婚式で弾くんだ。でもね、テニスの後は駄目なんだ。」

その日、僕は最初で最後の彼女の来訪を受けていた。柔らかな春の陽光を受けながら、その右手に黄色の花束を持って彼女は僕の家を潜った。

その花はフリージャだった。彼女の大好きな花だった。

「春の合宿とギターの演奏、がんばってね・・・。」

そう言いながら彼女は帰って行った。ちょっぴり頭を下げながら門を出て行く彼女の後ろ姿を僕はずっと見送っていた。

『可愛い子だなあ・・・』

ただ、それだけを感じながら。

## 第1章 初恋の頃 1. ぼくと友人たち

---

### 第1章 初恋の頃

#### 1. 僕と友人達

母校の校歌に『鯨が丘の方ひとり...』と古くからあるように、僕の生まれ育った町は鯨の背の様に盛り上がり、四周は全て田圃だった。

しかし、そこが黄金色に染まる頃、その長大な峰の南端を穏やかに大地に下ろす阿武隈山脈と調和して街の東側一帯は当に桃源郷の様だった。

鯨の背にあたる処に街の中心部があり、街への出入りは全て急峻な坂道を登り下りしなければならなかった。

僕は六人兄弟の五番目で、下に妹が一人居た。父親は大手造船メーカーに勤務するエリートサラリーマンだったが、一人身の母親の面倒を見るため永年勤めたその会社を辞め、遺産を費消しながら雑多な事業に手を染めていた。しかし、何ひとつ上手くは行かず、金の話題が茶の間から消えた事は一度たりとも無かった。

外面の良い親父に商売は不向きだったが、子供達の学問や恋愛・結婚問題には常に強い関心を示し、そのレベルは極めて異常だった。

また祖父の代から受け継いでいた家父長的封建性は想像を遥かに超え、我が家で父親の発言は絶対的なものだった。

\*\*\*\*\*

僕には仲の良い、それぞれが成人する頃まで均衡した関係を保持し続けていた三人の幼な友達があった。彼等は各々、河田・山野・鈴木と云った。

河田は国鉄H駅のすぐ近くに店を構える床屋のひとり息子で、高校を出ると直ぐ理容専門学校に進み武者修業のため一時上京していた時があった。

彼は小柄だったが万能だった。性格も明かるく決して人を飽きさせない巧みな話術を持っていた。それだけに人気者で、彼の周りには何時も友人達の人だかりがあった。

女友達も桁外れに多かったが、とりわけ近所に住んでいた幼なじみの女の子とラブラブで同学年でそれを知らない者は無かった。彼は中・高時代、軟式テニスで僕のパートナーでもあり僕にとっては親友中の親友だった。

山野は街の西通りに面した看板屋の長男で運動能力にやや難はあったが、その一方では絵を書きギターの弾き語りをし、或いは手の込んだ模型飛行機を造ると云う創作能力には目を見張るものがあつた。職人の血が流れていたのかもしれない。

彼はその風貌柄、女の子達とは縁遠かった。その代わり人の話を良く聴き友人間のややこしい話を穩便にまとめる事に長けていた。

彼の家には居間の真下に地下室があつた。そこは普段商売上の小道具などを格納していた場所で、凡そ十畳程度のスペースだった。思春期の僕たち仲間にとってそれは格好の隠れ家であり、同志以外には絶対秘密の場所でもあつた。

鈴村はとびきりハンサムな男で、僕達仲間にとって一種の誇りでもあった。彼の父親は小学校の校長先生をしていたが母親は長らく重篤な病を患い、その数年前既に亡くなっていた。

その後生活を共にする事になった継母とは気が合わず、ただでさえ多感だった彼は折からの反抗期とも重なり精神的なダメージをより深める結果となってしまった。その為か、一時的に無軌道化した彼の軌跡は僕のその後の生活に極めて微妙な影を落として行った。

\*\*\*\*\*

僕は小さい頃から学校が大嫌いで最後まで長大にその尾を引いた。

それは、もともと千差万別であるはずの個の集団の中で、決められた時間に決められた事だけ同じ様にやる事に僕は大きな抵抗感を懐いていたからである。

しかし成績・人望とも良好で、小六のとき児童長を、中三では生徒会長を歴任していた。以来田舎の友人たちは僕を『会長』と親しみを込めて呼び続けているのである。

僕は中学を出ると家から歩いて五分の県立H高に進学していた。

仲の良い河田は就職組、山野と鈴村は進学コースで僕と同じ組だった。彼らは早い時期から私大希望だったが旧制の帝大を出ていた父親の強い感化を受けた僕には国立大しか眼中に無かった。

しかし未曾有の狭き門に阻まれ、僕は波乱の浪人生活を余儀なくされて行くのである。

『類は友を呼ぶ』とは良く言ったもので友人達もそれぞれ皆全滅であった。浪人が一旦決まると、それでも暫くは至福の時が過ぎて行った。

『赤信号、皆で渡れば・・・』の心境だったのだろうか。

お互い、新生活がリスタートするまで河田・鈴村達とは山野の家の地下室で良く飽きもせず毎日の様に女の話に終始していた。

身体が鈍れば近くのグラウンドで草野球をやり、夕刻になるとねぐらに帰る鳥の様に秘密の部屋に戻って又再び延々と同じ話しを蒸し返していたのである。

\*\*\*\*\*

「ところで会長よウ・・・。宏美ちゃんと離れたくなくって、それでわざと浪人するんだって・・・？」

鈴村が、僕の恋人だった星野宏美を引き合いに出してそう冷やかすと、河田と山野はゲラゲラと笑いこけた。

「何云ってんだ、そんな馬鹿な・・・！！。」

僕は必死になって自分を取り繕い、

「それより鈴村、お前の方こそ如何したんだよ？。」

兎に角おまえは誰でもいいんだからなア・・・。」

と言って、僕に過ぎた冗談を噛ませた鈴村の方に空かさず話題を振った。

彼は女性には本当に良く持てる男だった。隣接する女子高生との浮いた噂に彼は事欠く事は無かった。

「ウン.....」

詰まるように、そう唸ると鈴村はその場を濁した。

彼は高校時代、二人の女性と二股の関係を続けていたが、結果的には『二兎追うもの』の悲しい結末となり実は次なる女を捜していた最中でもあった。

一方、河田は幼友達でもあり近所の藤本麗子とは知る人ぞ知る周知の恋仲だった。

彼女は中三の時、僕と同じクラスだった。彼女のその頃の成績は中位で鳴かず飛ばずだったが、国立Ⅰ大理学部に見事現役で合格したのには皆驚いたものである。

桜の花が散る頃、山野と鈴村は共に東京の予備校に行くことになったが、学校嫌いの僕は自宅浪人と決めていた。



## 2. 初恋

---

### 2. 初恋

星野宏美は市内に古くから建つ社宮の娘であった。家庭的には恵まれていたが、高校の成績がやや優れなかったのか彼女は高校を出ると進学せず、市内のとある老舗に就職していた。僕は浪人時代、夕方のパチンコタイムになると勤務先に電話し、気晴らしも兼ねて彼女と良くデートをしたのである。

ひと口にデートと言っても、僕の生まれ育った田舎町でそれは大変難儀な事だった。街の中で行き交う人は皆お互いに顔見知りだった為で、不用意な風評を避ける為に僕達は街灯の灯いた街角を抜け出るまでは付かず離れずで知らん振りを装わなければならなかった。

待ち合わせの場所はいつも決めていた。彼女の勤め先から大通りに出て数十メートル程北に行った処に小さな十字路があった。そこを西に曲がって傾斜の緩い上り坂を少し行くとその辺りはもう街灯も無く、人通りもまばらな処だった。

幼稚園と小学校の間を下り抜け、年末年始には大賑わいを見せる八幡様の境内を見上げながら進んで行くと道は右に大きくカーブして行った。

「うまく行ってるんでしょう、受験勉強・・・？」

「うん、まあ・・・。」

特にどこへ行く訳でもなく何する訳でもなかった。僕達は暗い夜道を歩きながら一時間ほど、ただとつとつと話すともた来た道に戻って行った。ニキビの痕を未だ残すあどけない彼女は、孤独でややもすると鬱的だった自宅浪人生の自分にとって只ひたすら良きカウンセラーであり続けてくれたのである。

しかし、地獄の様な受験戦争に青春を蝕まれ、胸を搔きむしられるような思いだったその年の夏場過ぎ、

「東京へ行っても、宏美、忘れずにちゃんと手紙出すから・・・。」

岡田さんも勉強がんばって志望校にきっと入ってね。わたし、信頼してる・・・。」

田舎の駅で見送る僕にそう言い残して彼女は突如上京して行った。

### 3. 大学生となる

---

#### 3. 大学生となる

ある時は自信满满となって心が躍り、またある時は失意と絶望に心を打ちひしがれて生きる望みを失った浮浪者のようにもなった。一日の中に於いてさえ躁と鬱とを激しく繰り返しながら、それでも耐えて耐えて耐え抜かなければ壮絶な受験戦争の中で栄冠を勝ち取る事は出来なかった。

何時しか、もう待った無しの季節が来てしまった。

その年の受験シーズンには、関東地方でも良く雪が降った。また羽田沖やその付近に旅客機が頻繁に、しかも集中的に落ちて大惨事となり世間の話題をさらって行った。

然し大学入試はそんな社会的な出来事を全く無視するかのごとく整然と行われて行った。苦手意識が強く、国立大学を突破する上では大きな課題だった数学を僕は何とか克服する事が出来た。

その一年前、文部省が試験的に導入し善良なる受験生を一夜のうちに地獄へ落とし込んだあの忌わしき『科目指定制度』も内外の強烈な批判を浴びて結局その年だけのいわば試し打ちに終わった。

かくして僕は念願の国立大学（法学部）へ合格し、仲の良かった山野や鈴木達も東京の有名私大に見事合格を果たす事が出来たのである。

\*\*\*\*\*

丁度その頃、J銀行仙台支店長だった叔父の斡旋で僕は大変良い下宿を紹介してもらうことが出来た。

それは、国鉄仙山（せんざん）線K駅から僅か北に歩いた閑静な住宅街の一角にあった。母屋と寄り添う様に建っていた二階建の下宿は各部屋とも四畳半で、上下各二室ずつ合計四室あった。

トタン張りだった外回りには緑色の塗装が施されていたが、メンテナンス不足のためか至る所でペンキは剥がれたままであり、汲み取り式の便所からは四六時中堪らなく異様な臭気が漂うなどその造りは全体的に粗末なものだった。

幸い、そちらには既に四人の入居者で埋っており、叔父の力添えもあって僕には母屋の二階が宛がわれる事になっていた。

入学式を数日後に控えたある日の午後、下宿の叔母さんは僕を部屋に案内してくれた。玄関を入ると正面は板張りの廊下で、左側は手前からトイレ・風呂場・台所・食堂と続いていた。右側は六畳程の茶の間があった。そこには仏壇や電話・テレビ等が置かれ、部屋の真中には掘りごたつ式の食卓が置いてあった。

廊下を進み左へ急な階段を上がるとその突き当りが向こう4年間、卒業するその日までぼくの『城』となる部屋だった。その前日まで十六、七才になる娘の部屋だったらしく部屋のここか

しこにその名残りがあった。

部屋の西側は出窓の付いた洒落た造りになっていたが、連なる住宅の屋根に遮られそこからの展望は得られなかった。北側には一間巾の窓があった。直ぐ目の前には緑色のトタンが張られた下宿専用のアパートが建っていた。そのずっと遥か向こうには残雪を被った双耳峰の見事な山並があったが僕はその山名を未だ知らなかった。

下宿のすぐ傍に、国鉄仙山線の軌道が緩やかなカーブを描いて走っていた。時折聞こえる列車の音は、早くも僕を郷愁に誘うかの様でもあった。

\*\*\*\*\*

残雪の山並みが少しずつ冬枯れのベールを脱いで行く頃、大学生となった僕の生活も日々移ろいで行った。

僕は迷わず硬式テニス部に入った。体育会に向こう肘を張った独立系のクラブだったが、その技術レベルは大変高かった。

僕は『軟式』を中・高の六年間、みっちりやった。そこそこの自信はあったが『硬式』となると訳は大分違った。初めてテニスをやるのと基本的に大差は無かった。しかし負けず嫌いの僕は来る日も来る日もコート通いに明け暮れ、短時間のうちにメキメキとその腕を上げて行くのである。

僕のT大合格は、物心両面において大変な親孝行でもあった筈である。

『合格の褒美に、お前が欲しいものなら何でも買ってあげるから・・・。』

と、親父が或る日言った言葉がそれを十分に裏付けていた。それなら、と近所の楽器屋で最も高値だったクラシックギターを買って貰った。

以前、僕の家には古びたギターが一つだけあった。高校時代、僕は器用な山野から手ほどきを受け、流行りの古賀メロディをそれで良く弾いたものである。

下宿生の一人、磯山は大學のクラシックギター部に属しその腕前は一流だった。細長く、しなやかで病的なまでに蒼白いその指が奏でるクラシカルな旋律には、何時も誘われる涙があった。

教えては貰えないものかと僕は彼に何度か願い出てみたが、

「君には、無理だね。湯の町エレジーでも弾いてろよ！。アハハハ...」

と、何時も僕を一蹴し彼は僕をまったく相手にしなかった。一方の村岡は良く磯山から手ほどきを受けていた。高校を出るまで柔道の選手だった彼にギターはどう見ても似つかなかったが、厳しい練習に耐えて彼は日毎に上達して行った。また彼は磯山とは違って僕のギター欲に理解を示し自分の練習の合間に良く僕の基礎指導を買って出てくれた。

\*\*\*\*\*

僕はテニスが終わると、繁華街にひしめくパチンコ屋に良く一人で立ち寄った。浪人時代、ややもすると不規則になりがちだった僕の生活に一定のリズムをつけてくれた田舎のパチンコ屋に、ある種の郷愁を感じていたのかも知れない。

僕がそれに興ずる時間は、三十分でも一時間でも構わない。隣で話す人の声さえ縁に聞こえな

いあの喧騒の中に自ら身も心もすっぱりと投じる事で、この世から己の存在を完全に奪ってくれる不思議な空間が僕は好きでたまらなかった。

パチンコを終えると僕は真っ直ぐ下宿に戻った。僕を含めて5人の下宿生全員が食事時に一同に会する事は殆ど無かったが、何時もワイワイ・ガヤガヤの愉快で楽しい食卓だった。

\*\*\*\*\*

「ご馳走様でした！」

と、元気な挨拶をしながら部屋に戻ると、僕はよく銀色の湯沸しポットに電源を入れ北側の窓をそっと開けた。

もう真っ暗だった部屋の外に目をやると、そのずっと向こうには夜空の蒼さよりもっと黒ずんだ藍色の泉ガ岳が東西にその長い稜線を延ばしていた。

向かいの部屋では村岡がカルカッシの練習曲を弾いている。その力強いギターの音色を、闇をつんざくように仙山線を走り抜ける列車の豪音がいとも簡単に打ち消して行く。そしてそれは、昔習ったドップラー効果のように永く尾を引きながら南から北へと消えて行った。

遠く故郷を離れて三月余りが経つと、下宿やキャンパスの生活にも大分慣れて受験時代の蒼白いひ弱さは自然に失せていた。僕は親しくなった久保木に平気で代返を頼み、クラブ活動にありったけの若さをぶつけながら逞しい学生に変貌して行ったのである。

然し、立ち止まってふツと息をつく時、

『みんな、如何してるんだろうか・・・？』

東京に行った山野や鈴木達、田舎に残った河田は。そして、何よりも大好きだった星野宏美は・・・？』

と、それまで走り続けてパンパンに張り詰めた心の何処かに、埋め切れない風穴がぽっかりとその口を開いていた。

急激で烈しい望郷に駆られたその晩、僕は取り憑かれた様に皆に手紙を書いた。

## 4. 初恋の終わり

---

### 4. 初恋の終わり

それから何日か経った頃、

『会長、ご無沙汰でした。此方からもうそろそろと思っていた矢先の事、とても懐かしく拝見しました。

ところで、これは過日、鈴村と飲んだ時の話しですが・・・、』

との書き出しで山野から封書が迷い込んできた。

それは、家庭の事情で急遽上京して行った星野宏美を鈴村が頻繁に誘い出し、密会を重ねているから早く手を打つべきでは無いかとの極めて不穏な情報だった。

起承転結の明確な彼の文面にはことさら説得力があり、更にこう続いて結んであった。

『・・・略・・・。鈴村は過日、亡き母親の法事で帰省し東京へ戻る日に藤本麗子ともデートしたらしい。勿論、河田は何も知らない。貴君には蛇足だったのかも・・・？。

では、又・・・。』

僕が星野宏美、河田が藤本麗子を、そして鈴村が...・・・というお互いの勢力図は、あの秘密の地下室で山野を証拠人としていわば相互不可侵条約を結んで確認していたはずだったのに.....

。

大学ノート数枚にびっしりと書き詰められた山野の手紙を読み終えると、会心の大学生活に有頂天だった僕の心中は俄かにざわめき始めて行ったのである。

\*\*\*\*\*

その日は旧盆の入りだった。

古くから伝わる我が家の仏壇とその周辺は丹念に磨き抜かれ、灯された太い蝋燭（ろうそく）の灯りに照らされて如何にも神々しい黒褐色の鈍い光りを放っていた。

その前に置かれた漆塗りの小さな卓袱台（ちゃぶだい）の上には、大きな蓮の葉っぱが一枚あった。半分に折った割り箸を、哺乳動物の足に見たてて各々四本ずつ突き刺された胡瓜（きゅうり）と茄子（なす）がその中に立っていた。サイコロ状に小さく刻まれたナスもあった。

その日の夕方までに、在京の兄や姉達もそれぞれ休みをとって帰省して来た。家は久々に大賑わいを呈し、食後は珍しく雀卓を囲んで愉快的な時を過ごしていた。

「あ、駄目よ、昭クン。それは...。ロン！」

次姉の亭主が僕にそう言うと、横着そうに手持ちの牌（ぱい）を片手でだらだらと倒し手の内を見せた。丁度その時、

「昭くーん。電話よオ・・・！」

と、甲高く僕を呼ぶ声が家中に響き渡った。

「星野さんという方からよ・・・」

僕は驚いたが、とうとう来たかの想いがあった。僕は点棒を払うと席を立ち、電話口へ足早に向かった。

『気になる事で話しがしたい・・・』

と云う事だった。その翌日の夜に再会の約束を交わし、僕は受話器を置いた。

翌日は、庭から一面に見渡す稲の葉からそよぐ涼風も凧いで蒸し暑い日だった。

僕は昼過ぎまでぐっすりと眠る事が出来た。朝昼兼用の飯を食べていると、矢張り帰省中の山野から電話が入った。例の件について礼を言い、いずれその詳細も聴かなければと思っていたところであった。

星野宏美との約束までには未だ充分時間があつた。時間調整にはむしろ好都合だった僕は山野の誘いに応じ、例の地下室で久々の密談に華を咲かせていた。

彼は別れ際、僕を諭す様にこう言った。

「会長ねえ、もっと泥臭く行こうよ、それじゃまるで包茎だぜ！・・・」

男ならもうそろそろ脱皮しなきゃあな・・・」

そのままでは星野宏美が鈴村の餌食になってしまう、と僕に警鐘を鳴らしてくれたのである。

\*\*\*\*\*

未だ八時前だというのに商店街のシャッターはことごとく閉ざされ、真夏の夜の虫を集めた水銀灯が夜の帳（とぼり）が降りた街並みを薄ぼんやりと映し出していた。

彼女が、『上京するから・・・』と言って訊かなかつたあの時以来凡そ一年ぶりの再会だった。軽い会釈だけの挨拶だったが、それまでに感じた事の無い女の色気を彼女はここかしこに匂わせていた。

『短時間でこうも変わるものか・・・？』

喫茶店の薄明りの中で、少し濃くなったアイラインと赤く染まった彼女の髪に僕はそんな想いを馳せていた。

店を出て繁華街を北へわずかに進んで左折し野尻の家のある通りを横切ると、そのまま長い下り坂になっている。もうその辺りは民家も疎らで、人気と云う人気は全く無い。

久し振りの再会で僕の心は確かに踊っていた。一年前には出来なかつた抱擁もキスも、その時なら何でも出来そうだったが、その時僕の関心は鈴村との一件をどう着地させるかにのみ有つた。

「あのねえ、山野から聴いたんだけど・・・」

長い下り坂のスロープが少し緩んできた頃、それ迄の沈黙を破って僕がそう言って切り出すと、  
「判ってるわ。もう、それ以上何も言わないで・・・。」

と、彼女は珍しく僕を途中で制止し、鈴村とあつた一切の顛末を語り尽くして行った。

途中、

「でも私、これだけは岡田さんに判っていて欲しいの。確かに鈴村さんと何回かデートしたわ。でも宏美、何もして無いし、されてなんかいないから・・・！！。」

と、自ら身の潔癖さを主張し暗闇を向いて泣きべそをかいた。

真っ直ぐ西に下った長い坂道は、いつしか傾斜も緩んで平坦になった。路は彼女の出身母校でもある女子高の手前で幅十メートルほどの小さな河川と交差し、橋を渡ると女子高を高巻きながら大きな森林公園への急坂へと続いていた。急勾配の坂道を照らす灯りは無く道は真っ暗だった。

「...それじゃ鈴村さんは、この私も含めて大事な親友達のガールフレンドを片っ端から漁ろうとしてた訳…?。」

僕が鈴村と藤本麗子との関係にまで言及すると彼女は驚いて目をくりくりさせた。

「ま、そう云う事になるかな…」

僕は淡々と彼女に言った。

彼女自身も鈴村にとってその他大勢の一人に過ぎなかった事を察知すると、彼女は鈴村に対する強い憤りを露にし掌（てのひら）で顔面を覆った。

標高差で百メートルほども歩いて来たのだろうか。エキサイティングな話しをするうちに、いつしか僕達は公園の大きな頂稜部に出ていた。手入れの行き届いた綺麗な公園のベンチに僕達は少し離れて座った。

公園の東側を見ると、暗闇に濃紺のシルエットを描く大きな鯨が丘の街から洩れ輝くネオンサインの薄灯りが、異光を放つダイヤモンドの様にきらきらとあった。

放漫な鈴村が引き起こしてくれた予期せぬ事件とその日の闇の中のデートは、僕達二人が少年と少女から成熟した大人へと変貌し得る絶好の分岐点だった筈なのに・・・。

僕達には、ざらついた後味の苦い思い出になってしまった。

翌日、彼女は東京に戻って行った。僕も、間もなく帰仙した。急ぐ事は特に無かったが、空ろだった僕の心を田舎は何も埋めてはくれなかった。

\*\*\*\*\*

その頃、僕には地獄的とも云える学期末の試験が日に日に迫っていた。

読めば苦しくなるほど健気な彼女の手紙に、きちんと返事を書かなければと思いながら目の前の試験準備にあたふたとしていた僕は、一刻一秒を争ってしなければならなかった彼女への対応を何故か確実に後回しにしてしまった。

親友・鈴村との間に勃発した事件の責任は、総て軽率だった彼女自身の中にあった。そんな自分を到底許せない。そう頑なに思い込んだ星野宏美は自らの潔癖性を渾身の態度で僕に示すしかない、と考えたのだろうか。僕が期末試験に喘いでいた九月末頃、下宿に届いた長い長い一通の手紙に僕は痛恨の涙を落としたのであった。

『好き』とも言えず、手指を触れ合う事さえ無かった彼女とのプラトニック・ラブ。それは一陣の風に儚く散って行った僕の初恋の終わりだった。

\*\*\*\*\*

気落ちして、ぽっかり空いた僕の心を埋めてくれたのは矢張りテニスだった。

ほぼ時期を同じくして、恒例の秋の学生トーナメントが開かれた。それには200人を超える

選手がエントリーし、会期も一ヶ月に及ぶほどの大きな大会だった。初恋に破れて未だ日も浅い自分だったが、その悔しさをバネに善戦し、僕は一年生では異例のベスト32まで駒を進める事が出来た収穫ある大会となった。

後日、部の運営に対する態度やそれまでの大会における戦績などを評価され翌期の主将を言い渡されたのである。

杜の都仙台を訪れる冬は滅法早かった。テニスコートの南側には教養部と市街地とを一直線で結ぶ幹線道路が走り、その境界線上には数十本のプラタナスが植え込まれている。

一日の終わりにローラーを引く手が冷たくなって来る頃、一列に並んだプラタナス群の葉が品のいいココア色にその肌色を替えて行くと、北国の厳しい冬はもうすぐ其処だった。

\*\*\*\*\*

その頃、田舎の父親は手を出していた事業が上手く行かず、その金策に東奔西走していた。親元から遠く離れて生活する僕にその詳細を知る由も無かったが、月々の仕送り額が大きくばらつき始め、僕はそれを容易に推測する事が出来た。

六人の子供達を大過無く育て上げ、またそれぞれを有名大学に進ませた父親やおふくろの労に僕は素直に敬意を感じてはいた。

然し一方では、異常な迄の虚栄とその一つ裏に隠された幾多の画策を垣間見る時、其処には筆舌に尽くせぬ大人社会の汚泥があるのに僕は気付いて行った。まるで反面教師を地で行く父親に、間もなく二十歳を迎え様としていた僕は抑えられない懐疑心を日に日に強めて行くのもあった。

まるで空から絵の具を撒き散らした様に、定禅寺通りを赤や黄色に彩っていた欒並木が朽ち果ててその葉々を地上に落として行った。

遥か西の彼方に、屏風を立て掛けたかのように長々と立ちはだかる蔵王の連嶺も、もうとっぴりと真っ白い冬のベールを被っていた。道を行き交う車のスパイクタイヤがガリガリと音を立てながら乾いたアスファルトの路面を削り始めた頃、受験地獄から天上の楽園に上り詰めた僕の輝かしい年間は静かにその幕を下ろして行ったのである。



## 第2章 愛の虜（とりこ） 1. はがき

### 第2章 愛の虜（とりこ）

#### 1. はがき

仙台で初めて迎えたその年の冬は猛烈に寒かった。

成人の日だったその日、凍てつくような真冬の電車通りを烈しく行き交うヘッドライトに照らされながら僕は下宿に向かって只ひたすらペダルを漕いでいた。下宿生達は、もうとっくに帰っていた。

「ただいま帰りました。」

ガラス戸をガラガラと開けながら、僕は何時もの様に玄関を潜った。式典後、初めて啜えた煙草のせいか僕は普段にも増して清々しい気持ちだった。

「おかえんなさい。岡田さーん。随分と遅がったっちゃ。パチンコすかア・・・？」

と、丸出しの仙台弁で、風呂場近くから威勢のいい叔母さんの声がした。

「もう皆とっくに帰って来てっしや、晩ご飯終わったんだよわア・・・！」

今日はお目出ただからっしや、叔母ちゃん特性のオムレツよオ。たんと食べてけさいねエ・・・。」

「はい、わかりましたア・・・。」

僕は氷点下程に下がった自分の部屋に一旦戻ると、着ていた学生服を無造作に脱ぎ捨て普段着に着替えた。そして階下に降りて小便をすると、誰も居ない食堂で何時もの定位置に就いた。

色あせた布巾を取ると、オムレツ皿に半分隠れて一枚のはがきが僕の方を向いて置かれてあった。差出人は『藤本麗子』と書いてあった。

『俺の住所、どうして知ってるんだろう・・・？』

茶碗に飯をよそりながら僕は首を傾げた。食卓の上で葉書きを裏返し、そちらに目を遣りながら僕は横着そうに飯に箸を付けて行った。

\*\*\*\*\*

『突然書いています。仙台は木枯らしが吹いているのでしょうか？。雪はもう積もっていませんか・・・？。そう云えば、成人おめでとう。』

早いもので、岡田さんが其方に行かれてからもう一年。予備校も行かずに入っちゃうんだから凄イ！！。そう友人達と話しています。

宏美ちゃんとの事、鈴村さんから聞きました。あんな可愛い子を振っちゃったんですって・・・？。何という罪な人なんでしょうね。

私も今、三年に上がれるか否かの際どい試験を控え汲々としてます。岡田さんは・・・？

春休み、もし機会がありましたら下記にTEL下さい。

<0048・002・0023>

では又。 麗子』

中三で同級だった頃から僕は彼女の筆跡を良く知っていたが、その頃と余り変わらなかった。それは、珍しい黒インクの万年筆で余白を残さぬ程びっしりと書かれてあった。

今ごろ、如何して彼女から・・・？。 幾ら考えても、その理由が僕には判らなかつた。

その晩遅くから猛吹雪になった。翌日も降り続いて暫く止む事は無く厳しい寒さが容赦無く続いていった。音も無く深々と降り積もる粉雪は、この世の総てを掻き消してくれる白い妖精の様でもあった。

向かいの部屋から流れ来るギターの切ない調べにそっと耳を傾けながら熱いコーヒーを飲み、まるでCMの主人公にでもなったような揺ったりとした錯覚の中で、僕は未だ何の味もしない煙草に又一本火を付けた。

## 2. 忠告

---

### 2. 忠告

おふくろは、それでも『寒い、寒い』を連発していた。仙台とは平均気温で4、5度の違いはあるのだろうか、家の庭先では無数に咲いた梅の花が心地よいフェロモンの芳香を辺り一面に漂わせていた。

それは、僕が大学生になって最初の春休みの事だった。

僕は学年末試験を何とか無事終え、その足で帰省したものの一旦家に着いてしまうと四月初旬に予定していた春合宿の実行計画を練る事以外たいしてすべき事も無かった。

そんな或る日の夕方近く。僕は理容学校から戻った河田を駅前で捕まえると、近くの喫茶店で久し振りに旧交を温めていた。

そもそも、僕を『会長』呼ばわりした最初の男は彼であり、言わばその名付け親でもあった。従って僕は同窓の連中から『会長』と呼ばれる様になって久しかったが、彼からそう呼ばれる時が他の誰からよりも嬉しかった。

ひと通り世間話も一段落し、積もり積もった話は遂に佳境に入って行った。

「ところで会長よ、宏美ちゃんとはもうすっかりこれなの・・・？」

彼は僕にそう言うと、両腕を自分の胸の前で大きくクロスして見せた。

僕と星野宏美との一部始終について彼は概略知っており、彼に凡その察しはついていた。

「・・・うん、ま、そんなとこだ・・・。」

初恋を失いそこそこ時間が経っていたものの、敗北宣言の再確認をされるのは余り良い気分ではなかった。

「だけだよ、会長・・・。あいつも良く平気で罪作りをやってくれたものよ・・・。」

彼はそう言って僕に同情しつつ、事件の引き金を引いた鈴木を遠回しになじった。僕は未だ少し病む心の傷を舐めてくれた河田に感謝した。

「それはそうと、お前の方こそどうなってんだよオ・・・？。こっちだって変な話が有るんじゃないのか、オイ・・・？！」

その頃、妙にあっち此方と手を出してはトラブルメーカーとなっていた鈴木を暗に牽制しながら、今度は僕から彼に話を向けた。

「そうなんだよ、実は・・・。鈴木野郎、とんでもないちょっかい出すからさ。

あいつ、本当に何考えてんだろうね。片っ端から仲間の女横取りして・・・？」

河田にとっても恋仲だった藤本麗子が或る日突然、自分の視界から遠退いたのは唯一鈴木村のせいだと信じて少しも疑わぬ様だった。

「三行半（みくだりはん）叩きつけられて、全く情けねえたらありやしねえよ・・・！」

彼はふて腐れ半分そう言うと、口惜しそうに下唇を噛んだ。そんな彼を前に、『そう云えば、この間、その彼女から葉書きが届いてねえ・・・』とは口が裂けても言い出せなかった。

それにしても初恋の河田を捨て、あっという間に平然と鈴木村に乗り換えた藤本麗子とは、一体

どんな女なのだろうか？。その時僕はどうしても彼から聞いて置きたい強い想いに駆られていた。

「河田さあ、お前を振った麗子ちゃんて、どんな人なの・・・？」

届いた葉書きの事を気付かれないよう彼に訊くのは何処と無く後ろめたいものがあった。そんな僅かな動揺を見取られまいと、僕は未だ慣れ無い手付きで煙草を一本口にした。

「あれ、会長・・・。何時から吸ってんの・・・？」

僕は相変わらずゴホゴホと煙に咽た。

「あの子は、めっちゃ可愛いんだけどさ。とにかく我儘でねエ。決して悪い子なんかじゃないんだけど・・・。」

ま、それ以上は、そのうち鈴村にでも聞いてみろよ。もう俺の女じゃねえんだ。尤も奴だって何時まで持つかだけどね・・・？」

最後に彼は、まるで僻み丸出しの素っ気無い言い方になった。

溜まりに溜まった話にも少しずつ新鮮味と話題性が失われ、僕が席を立とうとすると、

「ちょ、一寸待って・・・。外れゴメンで言うんだけどさ。涙流すのは会長だからね。止めといた方がいいよ・・・。」

と、諭す様に僕に言った。

彼は僕の何気無い質問に、何か異なるものを敏感に感じ取っていたのだろうか。まるで先を見据えた様な彼の意味ありげな一言は、僕の心に深く確かな刻みを入れたのである。

### 3. 初めての来訪

---

#### 3. 初めての来訪

それは母方の実家で起きた不幸の為、僕が一人で留守番をしていた或る日の事だった。

突然掛って来た電話に出ると、

「あのお・・・、私、昭さんの中学時代の同級で、藤本と申しますが、昭さんは・・・？」

と、それはまさかの電話だった。

藤本麗子とは中三の時同じ組になっただけで話した記憶さえ無く、彼女が相当期間、河田の恋人であった頃から彼女とはもともと何の接点も無かった。

未練がましく追いつがる河田を呆気なく千切り捨てたかと思えば、次は平然としてあの鈴村とくっついて仕舞う魔性のような彼女を僕はむしろ嫌っていた。なのに、僕の家へ『遊びに行きたい・・・』という彼女の気紛れな提案をその日、僕はいとも易々と受け入れてしまったのである。

封建的な名残が強い我が家で、異性の来訪など言語道断だった。まして親の留守中になど・・・?!。当事者能力を遥かに越えて返事をした自分の身体は、その後しばらく小刻みに震え続けて止まらなかった。

彼女の来宅を待つ間、僕にはしておかなければならない事が幾つかあった。然しそれには余りにも時間が足りなかった。

通りへ出てコーラを二本だけ買うと家に戻り、僕はその時を待った。僕は自室で門扉の開く音を聞き、まるで恋する女性を待つかの様な胸の高鳴りを感じながら、近付く彼女の足音に耳を澄ましていた。

「こんにちは、藤本と申しますが・・・。」

部屋の手鏡で僕は七三に分けてあった髪に二、三度手櫛を入れた。

真っ白なブラウスに紺のブレザー、少しミニのスカートに黒のハイヒール。その日の彼女の立ち方は、如何にも清楚な女子大生を髣髴（ほうふつ）とさせた。

「やア・・・」

それでも、その場で僕が口に出来た最高の挨拶を済ませると彼女は行き成り、

「あのお・・・、一寸こちらへ廻ってもいいでしょうか・・・？」

と、背丈ほどもある山茶花の垣根の間を歩いて東側に面した庭の方に抜けて行った。家はいわゆる鯨が丘の高台の北東面に位置しており庭の東方向は全て開けていた。

街並みを取り囲む大自然のパノラマに感歎の声を上げる彼女に僕は、

「もう上がったら？」

と、庭からそのまま部屋に入っている様勧めた。

「ありがとう。そうするわ。」

彼女は大きな踏み石の上に乗って、そこで靴を脱ぐと、それを向こう向きに揃え直して家に入った。

「ご無沙汰しておりました。」

彼女は、畳の上で改めて両手をつき、

「あのお、それから・・・。」

と、携えていた黄色の花束をもどかしそうに僕に差し出した。それはフリーズヤの花だった。

\*\*\*\*\*

「ところで、今日、岡田さんのご両親は？」

彼女が訊いた。何時まで経っても人気の無い我が家の様子を怪訝に思っていたに違いない。急用で留守の旨を僕は彼女に告げた。彼女は最初それを『残念・・・』と言っていたが本当はほっとした、とその胸の内を正直に僕に明かしてくれた。彼女にも本来の笑みがこぼれ、用意したコーラをやっと口にした。

その日は快晴だった。座敷の襖も、又それをくの字に取り巻くガラス戸も全部開けっ放しにしてあった。田圃から吹き上がる風を腹一杯呑み込んで家の中は爽やかだった。

「あら、岡田さん・・・。ギター弾くの？」

違い棚の下に立て掛けてあった古びたギターを見ると、彼女は意外そうな顔をした。

「え、知らないの・・・？」

僕は少し誇らしげにそう言った。

「あら、そうなのオ?!。」

彼女はそれでもギターを弾く僕の姿を想像できないと云わんばかりの態度を取った。

「なら、岡田さん。今ここでなんか聴かせて・・・?。」

『ギターなんか、其処に置いておかなければ良かった・・・。』僕はそう思ったが、後の祭りだった。強がった以上、逃げる訳にも行かず僕は渋々それを弾いた。

弾き始めると、彼女は顔を小さく揺すってリズムをとった。彼女は疑惑から納得へとその表情を変えて行った。

旋律は、漂っていた柔らかい春の空気と調和して軽やかに舞い、そしてそれは真っ青に抜けた東の空に吸い込まれて行った。彼女は少し膝を崩して座っていた。手にしていたコップからコーラをまた少し口にした。そして、頷く様に僕が弾くのを聴いていた。

演奏が終わると彼女は精一杯の拍手を僕にした。僕は少し照れながらギターを置いた。緊張で少し汗ばんだ僕を見て、彼女はハンドバックから小さなハンカチを取り出しそれで拭くよう僕に勧めた。僕は汗を拭いながら彼女に言った。

「でもね、テニス後は指が震えちゃってさ・・・だめなんだよ。」

僕がそう言うと、彼女はすぐその訳を判ったのか二、三度優しくうなづいた。

合宿の最中に上京し、長兄の結婚披露宴で弾く予定になると僕が言うと、その後で構わないから近いうちに是非また聴かせて欲しいと彼女は執拗にせがんだ。

「チャンスがあればね・・・」

彼女の切望に僕は曖昧な言葉でその場を濁した。現実になんかそんな機会が二度とあろうとは思わなかった。

街中に正午を告げるサイレンの音が鳴り亘った。彼女はそっと右手首を返し、何気ない素振り

で腕にしていた小さな時計を見ると、僕に小声で暇乞いをして庭先へ出て行った。

来た時と同じ様に、庭の端に立って北から南の方角へ二、三度視線を遣ると其処で呼吸を深くした。

「春の合宿とギターの演奏、頑張ってるね。」

そう言いながら軽い会釈を僕にして、彼女は庭から門へと続く石段を降りて行った。僕は玄関で彼女を見送った。彼女はまるで春の日の散歩を楽しむかの様に、ゆっくりと門に向かって歩いて行った。

彼女は滑りの悪い門扉に両手を添えて、ガラガラっとそれを半分ほど開けた。見送る僕を確かめる様に振り返ると、頭をちょこんと一度だけ下げて門から出て行った。

『可愛い子だなあ・・・』

門の外の長い石段を昇りながら帰って行く彼女の足音が小さくなって消えるまで、僕はまるで放心したかの様にそれを見送っていた。

## 4. あなたの誤解は私の誤解

---

### 4. 貴方の誤解は、私の誤解

大学生となって二年目のシーズンは、テニス部主将として迎えた春の合宿からスタートして行った。

季節特有の風は連日の様に吹き荒れて練習の大きな妨げとなったが、春の陽射しは思ったより強烈だった。四カ月余りのシーズンオフで少しは人並みに戻った肌も、あっという間に又元の黒い褐色に染まって行った。

合宿が始まって丁度中ごろに上京し長兄の結婚式に出席した僕は、披露宴で予定通りギターを弾いた。宴の司会者が僕の演奏より顔の黒さを絶賛すると、参列者から爆笑を誘い満場の喝采を浴びた。

\*\*\*\*\*

体育会系に追いつき追い越せを目指した弱冠二年生の率いる執行部の態勢に議論は百出で、僕はキャプとしての烈しいプレッシャーに苛まれながら悶々とした日々を過ごして行った。

合宿から戻って一週間も経った頃だろうか。藤本麗子から二枚目の葉書きが届いた。それは過日の礼状だった。

それ以前から見馴れていた景観とは云え、庭から見る大展望は全く別の様で圧倒された事。折角の機会だったのに僕の親に会えなくてとても残念だった事。とは云え、誰に気遣う事なく呑気に話せて良かったと云う彼女の正直な気持ち。そして、ギター演奏をもう一回必ず聴かせて欲しい、と前回と同じ様に黒インクで丹精に書かれてあった。

\*\*\*\*\*

講義へ出る時間は日毎に減って行った。五月を過ぎると、それはもう皆無に等しかった。終日のテニスとその帰り際にするパチンコ。夕食後の下宿麻雀。ギターを弾きながら沸かして飲むコーヒーとタバコ・・・。

それは、まるで版を押した様に規則正しく充実した日々だった。しかし、何を遣っても満たされない大きな心の空白が僕にはあった。

何のけれんみも無く素直で優しくかった初恋の人を、自らの若さ故に失って早や一年が経とうとしていた。春の淡雪の様に儂い初恋だったとは云え、僕の心にぽっかり空いた風穴は未だ完全には塞がってはいなかった。

友人達の多くは近隣の女子大生を誘い出し、流行りの合コンやダンスパーティをしながら上手く恋を掴んでいたのに、そんな器用な社交術は僕には無かった。

僕は星野宏美への思慕を容易に断ち切る事が出来ず、ヨリを戻せないかと未練がましい男の本音を幾度かペンに託して見たが、投函するには至らなかった。

『あーア、誰か恋人いないかな・・・』

六畳一間だけの、ただでさえ息苦しくなるような下宿に独り閉じこもる時、二十歳（はたち）の僕がそう思うのはむしろ当然の事だった。

そんな五月半ば。梅雨時の様に冷たい雨が降り続いていた或る日の夕刻の事だった。 夕食



を貰っていた僕は下宿の叔母さんから一通の手紙を手渡された。降りしきる雨で差出人の名もすっかり擦れてはいたが、そこには黒い字で「藤本麗子」と確かに書いてあった。

途中だった食事を後回しにすると、僕は階段を上り手紙を隠し持つ様に部屋へ戻って行った。

乾いたタオルでズブ濡れの封筒を拭き、ギター用に伸ばしておいた右指の爪先で糊面を丁寧に剥がしながらそれを開封して行く僕の指先は、判然としない期待と不思議な興奮で小刻みに震えていた。

『手紙・・・って、何だろう・・・？。』

僕には良く解らなかった。然しその答えは黒いペン字でしたためられた数枚の便箋の中にあった。

『五月晴れが欲しいのに、毎日梅雨のような雨に祟られて気持ちがブルーになってしまいます。』

岡田さんはテニス・テニスの連続なのでしょうか。真っ黒になってご活躍されているその姿が目映るようです。大所帯の伝統的なクラブのキャプテンとして、そろそろ風格も出て来た頃かしら？。

\*\*\*略\*\*\*

実はわたし、いつ岡田さんに言えば良いのか、とても迷っている事があります。どうせ仲の良い岡田さん達の事です。そのうち話が伝わるのではないかと思い、今日は今の自分に出来るだけ正直に書きたいと思っています。

既にご存知の様に、私は岡田さんの幼馴染みであり親友でもある河田さんや鈴木さんとお付き合いをしてきました。河田さんとは暫く前になりますが、もう何もありません。

鈴木さんとは大人の交際をしています。でも、最近特に空しく思えてならないのです。鈴木さんには、同じR大に私とは別の彼女がいるようです。そして彼は何時でもその女性と私を比較しています。

私・・・、そんなの、もう嫌なんです。もっと対等な恋をしたい。愛されたい。私だって、年頃の女ですもの・・・。

河田さん、鈴木さん。そして、その次に私が選んでしまった岡田さん...。何でこうなってしまうのか、巡り合わせの余りの悪戯（いたづら）に呆れています。

ねえ、私って魔性の女なの？

でも、でも・・・。もう私の中で、新しい旅は勝手に始まってしまった様です。

\*\*\*略\*\*\*

今こうしてペンを走らせながら投函すべきか否か私迷っています。大雨で宛名が全部消えてしまえばいい、とも思いつつ...

岡田 昭様

1968年5月16日

麗子』

そんな熱いラブレターをもらった事など僕に有る筈も無かった。僕は嬉しくて幾度も幾度もそれを読んだ。

鈴村の後でもその替わりでも何でもいい。寄せてくれた彼女の愛に、僕は今にも天に舞い上がる心地さえしたのである。

しかし・・・、僕にはそれを容易に呑み込めないそれなりの理由があった。

あの秘密の地下室で交し合った棲み分けの密約と其処で培われた男の友情は一体何だったのか。そんな素朴な疑問と抵抗が強烈に僕を掴んで離さなかった。

藤本麗子という女性が投じた愛の波紋を、友情と云う名のポケットに仕舞い込んで施錠すると、何事も無かった様に僕はまた普段通りの生活に戻って行った。

\*\*\*\*\*

鬱陶（うっとう）しく続いた五月の長雨も何時の間にか通り過ぎて、時は早くも真夏を思わせる暑い六月になった。あの悩ましげな手紙が僕の生活から影を潜めて行った頃、藤本麗子は或る晩、とうとう下宿に電話を掛けて来た。

しかし熱いラブレターを貰った時の過日の興奮がまるで嘘の様に僕の心は醒めていた。それを察知したかの様に、

「岡田さん、怒ってるんでしょう？。たいした用も無いのになって！」

と彼女は言ったが、その声は妙にあっけらかんとして陽気だった。

「ねえ、手紙読んでくれた・・・？」

「ああ・・・」

「なら、如何して私に返事呉れないの？。好きとか嫌いだとか・・・？」

赤裸々にそこまで喋る彼女に僕は呆れ、一瞬たじろいだ。然しそのまま黙る訳にも行かず、僕は少しずつ反駁を試みた。

「そう言ったってさア、実際にはなかなかそうは行かないんだよ。判るだろオ、その位・・・？」

僕は言外の理解を彼女に期待するばかりだった。その半分も伝える事が出来ず実りの無い問答が続いた後、僕は苦し紛れに言った。

「兎に角、止めてくれない？。手紙とか電話とか・・・！」

「じゃないと、俺さア・・・。君の事、本当に・・・ほんとうに誤解しちゃうかも知んないから・・・。」

怯（ひる）まず言った言葉の最後に、僕はその時の本音ともとれる心の一部を吐露してしまった。そこまで言うとは何か正体不明の物体に喉もとを締め上げられる様な、何か一種異様な気分に僕は陥って行ったのである。

電話は突然『ブーッ...』という電子音が暫く鳴って、そして切れた。

実に後味の悪い電話だった。途中で切れたと云う事も確かにあった。然しそんな事では毛頭無い。折角向こうから惚れてくれた千載一遇のチャンスだった筈なのに・・・、と相変わらず皮被りの自分に僕は無性に腹を立てた。

それ迄、自分の意識の中には不思議なくらい藤本麗子は存在していなかった。なのに・・・、その日の出来事は、逆に彼女の存在を極めて明確な形で自分の脳裡にインプットするという皮肉な結果を招いてしまったのである。

\*\*\*

\*\*

それから幾週間かが経った。それを待つ必要など何処にも無かった筈なのに、僕は藤本麗子からの連絡を首を長くして待っている密かな自分に気付いていた。然しその間、彼女は葉書きも電話も何も僕にしては来なかった。

『これで良かったんだな、結局・・・。』

僕は次第にそう思い始め、僕のスクリーンから彼女の影がまた少し消え去ろうとしていた六月末の事だった。

遂に彼女から僕に手紙が届いた。然もそれは速達だった。

『 \*\*略\*\* 。

途中で切れた電話で、岡田さんは河田さんや鈴木さん達との男の友情の事ばかり気にしていました。女である私には良く分かりませんが、それはきっと掛替えの無いものなんだろうと、むしろ羨ましくさえ感じています。

でも・・・。貴方自身の私に対するお気持ちは本当は何処にあるのでしょうか？。私との交際をもし嫌がるのなら、その理由を友情のせいになんかせず、正直に『お前のことは大嫌いだ・・・。』とはっきり言って欲しいと思います。

\*\*略\*\*

切れる電話の少し前、岡田さんが言われた言葉。覚えてますか・・・？。私なりにその意味を考え、答案用紙にその答えを書きました。それは、貴方の誤解は、私の誤解です・・・。

麗子』

## 5. 迷い

---

### 5. 迷い

暑い夏だった。そこら中に泣きわめくアブラゼミの声がそれを一層掻き立てていた。

丁度その頃、僕は容赦無い灼熱の中で夏合宿を迎えていた。僕の主将振りもだいぶ板について、舅（しゅうと）の様だった先輩達もやっと執行部の運営に追従してくれる様になってくれた。合宿の打ち上げ直後に開催された恒例の夏の大会で、僕はシングルスで過去最高のベスト8まで進む事が出来た。一方ダブルスでは相棒・久保木の強烈なフォアハンド・ドライブが冴えてベスト4に残る等、周囲から大きな注目を集めた。

テニス一色の日々と思考力をも奪い取る様な気だるい夏の暑さは、僕からあの知恵の輪の様に難解だった手紙の事を少しだけ忘れさせてくれた。然しそれ以降三日に一度は届く様になって行った藤本麗子からの手紙は、それ等総てより遥かに勝っていたのである。

大学とクラブの公式行事を全部済ませると、僕はその年、七月下旬には帰省していた。

家では、親父の度重なる事業の失敗とそれに伴う膨大な借金問題が相変わらず未解決のままだった。親父とおふくろが何気なく交わす日常会話の中にも、何処となく以前在った温かみが薄れていた様に僕には思えてならなかった。

僕が大学やテニス、或いは下宿生活の様子を誇らしげに報告してみても、本心から捕り付けてくれぬ程ゆとりの無い何か張り詰めた冷たい空気が何時も家中に染み渡っていた。僕は扇風機も無く、ただクソ暑い自室に終日たてこもり、いずれ来る彼女からの督促にどう対処すべきかを真剣に思い悩んでいたのである。

\*\*\*\*\*

旧盆が近ずいた頃、彼女から案の定電話があり僕は街角の喫茶店で藤本麗子と会う事になった。期せずして彼女の来訪を受けたあの春休み以来、凡そ四ヶ月ぶりの再会である。

ちょうど一年前のほぼ同じ頃、同じ場所で初恋の星野宏美と最後の時を過ごした残像が僕にはまだ鮮明にあった。

「こんにちは、岡田キャプテン！」

彼女はニコニコ顔で僕を冷やかすと、夏らしいニットのショルダーからハンカチを取り出し顔を軽く拭った。

「冷やかすなよ。」

「冷やかしてなんか無いわ。それより、岡田さん、部屋に扇風機あるの…？」

「そんなの、ある訳無いよ…。」

僕は慫然としてそう言うと、

「ウフフ…。」

彼女は肩をすぼめて悪戯っぽく笑った。

自分と同じ年の、そこそこに可愛い女とお喋りするの、何処かふわふわと浮ついた気分になって決して悪い気はしなかった。然し、その時の僕に結実しない話を何時までもする積もりは

無かった。ややせっかちに僕の方から口火を切った。

「誤解だの六カイだのって、もう止さないか・・・？」

彼女は口に啜えたストローを離すと、無言のまま白と黒の境界のはっきりした大きな瞳を僕に向けた。それは、

『ホントに・・・？。本気なの・・・？。』と自信たっぷりに、まるでそう言いたげだった。

次の瞬間、彼女は、

「馬鹿だなあ...。」

とだけ僕に言う一つ言葉を呑み込んだ。

『どうせ貴方はもうとっくに私の虜（とりこ）なのに...。』彼女のそんな強かな呟きが僕に聞こえて来る様だった。

「馬鹿って、何だよ・・・！」

店内でくつろいでいた幾組かの客に気遣いしながら僕は少し大声で言い返す。

「だって、そうじゃない！。岡田さん、貴方は、二言目には親友だの友情だのって、少年みたいな事ばかり言うけど・・・。もう子供じゃないんだから、少しは自分に正直になったらどうなのヨ！？。」

そんな彼女の自信めいたものは一体何処から来るのか、僕にはさっぱり見当もつかなかった。情けない思いだった。しかし男を呑み込むような彼女の不思議な魔性に僕はぐいぐいと引き込まれて行った。

結局その日、僕は態度保留のまま彼女と別れると、帰省中だった山野の家に立ち寄り懐かしい秘密の地下室で久し振りに旧交を改める事が出来た。その中に僕と星野宏美との経過・結果は当然含まれていた。

同じ釜の飯を食った鈴村が大きくその原因の一つになってしまった事と、その後の思わぬ結末を彼は我が事の様子に嘆いてくれた。また鈴村と藤本麗子との気になる関係について山野は十分な情報を持っていた。そしてそれは僕が彼女から直接聞いた懺悔（ざんげ）話しとほぼ合っていた。然し俄かに築かれつつあった僕と彼女との新たな関係は、さすが情報通の彼にも推察すらつかなかった。

藤本麗子と僕との怪しげな状況について、本当は最初に河田と相談するのが筋だと僕はその時思っていた。しかし僕はその答えが見え見えだった彼を敢えて避け、中立だった山野に一連の流れを開示して行ったのである。

僕の話しに淡々と耳を傾けながら、彼は右の人差し指で眼鏡の縁を何度もチョコンと突き上げた。予測の中には存在しなかった思い掛けない難題に彼は即答を避けた。僕に返す言葉を探しあぐねて難渋の色を隠せなかった。それぞれ別の一点を見つめる静寂が僕には息苦しい時間に思われた。それはあたかも診察を終え、医者から病名の宣告を待ち受ける患者の心境に良く似たものでもあった。

とうとう彼はその重い口を開いて言った。

「会長、麗子ちゃんの事…、大好きなんだろう…。なら、自分の思った通りにすれば良いじゃないか。余計な心配すんなよ。河田と鈴村には俺の方から良く話しとくからさ…。」

彼は、その時の僕の深層心理を巧みに読んでいた。詰まらない事に拘り続け、容易に決断しない僕の代りにその答えを全部引き出してくれた。

「今度こそ、自分の化けの皮を剥がしてみるよ。山野、有難う！」

きっぱり彼にそう言うと、僕は地下室を後にした。もう午前零時を廻っていた。外は凧いでいて蒸し風呂の様に暑かったが、僕の心は妙に清々しかった。

## 6. 初めてのキス

---

### 6. 初めてのキス

その翌日、僕は夕方を待って外へ出た。藤本麗子を呼び出すと、彼女の家の近くにあった交番前で彼女を待った。

間もなく彼女は小走りにやって来た。少し踵（かかと）の上がったサンダルを履き、丈の短いスカートに膝小僧を出したカジュアルな格好である。もはや敏感に何かを感じ取っていたのだろうか。僕が未だ何も言っていないのに、彼女は僕の答えを予知していた様だった。

約束の場所で待つ僕に近づいて来ると、彼女は俄かにその表情を崩し、

「また、どうしたの、急に電話なんかしてきて・・・、まだお盆の真っ最中よ・・・？」

と、見え見えの駆け引きで僕の心を擦（くすぐ）って来るのである。

僕は何も言わなかった。言葉を留保したまま僕は交番前の通りを北に向かって歩き出して行く。一歩出遅れた彼女はつかつかと小走りに寄って来て、歩く僕の横にぴたりと付いてくる。

不敵な笑みを見せながら、

「ねえ、岡田さん、本当にどうしたの。今日は少し変よ・・・？」

彼女は白々しくそう言うと、尚もしらばっくれている。全くふざけた、趣味の悪い女だと僕はその時思った。僕が何を言わんとしているのか、それからどう展開して行くのか彼女には皆お見通しの癖にと、僕はそんな彼女が少し小憎らしくさえ思えたのである。

大地を炙（あぶ）る様に照らした灼熱の太陽は鯨が丘の向こうにとっぴりと沈んだが、脚の永い真夏の残照は、西の空にもくもくと湧き上がる入道雲を未だ美しい茜色に染めていた。

僕は、彼女にまるで誘導でもされているかのように然も誇らしげに言った。

「もう、俺、決めたよ！」

「決めた、って何を・・・？」

「とぼけんなよ！。今日の俺、真面目なんだから・・・。」

「...！！？」

「俺さ、愚図ぐずするの、もう止めたよ。あの後、遅くまで山野とも相談してさ。俺、今から君と真剣に付き合う事にしたよ！」

幅数メートルほどのまま北から南に流れる川に沿う様に一本の未舗装の車道がまっすぐと延びている。その道をゆっくり北に向かって歩きながら、自分を雁字搦め（がんじがらめ）にして来たそれまでの自分から訣別する様に、僕は一言一言をかみ締める想いで話して行った。

届きそうで届かなかった手の先のロープにやっと届いた想いだったのだろうか。急にその手を僕の左腕に絡ませ、くの字型に折り曲げて来た彼女の仕草から僕はその時の彼女の確かな心中を感じ取る事が出来た。

僕も嬉しかった。山野の言う様に、ややもすると陰湿だった自分を解き放ち持ち前だった陽気な自分に戻れたような晴れがましい気分にもなった。

「良かったわ。」

「うん、お互いにね・・・。」

僕達二人は、もうずっと以前から恋人同士だった様に身体を擦り寄せながら川沿いの一本道を歩き続けて行った。

闇を照らしながら走り去って行く車のヘッドライトを避けるように、彼女は時折その身を半分僕の方に返し、少し下から僕を見上げると何処か甘えた仕草を僕にわざと見せた。

「ねえ、本当に麗子のこと好き…？」

彼女は少しだけ歩速を緩めると、判りきった事を僕に訊いた。

「ああ、好きだよ。大好き！」

「なら・・・、麗子を今直ぐ抱いて!？」

真っ暗い路端で立ち止まり、急に僕に向き合うと彼女は赤裸々にそう言った。

「いいの、して・・・？」

「...・・・。」

彼女は無言で頷くと、そっとその目を瞑った。

僕は彼女の両肩を軽く抱き寄せ彼女の唇に僕のを合わせた。それは、ふっくらとして柔らかかった。彼女が僕の背中に両手を回し二人の身体が密着すると、彼女の豊かだった二つの脹らみが僕の胸で潰れる様に触った。彼女は僅かに開いたその唇から滑（ぬめ）った長い舌を突き出し、控え目だった僕のに絡めた。僕も同じ様にそれをやった。

僕達は無我夢中で抱き合い、互いの唇を烈しく吸った。息苦しくなってお互いから身体を離れた。僕達は微笑み合うと今度は向きを南に変え、来た道をまた戻って行った。

右から聳（そび）え立つ鯨が丘と、そして左には長大な阿武隈の峰々が創る谷合いを流され行く小石の様に、二つの影は時に重なり合って闇の中に遠く消えて行った。

その夜の出来事は、僕には生まれて初めての事だった。想像を遥かに超えて甘美だったベーゼの味を占めた僕は、掌（てのひら）を返した様に急速に彼女の虜（とりこ）になって行ったのである。



## 7. 夏の終わりに

---

### 7. 夏の終わりに

「明日の午後、家に来ない・・・？」

別れ際にそう言い残した彼女の唐突な誘いに、僕は突拍子も無く浮ついた気持ちになっていた。

「そんな事して、叱られないの・・・？」

逆に不安を懐いた僕は彼女にそう訊いた。

「何心配してんのよ、岡田さんたら！。大丈夫よ、家は・・・。」

異性を家に連れてくる事は愚か、そんな話し自体タブーだった家に育った僕には、寧ろ後ずさりする気持ちさえあった。わくわくして涎（よだれ）の出そうな自分を必死で隠しながら、「あ、そお・・・。なら、行くよ。」

と、あっさり返事をして僕は彼女と指を切り、その日は別れた。

\*\*\*\*\*

先祖の霊をお送りするまでは外に出掛けるものではない、等とこっ酷く嫌味を言われながらも、

「ちょっと高校時代の友達に会って来るから・・・」

などと真っ赤な嘘を親につき、次の日の午後、僕は約束通り彼女の家を尋ねて行った。

彼女の家のある所は大体分かっていたが、実際に行くとなると結構判り難いものである。

前日の夜、待ち合わせをした交番前の通りから車が一台やっと入れる程の狭い路地が一本、北西方向にあった。その先はちょうど星野宏美の生家である社宮にも通じていた様だ。

その周辺は閑静な住宅街と云うよりも、木造の古びた家屋が軒を寄せ合う様にただ無造作に建ち並んでいる処だった。

『藤本』と木彫りされた表札の掛かった門前で、僕は着ていたシャツの裾をジーンズの奥にしっかりと押し込むと格子戸になっていた門扉を静かに開けた。庭は広く、季節の花々が今は盛りと咲き誇っていた。其処を直進すると右手に玄関口のある母屋らしきものがあった。左側にはひろ長い廊下が延びていて、その先に増築されたのであろうか、真新しい二階家が建っていた。

「今日は、岡田と申しますが・・・。」

僕は玄関の扉を開け、やや緊張してそう言った。

土間の向こうは我が家のような障子があり、その真中には透通しのガラスが嵌っている。奥には彼女の父親だろうか。此方を向いて座っていたが、無愛想な人である。直ぐ飛び出して来たのは彼女の母親だった。

「あーら、どうも・・・。岡田さん。良く来て下さって・・・。私、麗子の母親でございます。いつも麗子が我俵ばかり言ってますでしょ？。ほら、お父さん。岡田さんですよ・・・！」

障子を開け畳の上で正座した母親は、そう言いながら初対面の僕を紹介してくれた。

「初めまして、岡田と云います。お邪魔致します・・・。」

僕は、改めてそう言った。

我が家とは違い、父親には何故か威厳を感じなかった。少し腰を上げると遠慮深そうに僕にちょこんと頭を下げた。

その間、母親は離れに繋がる廊下を小走りに走って行く。階段下の踊り場に着くと、  
「れいこォ・・・。岡田さん、見えましたよォー...。」

大きな声で彼女を呼んだ。

二階の東側に面したガラス窓が勢い良く開くと、其処から彼女が上半身を乗り出す様に下を覗いた。

「岡田さーん、ここよ、ここ・・・！」

大袈裟な手振りを交えながら、自分の部屋はここだから早く上がっておいで、と逸（はや）る僕を誘うように言った。

「岡田さん、さあどうぞ。こちらから・・・。」

母親はそう言いながら、未だ玄関先に突っ立つ僕を離れに導いた。彼女は灰色の絨毯（じゅうたん）を敷きつめた階段をドタバタと降りて来ると意味不明の怪しげなアイコンタクトを僕に送った。

「お邪魔しまーす・・・。」

僕は誰にともなくそう言うと、母親に軽い会釈をし、彼女の後に付いて狭い階段を上がって行った。

「どうぞ、ごゆっくり・・・。」

母親は優しく僕に声をかけ、繋ぎ廊下を母屋の方へ戻って行った。

『家が変わると、こうも違うものか・・・？。』僕は家風の違いを目の当たりにし、余りにも遅れていた我が家の文化に大きな嘆息を吐いた。

彼女は小走りに階段を駆け上がって行った。部屋のドアを開けると外側で僕を待ち、  
「狭苦しい部屋ですが、どうぞ・・・。」

そう言ってフローリングされた部屋に僕を迎え入れた。

そこは六帖ほどの広さで、家具類が所狭しと置いてあった。彼女が言うように確かに息苦しい感じは否めなかったが整理整頓は良く為されていた。

ドアを入ると右奥には、木目模様の整理筆筒が置いてあった。その左には姿見の鏡と化粧台があった。その手前では、軽快な電気音を響かせながら回転する水色の扇風機が、部屋一杯に涼を運んでくれていた。化粧台の横の僅かな隙間にギターがあった。部屋の中央には小さなソファと籐のテーブルがセットであった。

僕はソファの奥に腰を降ろした。その背後にあった小さな出窓からは、あの阿武隈連山の南端がわずかに見えていた。

\*\*\*\*\*

彼女は手入れの行き届いた床の上に少し膝を崩して座りながら、くすくすと笑みを浮かべて僕

を見ていた。それ迄の永いブランクがまるで嘘だった様に、二人の話は愉快地弾んで、尽きる事は無かった。

またたく間に時は過ぎて行った。

僕は立て掛けてあったギターに思わずその目を遣った。彼女は僕と交わした春休みの約束をしっかりと覚えていたのだ。まさかあの時の約束を本当に果たすことになるとは夢にも思わなかったが、僕は公約通り彼女の前でそれを弾いた。

夕刻になって僕が時計を気にすると、

「ねえ、家でご飯食べてかない…？」

と、彼女は僕を夕食に誘ってくれた。

「いや、初めてだし…。今日の所は帰るから。」

僕がそう断ると、彼女は急に寂しそうに俯いた。彼女の誘いは執拗だったが僕も頑なにそれを辞した。

間も無く僕は席を立てて帰ろうとすると、

「じゃ帰る前に、これは…？」

と言いながら、その可愛い唇を尖らせ僕の前に突き出した。

何とも露骨な女だと僕は啞然としたが、思い切りの悪かった自分にとってそれは寧ろ格好な彼女の振る舞いではあった。

彼女はソファに這い上がって来て僕の傍に来ると、上体を絡ませ自ら僕に抱擁を催促した。

僕は、前の日の晩を再現する想いでふくよかに熟れていた麗子の身体を抱いた。そして、その滑った唇を再び吸った。

二人の恋は未だ始まったばかりなのに、余りにも激しく甘美に流れる時間に僕は酔いしれて行った。初めて招かれたその日に、神聖な彼女の部屋のソファの上に横臥して、僕達は稚拙だが時を忘れる程の激しい絡み合いを続けたのである。

決して口にしてはならない禁断の実を食べてしまったのだろうか。それは大人への分水嶺と知りつつも、強烈な罪の意識に苛まれながら僕は彼女にその日の別れを告げた。

外の暗さに驚いた。鳴り止むことを知らない蝉時雨（せみしぐれ）と、凧いで蒸し風呂のように湿潤なむし暑さは、すっかり上気した僕の心と身体を少しも冷ましてはくれなかった。

僕には『帰仙』と云うタイムリミットがあった。次の日もそして又次の日も、場所を替えながら時を惜しむ様に僕達はデートを重ねて行った。会っては抱き合い、抱かれないが為に会う。そして、又そうしなければ決して別れられない二人に最早なって行ったのでもあった。

## 8. 初夜

---

### 8. 初 夜

今日こそは帰るから・・・と幾度も言いながら僕は麗子と離れる事がなかなか出来なかった。結局僕が仙台に戻ったのは予定より数日遅れの九月初め頃である。

真夏の甘い果汁を腹一杯呑み込んで来た僕を待ち受けていたのは、現実と云う辛酸だった。灼熱と少雨のため、コート表面は焼けただれて捲れ上がり、その修復には莫大な経費と労力を要してしまった。僕はクラブ責任者として各方面から叱責・罵倒されたが、僕に弁解の余地は無かった。

夏の終わりの数日間を僕は確かに悔いた。しかし、それは同時に僕と彼女との眩く愛が永遠に記憶された記念すべき日々でもあった。

\*\*\*\*\*

九月末の期末試験は僕にとって相変わらず辛いものではあった。然しそんな事より、幾ら呼んでも聞こえない彼女との距離に耐え抜く術を僕は探しあぐねていた。

彼女は三、四日に一度は必ず僕に手紙を書いてくれた。そしてその間隙を縫う様に掛けてくれた長距離電話は、淋しがり屋の僕を精一杯慰めもしてくれた。しかし僕はあれ以来、彼女の弾む様に柔らかなあの肌の感触と温もりを到底忘れる事が出来ず、それはややもすると激しい性衝動に変わる事さえあった。

僕は彼女に書いた手紙の中で、『どうしても来仙して欲しい・・・』と僕の熱い胸の内を何回か打ち明けたが、彼女の返事は整然としていて簡潔だった。それは、

『仙台へは往復するだけでも一日掛かりで難しい。一泊泊りはなお難しい。』  
と云う内容で、僕は秋の大会に向かって高揚していた気も削がれる程幻滅の悲哀に打ちひしがれて仕舞うのであった。

\*\*\*\*\*

高く、蒼く澄み渡った空と凜とした空気の中で秋のトーナメントは華やかにその幕を開けて行った。シングルス・ダブルスとも初シードのプレッシャーを跳ね除けながら、僕は順調に勝ち残って行った。

コートサイドを囲うプラタナス群が上品なチョコレート色にその衣を塗り替え始めた十一月初旬のとある土曜日の午後。僕はシングルの準々決勝でファイナルセットに纏れ込み、二時間半に及ぶ大接戦を演じていた。試合は {6 - 4・3 - 6・7 - 5} で辛勝し、僕はベスト4に勝ち名乗りを上げた。

ゲーム終了後、僕は疲労困憊で勝利に酔いしれる少しのゆとりも無く、コートサイドの草むらに唯だ天を仰いで横になっていると、ダブルスのパートナーでもあり相棒の久保木が寄って来て、

「岡田よ、やっぱ、お前すっげえな・・・。良くやったよ、ご苦労さん。

講義、ダテにサボってねえな、見直したぜ。ウアハハハ・・・。」

と彼らしい言葉で僕の健闘を余す所無く称えてくれた。

「ところでさ、お前の試合。正体不明の女がじっとお前を見てたんよ、フェンスの向こうで……。何だろうね、あいつ？。結構肉感的だったけどなあ……。岡田、お前、やってて分からなかったんか……？」

試合中の僕に気付く筈も無い。彼の珍しく神妙な話を聞く内に、その女性とは、ひょっとするとあの藤本麗子では無いかと僕は思い始めていた。詳しい確認を取るべく僕は更に訊いて行った。

「身長は？」

「ええと、160cm位か、精々もうちょっとかな。」

「どんな服……？」

その質問に、彼は『うーん……』と唸って腕を組む。

「あれは……。そうそう。確か、らくだ色のコートだったよ。」

僕はそれまで彼女の夏姿しか見た事が無く、そう云われても正直ぴんと来ない。然し直感でそれはほぼ彼女に間違い無かった。

「髪は？」

「セミロング位」

「ところでさァ、彼女、いい女だった……？」

「まあな。……？！。バーカ、お前あんまり調子乗んなヨ！」

僕と久保木は腹を抱えて草叢を転げ回ったのである。

その日、全日程を終了させると裕福だった久保木から少々の金を拝借し、僕は正体不明の女性を探し歩いた。

陽はとっぴりと落ちて、教養部キャンパスに歩く人影は疎らになっていた。

もはや初冬のように寒々しいキャンパス内のバス停に、彼女は確かに真田の言う通り、らくだ色をしたコートの襟を立てて独りぽつんと佇んでいた。僕がもし探し当てなかったら、一体どうする積もりだったのだろうか。僕には彼女の本心が良く分からなかった。僕は背後から彼女の肩をポンと叩いて声を掛けた。

振り向きざまにちょっと頷いただけで、彼女はその表情を余り変えなかった。

自転車通学だった僕は、仙台駅行きの市営スに彼女を乗せるとペダルを必死に漕いでその後を追った。西公園の急坂でバスに離されたが、次の赤信号で充分追い付く事が出来た。

僕達は予め指定した一番丁のとある交叉点で一緒になった。そこで醸し出される一種独特の華やいだ雰囲気には彼女は幾分か気を取り直してくれたが、押並べてその表情は冴えなかった。

平然とどぎつい言葉を吐く割りに、その日の来仙は彼女にとってかなりの負担だったに違いない。宿泊の話しをすると、それまで見せなかった苛立ちを彼女は一段と漂わせ、僕に支離滅裂の事を言って駄々を捏ねた。

僕の『城』に忍び込もうよ、と言う僕の危険な賭けに彼女は初め難色を示していたが、終いには安堵の表情でその提案に従ってくれた。女心を読み切れなかった未熟な自分に少々僕は腹を立てた。

行き付けの定食屋は学生達でごった返していた。其処でたらふく夕食を摂ると未だたっぷりあ

った時間（ひま）つぶしの為、喫茶店に入った。

下宿が寝静まるまで、彼女を連れて部屋に入ることは不可能だったからだ。

その頃になると、彼女は何時もの朗らかな女性に戻ってくれていた。エポックだった夏の終わりからその日まで、凡そ二ヶ月間のお互いに未知な部分の情報を交換し合う。話は尽きない。二人だけで過ごす夜のため、たった一杯のコーヒーで夜が更けて行くのを僕達は只ひたすら待った。

深夜近くになって店を出る。目抜き通りを闊歩する学生達の数も落ちて、アーケードを吹き抜けて行く風の余りの冷たさに僕達は驚いて身を震わせた。

自転車を曳きながら初めて二人で歩いた晩秋の東一番丁を北に抜けて行くと、暗闇の中に噴水の止まった市役所がある。下宿までずっと歩き通すのは大変だからと、僕は後部の小さな荷台に彼女を横向きに乘せた。二人乗りは初めて、と彼女は少し怖がったが両腕を僕の腹に巻きつけ、冷え切ったその頬を僕の背中にしっかりと付けて来た。ペダルは少し重くなったが、冷たい風を切りながら北に向かって僕はひたすらそれを漕いで行った。

自転車に乗りながら、僕の城は母屋の二階だから深夜とは云え部屋の中に入っているまで絶対音は立てるな声も出さな、と散々僕は彼女に言い聞かせる。分かったから大丈夫、と彼女も自信満々に太鼓判を押したのである。

母屋は既に寝静まっていて真っ暗だった。

闇に響く心臓の博動を聞きながら、僕は玄関の引き戸をそっと開けた。まだ生暖かい室内の空気が吸い出される様に冷えた戸外にどっと流れて行く。

今がチャンスだから早く靴を脱げ、そしてそれを手に持って急いで入れ、と僕は打ち合わせ通りに合図した。彼女はただ黙って僕の指示に従った。滑り易い廊下と狭くて急な階段で転ばないかと僕は案じていたが、大丈夫だった。

「麗子、もう厭よ！。こんな想いするのは・・・。」

らくだ色のトレンチコートを脱ぎながら、彼女は開口一番そう言ったが顔には笑みがこぼれていた。もし、下宿の叔父さんやおばさん達にバレたら・・・？と思っただけで身の毛がよだつほど、それは僕にとっても危険な大仕事だったのである。

僕は押入れから古新聞を取り出すと机の下にそれを敷き、その上に真新しい彼女のポンプスを置く。寒々しい部屋で、僕はすぐ炬燵のスイッチを入れ電気ポットに電源を入れた。

彼女は未だ冷たい炬燵に膝を立てその身を屈めながら、六畳間の周りを舐める様に見渡し、

「この部屋ったら、なーんにも無いのね・・・。うふ、ふふふ・・・」

と、彼女は得意の笑みを浮かべ早速僕を冷やかした。

緩やかに至福の時は過ぎて行った。長旅の疲れのせいか彼女は二、三度生あくびをした。僕とて同じだった。増して僕には翌日、大事な準決勝が控えていたのだ。

少しは寝なければ、と炬燵の横の万年床に彼女を寝かせる。彼女はコートを脱いだだけの格好で、男臭い布団にその身を横たえ首だけ覗かせると、

「ねえ、おやすみは・・・？」

何時もの様に僕にキスをねだった。

僕は炬燵から出て彼女の側に行くと掛け布団を剥いで、横たわる彼女を抱いた。彼女の顔はま

だ氷の様に冷たかったが、脹らみのあるその柔らかな身体は心地良い温もりを僕に伝えてくれた。

僕が彼女の心くよかな胸の高なりにそっと右手を這わせ、マシュマロの様なその素肌に手を忍ばせると、

「あきら、待って？今日はいけないわ・・・。」

彼女は毅然として僕にそう言った。

彼女は熱くなり掛けた僕の身体からその身を離し、明日の試合があるからとまるで子供をあやし寝かせる様にお休みのキスを僕にして、また布団を被った。

しかし、まるで夫婦の様にたった二人で迎えた初めての夜に、僕は例え様の無い充実した想いに包まれて行った。

目覚ましが鳴ったのは、未だ外は真っ暗の五時頃だった。

夜明け前、僕達は前夜と同じ様に、否、今度はそれとは全く逆の、まるでそれは逆再生した映画フィルムの様の下宿からの大脱出を成功させる事が出来た。

前夜の甘い余韻に浸る間も無く彼女に別れを言うと、僕はコートに向かって行った。

空気は凜として冷たかったが天高く、まさに秋のそれだった。その日の対戦相手は前回のチャンピオンで、凡そ僕に勝ち目は無い。

晩秋とは云え朝から陽射は強かった。それを避ける様に、プラタナスの木陰で僕を観戦する彼女の姿が初め其処にあった。

試合は大分競った良い試合だった。然し途中僕の脚が攣（つ）ると、その後は全くのワンサイドゲームになってしまった。僕は、敗戦の虚脱感の中でついさっきまで彼女が佇んでいた辺りに目を移し彼女の影を追った。しかし、そこには色付いて地に落ちたプラタナスの葉々が初冬の風にさらさらと蠢（ささや）いているだけだった。

### 第3章 事件 1. 何かが起こった

---

#### 第3章 事件

##### 1. 何かが起こった

秋の大会が終わると、まるでそれを待っていたかの様に木枯しが吹いた。目抜き通りを色彩りどりに着飾っていた街路樹のベールも一気に剥がされて、木々はあっという間に丸裸にされて行った。

そうなるや仙台の冬は早い。川内キャンパスにも初霜が降り八ヶ月に及んだ暑いシーズンもその幕を下ろすと、僕は只ひたすら年度末試験の準備体制へと入って行った。

木枯しから逃れ去る様に仙台を離れて行った彼女も同様に試験準備に取りかかっていたが、三日に一度の手紙とその間を繋ぐラブコールが途切れる事は決して無かった。

そんな十二月初旬のとある夜。遅い時間に電話をして来た彼女の声に何時もの張りは無く、抽象的で糸口の掴めない話しに僕は苛立つばかりだった。

「一体、如何したの、そんな声して・・・？」

僕が訊いた。

暫く続いた沈黙の後、気を取り戻した様に彼女が言った。

「岡田さん、知らないの？。それとも、恍（とぼ）けてるの・・・？」

彼女の言葉には棘（とげ）があり、その口調には僕を硬直させる凄みがあった。終いには、「こんな酷い話、本当に知らないの？。でも、私からはとても言えないわ・・・。自分の父親に訊いたらどうなの！！」

と、泣き喚きながら問題の所在を僕に示唆し一方的に電話は切れたのである。

『一体、何が・・・？』

親父が何故絡むのかさえ見当も付かず、何が起きたのか僕に判る筈も無かった。僕は罪人の様な妙な想いで一夜を明かした。

翌朝、凜として澄み渡った北の空には、頂稜一帯を新雪で纏った泉ガ岳が朝の光にくっきりとその雄姿を見せていた。

「オヤジ、何かやったのか・・・！？」

受話器を取ったおふくろに、僕はひと先ずやり場の無い怒りをぶちまけた。

「藤本さんの事・・・？」

それまで藤本麗子に関して僕が親に話したことなど皆無だったのに、母親はそう言った。

「決まってるじゃねえか！。大体何でそんな事知ってんだよ・・・？。いいから、早く親父出せって・・・！！。」

それまでは決して親に使った事の無い鋭くて無作法な言葉が僕の口を突いて出て行った。母親とは幾等話しても埒（らち）は明かない。僕は親父を出せと何度も言った。しかし持病の高血圧が悪化し興奮させると危ないからと、母親は決して父親を電話口には出さなかった。結局、母があらかたの状況説明をしてくれた。

その中味はこうだった。



或る日、僕と藤本麗子の情報が第三者を通じて親父の耳に入ると、詮索好きな親父は早速ありとあらゆる手段を駆使して『藤本家』を綿密に調べ上げて行った。

その過程の中で、彼女の出生に関するとんでもない或る『重大な事実』が発覚したのである。その直後、父親は態度を急激に硬化させて行ったという。

先行き、にっちもさっちも行かなくなる前に、

『礼は何とでもする。とにかく二人の仲を裂いてくれ！。』

と、父は何と僕の親友・河田にその汚れ役を無理やり引き受けさせたのである。

\*\*\*\*\*

藤本麗子の『戸籍上の重大な事実』に付いて、無論僕には強い疑問と関心があった。しかし、内心それには開かずの間の扉を開ける様な容易ならぬ怖さがあり優柔不断だった僕にその詳細を訊く勇氣はその日未だ無かった。

母の方とて同じだった。

「電話で言うのも何だし、今度正月休みに帰省した時に改めて話すから・・・。」

と言ってその場を逃げた。

それにしても酷い話しだった。彼女の『戸籍上』何があったか、その時の僕に知る由も無かったが、仮に何が有ろうと無かろうと本人不在の中で実の親が仕組んだ欠席裁判に、僕は初めて父の人格を見た思いだった。

かって無い屈辱に僕は激しく震撼し、それ迄厳然と屹立していた父親としての崇高な権威と威厳が僕の中でガタガタと音を立てて崩れて行った。

\*\*\*\*\*

それから数日後、彼女から小包みが届いた。温かそうなセーターだった。それには短く手紙がこう添えてあった。

『昭 様。』

先日の事件、岡田家では解決しましたか・・・？。貴方の家では古くからの『お家柄』が在るご様子で種々と大変なのですね。将来を考えると、ちょっぴり不安を感じましたが、麗子は大丈夫。確りと貴方に付いて行きます。

冬物のセーター送ります。サイズも、好きな色も分からず、私が勝手に選びました。お気に召すかどうか・・・。

\* P・S 先日の、貴方の城への忍び込み、とても怖かったけれど楽しかった。試合中、貴方の痙攣（けいれん）を見た時、とてもそれ以上見続ける事が出来ませんでした。あの日の夜更かしが原因では無いかと・・・？。

貴方の生活の匂いがするあの部屋に、もうわたし・・・、また行きたくなってしまいました。

## 麗子 』

父親による不当介入事件が発覚してから暫く、腹の虫が収まらなかった。  
僕は強烈な抗議文を書いたが、父からの返答は何も無かった。

## 2. 麗子の誘惑

---

### 2. 麗子の誘惑

親友・河田を媒体とした不当介入事件はそれを仕組んだ父親にとって何の成果も生まなかった。それは、むしろ作用・反作用の原理が働いて、僕達二人には益々濃密にその関係を深めて行く原動力を提供したに過ぎない。

その年の冬休み。クリスマスが過ぎた頃、僕は帰省して家にいた。僕が、あの忌まわしい事件について責任の所在を明確にしたいと思い続けていたのは山々だった。然し手を染めていた事業が一向にはかどらず、それどころかひと頃より一段と悪化していた持病の高血圧にさえ深刻に病んでいた父を見ると、自分には如何してもそれを切り出すことが出来なかった。

年の瀬の独特の雰囲気は僕は子供の頃から大好きだったのに、その年は兄や姉達との談笑もそこそこになると僕は除夜の鐘も聞かず早々と布団に潜り込んでしまった。

いつもの様に夜が明けて新しい年になった。限りなく昼に近い朝に起きると、僕は顔も洗わず、まるで冬眠を終えた熊の様に茶の間の方へのそのそと這い出ていった。

『お前、正月ぐらいはもうちょっと早く起きてシャンとしろよ・・・！』

既に正月の挨拶と恒例の朝食を終えていた家族からそんな冷たい視線を一斉に浴びせられた。とても正月気分には浸りきれ無い正当な理由が僕にはあった。しかし兄姉達に僕は未だ何も語ってはいなかった。

既に閑散としていた台所で僕が朝昼兼用の食事をしていると、電話のベルが鳴った。

「明けましておめでとうございます。」

在り来たりの挨拶を交わす義姉の声を耳にしながら、僕は正月料理に気の進まない箸をつけていた。

何も知らない義姉は、

「昭さーん、藤本さんと云う方からお電話よオ・・・」

と大声で僕を呼んだ。僕の家を嫌がり、それ迄は電話さえ掛けて来なかった彼女が、あの忌わしい事件で開き直ったのかもしれない、と僕は思った。

それは、母校である中学校の当直室からだった。旧知の先生から元旦の当直を依頼され、今其処に一人で居るからすぐ来ないか、との事だった。塞いでいた僕に、それは当に渡りに船の甘い誘惑だった。

手短かに用件だけを済ませ受話器を置いた。味気の無いおせち料理をそれでも腹一杯に詰め込み、僕は歯を磨き顔を洗った。

着ていたパジャマを処構わず脱ぎ捨て、Gパンと彼女がくれたタートルのセーターを着込むと僕は歩いて十分の懐かしい母校へと向かって行った。外は曇天だったが仙台のあの肌を刺すような冷たさは無かった。寧ろ生暖かい柔らかな空気さえ感じていた。

あの暑い夏の終わりの日から、僕達は会えば濃厚に唇を重ね感ずるままの抱擁が二人には何時しか定番となっていた。然し最期の線は未だ越えてなかった。それは、お互いまだ学生であるという明確な自覚の中で制御していた事とは云え、その一方では満たされない性欲に独特の強いストレスといら立ちさえ感じていたのでもある。

彼女とて同じ筈だった。学校の当直室とは云え、いわば密室に男を招く行為そのものがその総てを物語っていると僕は思っていた。

『今日こそは・・・』と、ヨダレを垂らした獣の様な飢えた自分に気付きながらも、僕は精一杯の平静さを装って母校の正門を潜って行った。

元旦の日の校庭は物音一つ無く、気味の悪いほど静まり返っていた。当直室は学校の正門を入ると左の隅の方にあり、付近の建造物に当時と変わった様子は何も無い。少し懐かしんで僕はそれらを眺めていた。

当直室は凡そ十メートルほどの屋根の無い渡り廊下で校舎と繋がっている。少し粗末で小造りだったが専用の風呂やトイレも完備され、一戸建ての住宅とほぼ同等のものだった。

僕は当直室に近付いて行った。そして高ぶる気持ちを必死で抑えながらドアを軽く叩いた。「はい。今すぐ開けまーす。」

部屋の中から陽気な彼女の声が聞こえるとドカドカとドアに走り寄る音がした。ドアが開いて、部屋の熱気が一気に外へ吐き出されてきた。

部屋の片隅には石油ストーブが一つ置いてあり、半球形の熱線がその中で赤々と燃えている。四畳半程の狭い当直室内はまるでサウナの様に息苦しかった。

色白だった彼女の頬はほんのりと紅色に染まり、白のブラウスからは上半身の肌の色がくっきりと透けて見えていた。

ざっと部屋を見渡すと、炬燵と小さなテレビの他には茶器の載った古めかしい卓袱台（ちゃぶだい）が一つ部屋の隅に置いてあるだけで、その上には『当直簿』と毛筆で大きく書かれた黒表紙の日誌があり、それが如何にも学校らしさを保っていたのである。

僕が炬燵に座ると彼女は逆に席を立てて奥の方に出向いて行った。両手で水平にスライドさせないと上手く開閉しない粗末な間仕切りの向こうは床張りになっていて、小さな冷蔵庫が置いてあり、そこが台所である事は僕にも容易に判った。

彼女は床の上に軽く膝を付くとやや中腰になって冷蔵庫のドアを開け、僕の方に背中を向けてその中を覗き込んでいた。

騒々しいテレビの正月番組に目をやりながらも僕の本当の視線は彼女の背後にあった。少しめくれ上がったスカートの奥で見え隠れしていた彼女の色白な太腿に、僕の旺盛だった性欲は否応無しに昂揚して行く。

自分の背後に注がれる僕の変態的な視線を知ってか知らずか冷蔵庫の中を覗き見しながら彼女は、

「岡田さん、お風呂沸いてるから・・・。」

と、僕に入浴を勧めた。其処が自分にとって思い出多き学び舎の一角であった事を僕は未だ忘れていなかった。僕がいささかその返事をためらっていると、

「ねえ、昭くん・・・早くウ・・・。」

彼女は僕をせき立てた。

面倒臭がり屋の僕は、小さい頃から服の脱ぎ着が大嫌いで風呂には余り入らなかった。

入浴が自分の順になると家の数ある押入れにその身を潜め、見つけ出されては母親から連日の様に尻を叩かれた苦く淡い思い出が脳裡を過ぎった。

然しその日、目の前に居たのは風呂に入れと僕を追い回す怖い母では無く、今直ぐにでも襲い掛かりたくなるような艶めかしい麗子だった。

冷蔵庫のすぐ手前を左に折れると其処には華奢（きゃしゃ）なガラス戸が一枚あり、風呂場は直ぐその向こうにあった。黒っぽい木枠の、何処にでも在るようなありふれた古い風呂だったが湯加減は良かった。

つい先程までは同じ湯船の中にあの肉感的な彼女の裸身が在ったのかと、おぞましい事を想像しながら貧相な自分の裸体を眺めていると、それまで頼り無さそうだった自分の下半身に太い芯が俄かに一本入る様だった。

昔の人は烏の行水と云ったものだが僕のはそれより格段と速い。局部だけをざっと洗い流し僕は呆気なく予定外の入浴を終えた。少し汚れていた上下の下着は、小さく丸めてGパンのポケットに無理やり押し込んだ。

僕の僅かな入浴中に彼女は化粧を直した様であるが、その様を僕には見せなかった。

顔から吹き出る汗を拭いながら部屋に戻った僕を待ってましたとばかり、彼女はビールの栓を気持ち良く抜いた。

「かんぱーい！」

笑顔で挙げた新年の祝杯を、僕達は一気に飲み干した。風呂上りの乾いた喉もとに、冷えたビールの泡が木目細かに染み込んで行く。

程なく二人はほろ酔い加減になった。僕は親父が仕組んだ破廉恥な事件を改めて彼女の前に詫びた。

気にして無いとは言いながら飲み干した空のグラスを握り締め、彼女はあの事件に押される様にこう言った。

「私、本当は絶対に許せない！。だって、そうじゃ無い。息子の親友を通じてやるなんて、そんなの卑怯だわ。」

昂（たか）ぶる感情につられるまゝ、彼女は一旦噴出し始めた自分を止める事が出来ず、あの忌わしい事件以来うっ積していた我が家の古びた陋習（ろうしゅう）や両親への不満をその後延々と訴え続けて行った。弁解の余地など有る筈も無く、あの騒動以来すでに逃げ場を失っていた僕は彼女に黙って耳を傾けるしか無かったのである。

\*\*\*\*\*

窮屈な話に飽きた頃、僕は大きなあくびを一つ二つすると眠気を催した。僕は炬燵に下肢を入れたまま両手を後頭部に組むと、仰向けになって軽く目を閉じた。その時の事件が罪の無い彼女をどれほど苦しませてしまったのか。出生上の真相は・・・？。躊躇などせず思い切って早く確かめて見なければ・・・と、それから展開しそうな自分たちのドラマを臉の中に映して見たが、何故か其処には何も映らなかった。

黙して語らぬばかりか、とっぷりと炬燵の中に身を横たえてしまった僕に彼女はしびれを切ら

していたのだろうか。その下半身を炬燵に突っ込んだまま上体を斜めにくねると、僕の胸元へ紅潮したその顔を倒しながら、

「あきら・・・！」

と、彼女は切なそうに囁いた。そして汗ばんでいた僕の頬をしなやかな掌で包み込んで、「抱いて、お願い・・・！」

と、自ら熱いその唇を僕に重ねて来たのである。

湯上りで程よく滑った彼女の頬と唇。それに何にもまして適度な弾力と柔らかさを備えた胸の二つの脹らみは、即座に若かった僕の欲情を不足無く掻き立てた。

僕は横臥（おうが）し、右腕を彼女の頬の下に差し込んで抱き抱えるように彼女を支えた。左手は、透けて挑発的だった白のブラウスを下から捲って火照る彼女の背中を縦横無尽に弄（まさぐ）った。

彼女は少し分厚いその唇を窄めながら僕の唇を痛いほど吸い込むと、今度は海鼠（なまこ）にも似た生暖かく滑った舌を僕のに絡みつけてくる。僕は、女教師からまるで濃厚な性戯指導を受ける男子生徒のようだった。

間も無く彼女は、僕の胸にあったその手をぼくの大腿部へとゆっくり這わせて行った。僕は自分の唇を彼女の唇から離した。もはやブラウスからはみ出ていたたわわな彼女の乳房の上に顔を沈め、まさぐり、そしてそれを初めて吸った。

「あーん、いいわ。麗子、うれしい・・・。あきら・・・。ああ、もっとしてエ・・・。」

そこが神聖な母校であった事など二人の頭にはもはや有る筈も無い。激しい彼女の身悶えと、半ば力無く開いたその唇から突いて出る耳慣れない淫乱な言葉は、僕をかって無い卑猥な世界に導いて行った。

僕は、まるで未成年者お断りの成人映画を自作自演しながら、また同時にそれに見入る観客でもあるかのような奇妙な興奮と錯覚の世界に浸って行った。

僕は両手で彼女のブラウスを無造作に捲り上げた。

適度に白い乳房の脹らみから透けるように浮き出ていた薄紅色の毛細血管が集合して創る淡いピンク色の頂きを、僕は両掌（てのひら）と指先で交互に撫で、その感覚に慣れると今度は腹を空かした乳飲み子の様に唇でその突起を強く吸った。彼女は苦しそうな表情を時折僕に見せた。

僕は彼女の身体を炬燵から完全に引きずり出した。小さな炬燵の中の窮屈感から開放されて彼女は熱く燃える身体を直も僕に絡ませ、その右掌で他の誰にも触らせた事の無い鋭敏な僕だけの部分をまさぐり出した。

Gパンの厚手の生地が強引に押さえ付けられた僕の分身は、実際の半分ほども外に起伏を呈していない。しかし、それはもうパンパンに張り獲物を狙う毒蛇の様に衣服の真下で巨大なとぐろを巻いていたのである。

その破裂しそうな苦しい脹らみをどうすれば心地よく解放してあげられるのかを良く心得ていたのだろうか。彼女は僕のジッパーに手際良くその指先を掛けると、ゆっくりとそれを下ろして行った。

「ねえ、こうすると気持ちいいの？。麗子、見たいな！。あきらの・・・。」

彼女は既にGパンの中に深く侵入させていた柔らかなその右手で僕の脹らみを握り気持ちよく

こね廻しながら、すでに空ろになっていた僕を見てそう言った。

彼女の淫らかな言葉と巧みな指使いに、若い僕はもはや耐えられる限界をとっくに超えていた。

僕は少し黄味がかった乳白色で生暖かい大量の絵の具を、凄まじい勢いでGパンの中の柔らかな彼女の掌（てのひら）のなかに一気に吐き出して行ったのである。

### 3. 家族会議

---

#### 3. 家族会議

正月気分もそこそこにそれぞれが上京し元の生活に戻ろうとしていたその前日の夜、てんやわんやの晩飯を済ませた我が家では一家団欒の充実した時間（とき）を過ごしていた。

然し、僕はその輪の中に容易に入る事が出来なかった。それは、例の事件の裏に隠されていた『戸籍上の重大な事実』を明確にする事も含めて、自分と藤本麗子との関係を家族に認知させなければならないと考えていたからだった。

散々迷った挙げ句、その時を置いて他に無いとの一大決心をした僕は、緊張に声を震わせながらその詳細を告白して行った。

親友の河田を使った異常な妨害行為に触れて行くと、案の定それまでは聞かぬ振りをしていた父親が、

「昭、それは妨害なんかじゃない・・・！」

と、真っ先に反論し得意の咳払いを織り交ぜながらとうとうと述べたが、それ迄の自説を寸分たりとも曲げなかった。

\*\*\*\*\*

「実は、その藤本さんの出生上の事で・・・」

と、それまで終始黙っていた母が藤本麗子に関する戸籍上の重大な事実関係の説明に入って行った。初めて明かされる開かずの間の恐怖の扉から一種異様な空気が漂った。母は肩で大きく息をして父と目を合わせ、以降の説明にその了解を取りつけた。

その内容はこうだった。

父親に僕と藤本麗子の恋愛情報が入り役場の知人を通じ藤本家および彼女の詳細を風（しらみ）潰しに調べて行ったところ、何と麗子に『父親』の名前が無かったというのである。

「・・・?!」

吾が子に泥を塗るような苦しい説明を成し終えた母親は困惑した表情を隠せず、懸けていた眼鏡を外し割烹着（かっぽうぎ）の縁でせわしなくそれを拭いた。

「それはだなあ、『父なし子』と云って、つまりは私生児と云う事なんだよ・・・。」

少し判り難かったおふくろの話しをフォローする様に今度は父がそう言うと、身を凄めたくなるような冷気が家中を襲って行った。

父は、独特の慣れた仕草で着物の袂（たもと）から煙草を取り出しその一本に火を付けた。そして何時もする様にその左右の頬を大きく凹ませ、『どうだ、判ったか!』と言わんばかりにそれを吸った。

父は黙ってその場を立ち夜の更けた庭先へ出て行くと、そこで今一つ大きく咳払いをして見せた。

\*\*\*\*\*

『父なし子』、『私生児』・・・。



いやな響きを持つ言葉だった。

そんな事、自分には全く無縁な世界の話しだと思っていた。なのに・・・、僕は見た事の無い巨大な妖怪に胸座（むなぐら）を掴まれ叩きのめされたような鈍重な想いだった。それらは、だからと云って自分には如何する事も出来ない事ではあったが、僕にとっては前代未聞の衝撃的な出来事だったのである。

「昭くん、如何にかして麗子さんのこと諦められないの・・・？」

親想いの強い次姉が、まるで物乞いでもする様にそう言った。

「相手は物じゃないんだから、そうは行かないわよ、ねえ、昭・・・？」

長姉がそう言えば、

「父なし子だったってさあ、オヤジはどっかにいるんだろうよ・・・？」

「だいたい親と一緒にいるわけじゃねえんだし、そんなの関係ねえだろう！」

と、次兄が言った。

僕は余りのショックに暫し話す気力も無かったが、矢継ぎ早に喋り合う兄や姉達が凡そ僕の代弁をしてくれた。

翌日、地元でOLをしていた妹を除いて皆上京して行った。数日振りに家の中はまた伽藍（がらん）として僕は一人自室に籠（こも）った。

父なし子だの私生児だのと、それらの持つ言葉のイメージが僕に与えた心象は確かに悪かった。確かめたい気持ちもあり、僕は傍にあった何冊かの辞書や辞典を開いた。

それらには、【正式の夫婦では無い男女の間に生まれた子】と簡潔に書いてあった。

僕は複雑な想いでそれを幾度も幾度も反芻（はんすう）した。それは、人の世で基本的にはあってはならない事だと僕は思っていた。増して血筋を重んじる父がああまでして拘る訳も満更分らないではなかった。

僕は火鉢だけの寒々しい自室に閉じたてこもり、万年床の上に仰向けになった。目一杯ジャンプしてもとても届かないほど高い天井に、受験時代の生物系統譜が処どころ蜘蛛の巣を被って貼り付いたままになっている。それを朦朧（もうろう）と眺めていると、その中に自分の育つ姿が薄ぼんやりと映し出されて行った。

両親は小さい頃から僕を良く可愛がってくれたし、人一倍の想いも掛けてくれた。僕は少しおっちょこちょいだったが、親の期待通りに良く学び良く遊んで活発ないい子だった。

金運に見放された父親を尻目に兄姉達は皆私学に進まざるを得なかったのに、僕は金の掛からない国立大学に進むことが出来た。自分はそんな親孝行の息子だった筈なのに・・・。何も好き好んで親の意に背こうとしている訳では無いのに・・・。と、運命の悪戯（いたずら）が招いた現実に呆れ、幻滅の悲哀に押し潰されて僕は失意のどん底に落ちて行った。

\*\*\*\*\*

その時の出来事と事件の数々は、修復不能なトラウマとなって否応無しに僕の心の奥深くに刻み込まれて行った。僕は事態の改善と解決に向けて最善を尽くしながらも、一向に聴く耳を持つ

うとしない父親に強烈な敵愾（てきがい）心を抱き、何時しか宣戦布告する機を伺うようになって行くのだった。

## 4. 薔薇（ばら）の花束

---

### 4. 薔薇（ばら）の花束

彼女の出生上の問題が僕と我が家にとっては解決不能の暗い灰色の影を落としていったが、それとは裏腹に僕達は会う度毎にその関係を深めて行くばかりであった。

彼女は不条理な事件に屈する事無く、僕の前では持ち前の健気さを装ってしてくれた。そしてその後もコンスタントに僕の下宿に忍び込んで来てくれた。それは、はるばる電車を乗り継ぎながらの大変な負担だった筈だが、彼女はそれを決して億劫（おっくう）がらなかったし彼女の両親さえそれを認めていた。未だ先の事とは云え、僕の卒業を待って結婚すると云う事は彼女の家では既に公然とした事実になっていたからに他ならない。

藤本麗子は四年生になると就職活動で俄かに気忙しい日々を送っていた。結局教員への道は選ばず、地方銀行としてはトップクラスだったJ銀行に就職を内定させ、後は卒業を待つだけとなっていた。

その年の夏休みは彼女にとって学生生活最後のものであり、忘れ難いものにしたいと云う彼女の強い希望があった。それまで窮屈だったクラブ運営の責任者から外れた僕はその希望を叶えてあげるべくバイトに励み、東北周遊の婚前旅行へと洒落込む事にした。

仲良く稼いだ幾ばくかの銭を携えて、僕達は東北の海や山を思いのまま遊び歩いた。ひなびた温泉宿にも何日か泊まった。僕達はまるで学生結婚でもしていたかのように夫婦気取りだった。しかし、その大事な時になると、

「貴方が卒業したらね・・・。」

と、僕は決まり文句のお預けを食らうのだった。それは彼女の貞操感から来ていたと云うより、寧ろ彼女の市民権が我が家では如何にも得られないと云う片務性から来る精神的な不安定感に起因するものではなかったかと僕は思っていた。

『貴方のお父さんに、早く会いたい・・・！』

と、姿無き宿敵への面会希望を道中度々口にしていた彼女の言動から僕はそれを容易に推測出来たのである。

結婚への固い意志を尚も磐石にした長旅を終えると、僕達は各駅停車のローカル線を幾たびか乗り継いで帰途についた。終着のO駅に到着する一時間ほど前になると、顔見知りとの不用意な接触を避けるため、それまで仲良く乗っていた車両に彼女だけを残し僕は別の車両に乗り換えなければならなかった。

下車すると二人はもはや目配せする事も無く知らん振りを装って夫々の家路についた。

僕は一日も早く彼女を家に招き、親父に合わせる術を只ひたすら考えていた。ひとまずおふくろに相談してみた。相談を受けるや否やおふくろは、

「選りによって、どうしてこんな事にねえ・・・？」

と、例の問題を開口一番悔やんでくれたが、

「彼女とは、私も未だお会いした事は無いけれど、れっきとした国立大に通うお嬢さんだし。お

母さんは、昭が選んだ人だから最後はしょうがないと思ってるんだけど・・・。何せ、お父さんがねえ・・・？」

と、自分の亭主に責任を転嫁して絶句した。

彼女を家に呼んで親父に合わせる事に付いては、『そんな血筋の子は絶対にこの家の門はくぐらせない』が親父の口癖だし、仮に呼んだとしても、まず『会わない』だろうと、かなり確度の高い母の見解だった。

「其処を何とか、おふくろから・・・！」

と、僕は母に懇願してみたものの、古くから家父長制が滅法強い我が家において女の力を知り尽くしていたおふくろは最後までその首を縦には振らなかった。

結局これといった名案は特に無かったが、

「お父さんとは無関係に一度呼んでみたら・・・」

という、一見無謀とも思われたおふくろの提案で試して見ざるを得なかったのである。

\*\*\*\*\*

それから数日経った或る日。永い間懸案だった藤本麗子の我が家への来訪が遂に実現する日を迎えていた。

八月も旧暦の盆を過ぎると一時の蒸すような暑さは遠退いてくれたものの、一転してその日は朝から風雨混じりの生憎（あいにく）な天気となってしまった。

その日の午後、約束した時間の少し前に僕は煙草を買いに表通りへ出て行った。その僅かな間隙を突く様に、また考えられない惨劇が起きてしまったのである。

僕が門を出て、そのまま表通りへと続く長い石段を右に登って行ったその直後に、彼女は別の小道から我が家に辿りついた。

その少し前、大雨が降ると毎年の様に土砂崩れを起こす東側の崖を懸念した親父が俄かに雨合羽を着込むと外へ出て行った。地盤の弱い方に雨水が流れて行かぬ様、門の付近でその通り道を整備する親父の処へ運悪く彼女が入って行ってしまったのである。

「どちらさん？」

来訪者に気付いた親父が彼女に尋ねた。

「あのお、わたし・・・、藤本と申します。本日はお招きに預かり有難うございます。

昭さん、いらっしゃいますか・・・？」

震える声を押し殺しながら彼女は言った。

悪天候の中、行き成り宿敵と鉢合せをした彼女は、心臓が飛び出すほどびっくりしたに違いない。

「昭なら出掛けて行って、今居ないけど・・・。」

と、黒色の合羽（かっぱ）を着たまま作業の手を少しも休めず素っ気無い返事をしたオヤジに、

「あ、そ、そうなんですか・・・？。どうも失礼致しました・・・。」

と、言わざるを得ない彼女だったのではないだろうか。

再起不能のカウンターパンチにうな垂れながらも大切に持って行った花束だけとは、それをオヤジに預けると、彼女は追われる様にもと来た道に戻って行ったのである。打ちひしがれて憤り立つ気持ちを必死に抑えながら、降りしきる雨に打たれながら。

そして、きっとそれよりも大粒のくやし涙を流しながら・・・。

何も知らない僕は、一段と激しくなった暴風雨に傘で身を隠しながら間もなく家に戻った。予定を過ぎても来ない彼女を懸念して僕がおふくろに尋ねると、

「そう云えば遅いわねえ・・・」

おふくろはそう言った。

暫くすると作業を終え家に戻った親父が合羽についた大量の水滴を払い落としながら、誰にともなくぼそっと言った。

「崖、大丈夫かなあ・・・？」

あァ、そう云えば、つい今し方、藤本さんと云う方が見えたよ。すぐ帰った様だけど・・・。」

親父の類（たぐ）い稀な冷淡さと一流のお惚けには流石のおふくろも呆れ果てた。僕は頭の中が真っ白になった。僕は彼女の家へすぐ電話をしたが、繋がらなかった。直接詫びようと潔く家を飛び出して行ったものの、台風並みの烈しい風雨と、どのように弁解すればいいのかその判断がつかず、玄関先で思い止まってしまった。途方に暮れて何気なく辺りに目を遣った。

もはや濁流と化した泥水の中に僕が見たものは、見るも無残に晒（さら）されていた真紅の薔薇（バラ）の花束だった。

## 5. 追い討ち

---

### 5. 追い討ち

迫害にも似た陰湿な取り扱いを受けた彼女は、それから暫く意気消沈し音無しの構えとなったが、それでも何時しかそれ迄の健気さを取り戻し元気になって行った。しかし親父が次から次へと引き起こして行く数々の事件は経過する時間と共に修復への限度を越え、ひた向きだった僕達二人の間に其れまでとは違った微妙な流れを着実にかもし出して行った。

翌年の春、晴れてJ銀行に就職した彼女は本店の事務処理センターに配属され、OLとして輝かしいスタートを切る事が出来た。一方、四年生となった僕は希望に燃えて元気良く実社会に飛び出して行った彼女に本心からエールを送る事が出来なかった。

それは僕なりにその理由があった。

大学入試のとき、ぼくの一浪がもたらしていた僕と彼女の一年次の違いは、同じ学生という隠れみのがその差を限りなく消し込んでくれていた。しかし彼女の就職は、彼女と僕に社会人と学生という絶対的な立場の違いをもたらす結果となった。

それ故、ただでさえ親父の妨害に揺れ動いていた二人の愛の形に有形無形の影響を与えるのは必至、との懸念を懐かざるを得なかったからである。

しかし、そんな僕の懸念をよそに彼女は連日のラブコールと手紙を学生の時と同じ様に僕に欠かす事は無かった。その代わり、職場内や女子行員間の陰湿な人間関係、それに上司と部下の不倫問題等等、それまで僕達には縁の無かった話題が一気に増えた。それ等は僕にも充分理解出来る範囲ではあったが、未だ関心も薄かった自分には社会人一年生として新たに抱え始めた彼女の心の問題を十分にケアして上げることは出来なかった。

二言目には、

「学生には分かんないよ・・・！」

と、学生を蔑（さげす）んだ様に僕に浴びせる言葉が彼女の口癖になって行ったのもある。

折りしも、その頃僕は就職戦線の真っ只中であつた。銀行・商社・生損保・鉄鋼・電気・コンピューター・・・等等、我が国を代表する大企業から求人は幾らでもあつた。

余程のドジを踏まなければその殆どが筆記試験なしの面接だけで採用してくれた。僕は小さい頃から希望だった充・家電業界の最大手H社をメインとして入社試験を数社受けた。

専門科目の殆どが成績『C』であつた事と卒業迄に残した単位数が膨大であつたことから、放縦な学生生活を厳しく指摘された。然しその一方ではクラブ活動の多大なる評価も受け、結果的には受験会社の大多数から採用内定通知をもらう事が出来た。僕は、大本命だったH社に迷うことなく誓約書を提出し、他社は口実を並べてすべて辞退した。

その頃、彼女も日一日とOLらしさを増して行った。大学在学中にシステム設計やプログラミングを専攻していた彼女は、当時、本・支店間における預貯金等オン・ライン化の完全実施に向けて躍起となつていたJ銀行内において、新入社員とは云え重要な戦力の一員としてその任にあたっており、仕事へのやり甲斐感を見出し始めていたその真っ最中でもあつた。

そんな或る夏の日の昼頃、

「ねえ、今晚泊めてもらえる・・・？」

と、彼女から嬉しい電話が僕に入いった。取り組みの真っ最中だった新オン・ライン関係の仕事で仙台周辺の支店へその説明に来ると云うことだった。僕にとっては久し振りの彼女の来訪だった。何時もの様に深夜を待って城に忍び込んだ。

『あんな泥棒みたいな思いをするのは、もう懲り懲りだわ・・・。』

と言いながらその後何度も僕の下宿にやって来たその頃の彼女は、忍びの術を良く会得し落ち着いたものだった。

翌日、S支店で所定のスケジュールを消化した彼女はその日の夕方、支店長ほか幾人かの関係者と懇親会を持った。

本店からはるばる出張してきた彼女を気遣った支店長が彼女にビールを勧め、仕事の労をねぎらった。彼女は少しだけそれに口をつけ、今度は支店長に注いだ。酒が回り始めると話題は一気に砕け世間話しに移って行った。

「ところでサ、君の出身は何処なの・・・？」

支店長が先に訊いた。

「あ、はい。私は当行本店のございますM市の少し北にあるH市というところですよ。ご存知でしょうか・・・？」

それを聞いた支店長は目を白黒するほど驚き、矢継ぎ早に彼女に質問をしてきたと云う。

「ええ？、H市の何処・・・？」

「市内です。」

「うわァ、それはびっくりだなあ。」

実は僕もそうなんだよ。なんか急に親近感が出てきちゃうね・・・。」

仙台と云う地で思いがけずに出会った故郷談義で急に気を良くした支店長は、未だ幾らも空いてない彼女のグラスに又並々と注いだ。

弾みに弾んだ支店長の話は懇親会が終わるまで続いたと云う。

その支店長とは、何と僕に下宿を世話してくれた叔父だったのである。甥である僕に話題が及ぶと彼女は、僕とは『中三の時、同級でした。』とだけ言い、後はただ『ああ、そうですか。はい・・・。』で終始したとの事だった。

宴会の後、同行指定のホテルから、

「麗子、参っちゃったわ。」

昨夜はその昭さんの下宿に泊まりました、とも言えないし。世間で狭いのねえ・・・。」

と、掛けて来た電話で彼女は余りの奇遇に笑いながらも啞然としていたのであった。

それからひと月ほど経った或る日、叔父は盆の挨拶で僕の家を訪れ、親父やおふくろと談笑していた。

「いやァ、それがね・・・、世の中は狭いって云いますけど、ここ迄狭いとは思いませんでしたよ

。実はですねエ・・・」

と、前置きし叔父は親父とおふくろの前で藤本麗子との行内での遭遇について詳細に触れて行った。

「それがですねえ・・・、その子はこの春入行してきたばかりの伸び伸びとした良い娘でね。本店内でもだいぶ評判の良い子の様ですわ。それに！大の数学科を出た才女だし、同級生なら気心も知れてるんじゃないでしょうか。どうです、近い将来、昭クン卒業したら・・・？。私、仲介しても構いませんから。」

と、叔父は自信たっぷりに言った。

僕たち二人の恋愛問題に打つ手を拱いていた親父にとって、それは逆に渡りに舟だったに違いない。それまでは何食わぬ顔をしてただ黙って聞き流していた親父は叔父の前で右手を何度も横に振ってその話を制止した。

親父は徐々に口元が滑らかになって来た叔父をたしなめながら、藤本麗子にまつわる裏話の一部始終を語り始め、それに留まらず職圧で何とか二人を切り離せないかとの新たな陰謀を彼に明かして行ったのである。

自分の親以上に慕い敬っていた僕の親父から依頼を受けた叔父は、その態度を一変して言った。

「へええ。あの娘がねえ、分からないもんですねえ・・・。格好の縁組と思いましたがね。いやはや、ですな。うハハハハ・・・。ま、承知しました。早速盆明けにでもやってみましょう！」

\*\*\*\*\*

そんな理不尽極まりない企みが進展しているとは露知らず、学生最後の夏合宿を終えた僕が少し遅い帰省に身の回りの準備をしている時だった。

その日彼女は最初の一声から凄まじく、受話器に空いた小さな穴から荒れ狂う彼女の生唾（なまつば）が飛んで来そうだった。

「あんたの家って、一体どうなってんの・・・？。もう、いい加減にしてよ！。私、人権蹂躪（じゅうりん）で訴えてやるから！！。」

そして、その日も又そのまま電話は切れた。

肉親である自分の父親が引切り無しに起こして行く数奇な事件に僕は為す術が無かった。僕を何処までも支配し、飽くことなく彼女を蹂躪し続ける愚劣な親父に僕は怒涛の様に激しい憎悪を抱いて行った。

翌朝、乗り込んだ上り急行の中で、車窓に映る穏やかな紺碧の海を見つめながら僕は懲りない親父への『報復』にも似た恐ろしい画策に全神経を尖（とが）らせていたのである。

その日の午後、まるでヤクザが殴り込みでも掛けるような血相をして僕は家の門をくぐった。あいにく、親父は上京し不在だった。僕は已む無くおふくろに食って掛った。

何故、叔父がそんなプライベートな事を彼女に言うに至ったのか。取調べ官が被疑者に自白を迫るかの様に僕はおふくろを糾弾して行った。

おふくろは僕の何時に無い烈しい口調に、その時の事の重大さを改めて認識した様だったが最



後には、

「でも、みんなそれは貴方の将来を考えての事なのよ・・・。」

と、結局おふくろも僕と藤本麗子の組合せには反対の立場をとったのである。その日、親父は仕事で戻らなかった。

翌日の夜、彼女の退勤時刻を見計らって僕はバス停で暫く彼女の帰りを待った。数人が降り立ち、彼女はその一番後ろだった。僕には気付かなかった。バスが一種独特の煙と悪臭を残して発車して行く頃、降車客は夫々の方角へ散って行った。

僕は背後から恐る恐る声を掛けた。彼女は一瞬怖そうに身を竦めたが、その表情は冷めていた。

「一体どういうこと！？、二回も三回も・・・！？。」

私、何か悪い事でもしたって云うの・・・？」

「・・・！？。」

「もう、私・・・あなたに付いて行けない・・・。少しほっといてよ！」

彼女は吐き捨てる様にそう言うと、振り向きもせず街灯の無い暗い夜道に消えて行った。

『それはね、君の出生に原因があるんだよ・・・。』

僕は彼女にそう言ってしまいたかった。そうすれば僕や僕の父親の正当性がほんの僅かでも庇護（ひご）されると思っていた。でも、僕には口が裂けてもそれを彼女に言う事は出来なかった。それを耳にした彼女が猛り狂う姿を想像する事さえ、その時の僕には身の毛がよだつ想いだった。

暗闇に消えて行く彼女の後ろ姿に言い尽くせぬ哀愁を感じながら、彼女が自分の出生上の秘密を本当は知っていたのか否か、僕は真剣に押し当ててみたがその解は何処にも無かった。

成功への確率がもはや何ポイントも残されてはいないあの親父攻略の方途を真剣に考えながら僕は家路についたのである。

## 第4章 終 焉（しゅうえん）

## 1. 激 突

その日の夜遅く、オヤジは三日振りに家に戻った。仕事が上手く捗っている様子は無く、オヤジは酷く疲れていてナーバスだった。

「大事な話があるんだけど・・・。」

疲労の色を隠し切れぬまま粗末な飯にがつくオヤジに僕はいささか遠慮ぎみに言った。

「それどころじゃ無いんだ・・・。何の話しか分からんが、今日の処は勘弁して貰えんか・・・。」

常用していた血圧の降下剤を慣れた手つきで喉元に押し込むと、オヤジは風呂も入らずに直ぐ床に入ってしまうのだった。

事業仲間にした連帯保証の債務が完全に焦げ付き、債権者が連帯保証人であるオヤジに債務の一括即時弁済をしつこく迫っていたとの事だった。主たる債務者は行方を暗まし、正直者のオヤジが仕方なく数百万円の金策に東奔西走していたらしい。

一步間違えば家を債権者に供しなければならぬと云う、我が家にとってそれは極めて切羽詰まった悲惨な状況だったのである。

そんな差し迫った話しに較べてみれば、その時僕が抱えていた事などオヤジには単なる子供の恋愛ごっこに過ぎなかったのかもしれない。

翌朝、僕は随分と早く起きた積もりだったがオヤジとおふくろはもうとっくに朝飯を終えていた。食後のお茶を飲みながら、金策でも練っていたのだろうか。僕が茶の間に行くと、それまでしていた二人の会話がぴたりと止まった。

食卓で朝刊に目を通すオヤジの姿には何処か近寄り難い威厳がみなぎっていた。僕は話しの切っ掛けがつかめず少々うろついた。しかし、その俣では再び闇に葬られるのではないかとの懸念があり、僕は覚悟を決めて言った。

「ねえ、父さん。ずいぶん酷いことしてくれたよね。今回のあれって・・・、一体どう云う事・・・？」

「..... ・・・？」

オヤジに反応は無かった。僕は待った。オヤジの不当介入が招いた彼女の人権問題に、オヤジがその加害者として釈明をするのは当然の義務だと思っていた。

それを期待して僕は待った。オヤジは頑迷に沈黙を守った。僕も待ち続ける積もりだった。しかし何時しかその限界を超えると、僕は罵る様に放った。

「オヤジ！、しらばっくれるのもいい加減にしろよ・・・！」

それは、自分の実の父親に対する僕のいわば『宣戦布告』でもあった。突然飛びだした烈しい口調に、台所で食器を洗うお袋の手が一瞬ぴたりと止まった。貝の様だったオヤジが、大きく広げていた新聞をおもむろに折り畳みながらその重い口を開くと悲惨な戦いは遂に始まって行った。

「昭、お前は何をそんなにいきがってるんだ・・・！」

「何もかにも無いだろうよ。銀行の叔父さんまで使って、何であんな酷い事したんだって訊いてんだよ。ふざけんのもいい加減にしてくれよ・・・！！」

加速度的に高まって行く僕の荒げた声に堪りかねたおふくろが、

「昭、何ですか！。お父さんにその言い方は・・・！」

と、珍しく僕を窘（たしな）めると台所を離れて親父の傍（かたわら）に付いた。

「皆お前の為だと云う事が未だ分らんのか、この馬鹿者めが！。いい加減に頭でも冷やして来いッ・・・！！。」

激しい口調でそう言うと親父は読みかけの新聞と煙草を手にし、奥の座敷に向かって行った。僕もオヤジを追い掛けるように座敷の間に向かった。

オヤジは座敷の真中の大きなテーブルの横で新聞を広げ、其処でまた煙草に火をつけた。

「おーい、母さん・・・！」

と、大声を出し、『パン、パン・・・』と何時もの手合図をしながら熱い茶を催促した。

僕はオヤジから少し離れ東側に面した廊下でオヤジに背を向けて座った。そしてあぐらをかき背中を大きく丸めて新聞に見入るオヤジに、僕はその時差し迫っていた自分の心情を包み隠さず話して行った。

度重なるオヤジの妨害行為で彼女とその家族に人権侵害が及んでいる事。その結果、彼女と僕との間に修復不能な亀裂が入ってしまった事。虚心坦懐に先方に詫びて欲しい事。

僕たち二人には自分の卒業を待って結婚する約束が出来ている事。そして最後に、僕達の結婚を如何にかして認めては貰えないものかと・・・。

言葉の限りを尽くして、僕はその本心をオヤジに開示し懇願したのである。

が然し、『これがオヤジの権威だ！』とでも言いたげだったのだろうか。オヤジは健気に話し続ける僕の顔を見る事もせず、煙草を引切り無しに吸いながらただ新聞をべらべらと捲り、まるで付き纏う蠅の様に徒つれなく僕をあしらうのだった。

僕が期待していた何パーセントの対話にもならず片務的な時間だけが過ぎて行った。

終始一貫して変わらなかったオヤジの態度から、僕はオヤジの理解と了解はもはや得られないとの認識を強めて行ったのである。

「どうしても駄目なの、父さん？」

「.....」

僕の最後通牒をものともせず、オヤジは何処までも頑（かたく）なだった。真一文字に固く結んだその唇と僕を無視し続ける態度が、その時のオヤジの答えを他の何よりも鮮烈に物語っていた。

「何時でもそうやって、子供から自由を奪って来たんだね・・・。」

オヤジの口から何か言葉を引きずり出したい一心で僕は先手を仕掛けた。

「何を言うんだ、お前は！」

案の定、オヤジは再びその重い口を開いた。

「だって、昔から何時でもそうだったじゃないか。あれは駄目、これもやっちゃいかん。お前達は勉強だけしてれば良いて・。今回だって、きっと結果は同じだったんだ。どうせオヤジは恋愛には大反対なんだから。戸籍上の云々だなんて、オヤジにとって格好の餌食でしかなかった。そうなんだから、オヤジよウ・。!?。」

その辺りまで言うと、僕は意味不明の半べそをかいていた。感情の高ぶりに連れてその口調は流暢でより挑戦的に成って行くのが自分にも良く判っていた。

お茶を持って来たおふくろは、それをテーブルに置いたまま男同士の余りの烈しい形相（ぎょうそう）に驚愕（きょうがく）し、オヤジの背後に座ったまま釘づけになってただ怯えている。

それでも未だ言い足りなかった僕は、堰（せき）を切った様にオヤジを追い込んで行った。それはもはや罵（ののし）りだった。

「俺はあんたの持ち物じゃねえんだ。もうあんたなんか俺のオヤジじゃねえ、ふざけんな・。!!。」

「昭、お前・。何て口をきくんだ、それが自分の父親に言う言葉か・。!!」

オヤジはそう言うより早く、その場ですっと立ち上がった。その右手に硬い握り拳を造ると、猛禽の様な鋭い目付きで悪態を突く僕を睨んだ。

顔色は紅潮し、赤を超えて不気味な茶褐色に変色して行った。親子喧嘩の真っ最中とはいえ、その俣ではオヤジが脳溢血で倒れて仕舞うのではないかと内心僕は思った。その危険を予感したおふくろはオヤジの動きに合わせて咄嗟（とっさ）に立つと、華奢（きゃしゃ）なその身を小刻みに震わせながらはやるオヤジを小声で制止した。

その時、目の前にいたのは僕にとってもはや肉親としてのオヤジでは毛頭無かった。それは自分の行く手を阻む『宿敵』そのものだった。それを排除したいと思っていたその時の本心が、そのまま野蛮な言葉になって僕の口からほとぼしり出て行った。

「うるせえ!、くそオヤジ・。!。てめえなんか死んじまえ!。このバカヤローツ・。...!!。」

僕が浴びせたその時の罵声には、それまでオヤジが藤本麗子にして来た不条理なあらゆる振る舞いに対する僕の怨念が力一杯込められていた。

僕の、かって無い不謹慎な暴言に激怒したオヤジはそれこそ赤鬼の形相をして両手で僕の襟足（えりあし）を掴むと、異常な興奮で何かわからぬ大声を二つ三つ発しながら僕を座敷の中に引きずり込んで行った。オヤジは左手で僕の右腕を掴んだまま、鋼の様に硬く握ったその右の拳で僕の左頬を豪打し、そのまま僕を押し倒した。

殴り倒されて床の間の方によろけて行った僕は僅かにその身を交わし、絡みつくオヤジの手を解いて絶叫した。

「コノヤローツ、殺してやるウ・。!。」

僕はその時、本当にオヤジを殺してやろうと思っていた。僕の若くてエネルギッシュな右の拳（こぶし）は還暦を過ぎたオヤジのそれよりも遥かに強靱で破壊的だったに違いない。

振り上げた僕の鉄拳は、もはや振り下ろすその場所を決して選べなかった。

『止せ、昭・。!。オヤジを殴っちゃいかん・。!!。』

その俣では本当にオヤジを殺してしまうと考えたその瞬間、僕の全身全霊を込めた怨みの拳は

鋭く空を切ると黒い褐色の床柱を烈しく直撃していたのであった。

\*\*\*\*\*

その日のテーマは何一つ進展しなかったが、辛うじて惨劇を招かずに済んだ。  
僕は、床柱の上にどす黒く刻み込まれた親不孝の痕跡をただ呆然と見詰めながら、罪深い尊属殺人者にならずに済んだ不思議な安堵に浸っていた。

## 2. 揺れ惑う心

---

### 2. 揺れ惑う心

オヤジを殺（や）らなかつたものゝ、座敷の床柱を豪打した代償は小さくなかつた。殴った直後は異常な興奮の為か、痛みをそれ程感じる事は無かつた。然し時間の経過と共に患部は大きく腫れ上がり、それは堪らない痛みとなって行つた。

その日は日曜日の為、街医者皆休診で取り合ってくれなかつた。已む無く麗子に連絡し協力の要請をすると、あきれた態度を示しつつもM市内の救急病院を捜しあて手配してくれた。

タクシーで小一時間飛ばした。右の中手骨を三本も複雑骨折すると云う大怪我だった。最新型と云う透視画像で見ると、患部の骨は辺り一面に飛び散って砂の様に粉々だった。手術なら100パーセントの機能回復で全治六ヶ月。或る程度後遺症覚悟の整形法なら全治三ヶ月・・・僕は迷わず後者を選んだ。大学生活最後を締め括る秋の大会に何としても出場したかつたからだった。

透視TVを見ながら専門医による手探りの整復治療が続いていた。そしてそれが終わる頃、驚いた藤本麗子が矢張りタクシーで病院へ駆けつけてくれた。

負傷した右腕を痛々しくギプスで固められた僕は、伽藍としていた病院のロビーで怪我に到つた大方の事情を彼女に話して行つた。少し照れる僕に、彼女は開口一番こう言った。

「自業自得よ！！。そんな事ばかり遣ってるからお父さんに信頼されないんだわ・・・。」

「……………」

その時の、僕の正しく骨身を削つた『権利のための闘争』を彼女は何故か評価せず、僕の逃げ場を決して取り繕おうとはしてくれなかつた。

\*\*\*\*\*

数日後の九月初旬、くの字に曲げた右腕にごついギプスを巻いて僕は帰仙して行つた。

気の早い広葉樹の葉は少しその肌を薄い黄色に染めると、北西から吹く風に乗って一枚、また一枚と音も無く路傍に落ちて行つた。

左手だけの生活はかつて経験したことも無かつたが、その不自由さは想像を遙かに越えて惨めなものである。

テニスは愚か、先ず朝の洗面に始まりトイレ、食事・・・大好きなパチンコに麻雀・・・、の数々。挙げ句には、中学の頃から右手で慣れ親しんでいた自慰さえ左では感じも出ず、それから当分は開店休業とならざるを得なかつた。

事件を遅れ聞いた兄や姉達は、

「流石のお父さんも諦めてくれたでしょう・・・」

とか、

「自分の為には其処までして貰えた彼女は最高に幸せね・・・」

等と物見遊山臭い言い方で代わる代わる電話をしてきたが、『そんなの、自業自得よ！。』と、憎まれ口をいとも簡単に言って退ける当の彼女の態度に、僕はそれ迄には無い何か異質な状況の変化を敏感に感じ取っていたのである。

『バカヤローッ！この怪我・・・本当はお前とお前ん家の名誉の為にしたものなんだ・・・！。』

彼女の余りの冷たさに僕は憔悴しきった心の中で何度もそう叫んでみたが、彼女には伝わる筈も無かった。

\*\*\*\*\*

オヤジを主犯格とする度々の妨害事件は、それまでは無垢だった彼女の心の彼方此方に捻たささくれを多数生じさせてしまった。

そしてそれは、まるで悪性腫が健全な体細胞を少しずつ蝕んで行く重篤な病の様に、僕達二人の関係にも黒い影を確実に落とし始めて行った。

彼女は、僕の身体を張った抗議と抵抗には何処までも沈着で冷淡だった。結果的に僕の負傷事件は、僕と彼女の関係に進展を齎す事は何も無かった。むしろ其処までやっても如何にもならない『藤本家』と我が家の婚姻をより致命的にして仕舞うだけのものではあった。

一方、彼女からの手紙やラブコールはその後、回数にこそばらつきが出てきたものの、手応えは未だ充分に感じられる内容のものだった。然し、掛けて来た電話で、「お見合いの話があるんだけど、いいかしら・・・？」

とか、

「別に好きになりそうな人が居るんだけど・・・？」

等と、僕を牽制しながら少し意味深な言い方をする様になって行った。二人の終末期を予測していた彼女は、自己防衛に向けた対策とアリバイ工作とを着実に実行し始めて行ったのである。

さりとて、僕達二人から愛が失せてしまった訳では無い。お互いに熟れた若い身体は、一時の精神的な躓きや気まずさを乗り越えて双方の肉体を求め合う事を決して止めなかった。

負傷して三週間が経ち、検査のため僕が帰郷した時の事。

病院で診察を終えた後、退勤を待って彼女と合流した僕は彼女の誘いで彼女の家へ直行した。僕の突然の訪問にも拘わらず彼女の母親は、

「あーら、暫くね。帰ってたの？。どーお、その後右手は？。大変だったわねえ。」

と言って先ず僕の怪我を気遣うと、

「お夕飯でも食べて、ゆっくりしてらっしゃい・・・。」

と、天井だったその日の夕食を僕には急遽カレーにしてくれた。右手で箸を使わず、天井を羨む僕の口に、麗子は天婦羅の乗ったご飯を二、三度運んでくれた。

「アーンして、はい。フッフ・・・。誰かさんか分かんないけど、大変ねえ。岡田さんの面倒見る人って・・・。」

彼女は笑いながらそう言った。

彼女は食器を階下に降ろすと、コーヒーを持って戻って来た。僕の不自由な右手を気遣って僕のに砂糖を入れた。

「どうも・・・。」

僕はそう言って、まだ熱いコーヒーカップを不器用そうに左手で持ち、そのまま口に運んだ。彼女はそんな僕をただ黙って見ていたが、

「ね、ねえ・・・。」

と、ソファに座る僕を強く揺すりながら言った。

「あのね、私たち・・・。」

「ん・？」

「本当に、大丈夫かなあ・・・？」

僕には彼女の言わんとする処がすぐ分かったが、

「なんで・・・？」

と、ぼくは恍（とぼ）けた。

「だってえ・・・」

しどろもどろだったが、久し振りに少し甘えたように短くそう言うと、彼女は僕を見上げた。そして一旦失い掛けた気持ちを取り戻す様にこう続けた。

「だってね、どんな事情があるかよくわかんないけど。麗子の事、認めてくれないいでしょ？。岡田さん家。

私・・・、そんな処にお嫁に行けないもん...・・・。」

跡を絶たない数々の事件の後、ふた言目にはそんな話しをする彼女だった。既に少しずつ腰を引き始めていた彼女にとって、それは態の良い事実上の別れ話の提案だったのであろうか・・・。

引き潮に脚元を掬われ、沖に流されて行く彼女をただ呆然と見送るが如くに胸元を引き千切られる悲痛な想いだった。それを、僕は聞きたくも無かったし触れたくも無かった。

「なに弱気な事を言ってんだよ。心配無いって・・・。」

必死にその場を取り繕う僕の強気言葉にも急速に蔭りが見えて、大きく逸れ始めて行った彼女の心の支えには到底至らなかった。

僕への偽らざる愛と、あのオヤジによる紛れも無い虐待との谷間に行き来する烈しい葛藤の中で、彼女は、もう然程遠くは無い二人の終焉を確実に予感していたのであった。

失っていた慰めの言葉の代わりに、僕は左手で彼女の髪を撫で、自分の方に引き寄せた。それまで正座していた膝を少し崩すと、彼女は僕の方に近付いた。僕は彼女の柔らかな髪と項を優しく摩った。

彼女は僕の大腿部に幾度かその両頬を摺り寄せると下腹部でも同じ様にそれをやった。ギブス生活以降、自慰さえ絶たれていた僕の分身は忽ち本来の元気を取り戻し、身に着けていた衣服をものともせず一気にそれを押し上げて行く。

その力強く硬い隆起を素早く感じ取ると、彼女は何故かとても嬉しそうに微笑んだ。その頑固な高まりを頬から口元へ、そしてまた別の頬へとゆっくり擦り回しながら、彼女は僕に言った。

「麗子ねエ・・・。一度、これ食べてみたかったの！」

自分の口からつい出てしまった淫らな言葉に彼女は頬を真っ赤に染めた。そこには、それ迄の憂えた彼女はもはや無かった。

二律背反的な彼女の言葉の裏側に、僕はその時大きく揺れ動いていた彼女の深層心理を見たような気がしていた。僕の思いは複雑だった。しかし一方では卑猥極まりない彼女の誘いに、実はそうして欲しい男の本性を烈しく駆り立てられて行った。



「いいの？。そんな事して・・・？」

僕がそう言う間もなくズボンのファスナーを巧みに引き下ろした彼女は、窮屈な下着の中で烈しく突き上げる僕の太い棒切れに触れていた。

彼女は一旦、下着の上からごつごつした僕の形をまるで楽しむ様に俯瞰していた。

「ほんとに、いいの・・・？」

僕を少し見上げながら、今度は彼女が訊いた。僕は堪らなかった。

『何でも云いから早くしてくれ・・・！。』

と、獣の様に呪文を唱えながら薄く瞼を閉じた。僕はソファの背もたれに大きくその上半身を倒し、襲い掛かる歓喜の期待に細かく身を震わせた。

彼女は慣れた手つきで、脹千切れそうな僕の分身を表に取り出した。彼女の左手は天を向いてそそり立つ僕の砲身をガードする黒々とした深いジャングルを弄り、時折右手と一緒にタワ－を螺旋状に昇って行った。

彼女はひと通り僕の外観を楽しむと、今度は両掌でそれを挟みそこに口元を寄せた。

生暖かく湿った洞窟の奥に徐に引きずり込まれて行った僕はその中で烈しく脈を打った。彼女はその中の分厚く柔らかな一枚の大きな襪とその付近から豊富に染み出る泉を使って、僕自身を隅から隅まで拭ってくれた。

彼女は息苦しくなると、僕の巨大な異物を洞窟からゆっくり吐き出し、そしてそれを奥深くまた呑み込んだ。綺麗なピンク色に窄（すぼ）んだ彼女の洞窟の左右の縁からは正体不明の泡が細く糸を引きながら滲み出ていた。

天を突く様に下腹部を大きく反らし自分のものを更に誇示した時、僕はそれまでキッと嚙んでいた赤紫色の唇から、どくどくと音を立てて白濁の飛沫（しぶき）を噴いた。

彼女の奥行きが無い洞窟からは行き先を失った乳白色の白い河が幾筋もの流れをつくった。

切れかけていた二人の愛と、目の前に公然と広がる淫乱な光景のギャップに呆れ果てた彼女は、もはや大量のヘドロ化した廃棄物をていねいに処理しながら誰にとも無くポツリと呟いた。

「これで結婚できなかったら、大変よねエ・・・？」

\*\*\*\*\*

然しどう考えても、余りに過酷な与件の中で二人を成功に導いてくれる名案は無かった。

『怖くて開けられず、避けては通れず』と云う『開かずの間』を共有しながら、されどいずれを選択してもその先は断崖絶壁と云う絶体絶命のゴールに向かって必死で走り続けてきた二人の悲しい終末を痛いほど予感させられた僕は、如何にもならない現実にはただ天を仰ぐだけであつたのである。

その頃の彼女は日を追うごとに喜怒哀楽が激しさを増して行った。

『躁』と『鬱』とを露骨に繰り返す彼女の言動に僕の心と生活は大いに振り回された。しかし、もともと遠隔地と云う大きなハンディを背負って歩き出して行った僕達二人に、それ等はある程度不可避な障害物と考え、僕は『忍』の一字で徒ひたすら卒業と就職にその志を向けて行かな

ければならなかった。

\*\*\*\*\*

丁度その頃、僕は四年間に及んだテニス三昧の陰で取りこぼして来た膨大な単位取得のために万全の準備体制に入らなければならない時期に差し掛かっていた。

僕は徹底して大学の講義はサボったが、その時間分は少しも漏らさずテニスをやった。右手骨折の為に最後のトーナメント出場は危ぶまれたが、とにかく存分に遣り切ったという自信と満足感に満ち溢れていた。幼い頃から心に決めていた会社に就職も内定した。残るは卒業・・・そう、卒業さえすれば理想の『文武両道』と僕は思っていたのでもある。

かかる状況の中で、明らかにきな臭い匂いを放ちながら燻り始めていた僕と彼女との基本的な関係は、僕から専門書を開く気力と僅かな残り時間を否応無しに奪い取って行った。寄せては引き、そして又寄せる波の様に揺れ動く彼女の心は大津波となって遠く北に離れた僕の心をも大きく揺らし、そして丸ごと僕を呑み込んで行った。

彼女は小さく心の波動を繰り返しながら且つ微妙にその形を変えて行った。そして一進一退をしながら、その心と愛は少しずつ、然も確実に僕から離れて行った。

僕にはその波形が良く読めなかった。『陽』になると、彼女は『陰』における自分を僕に懺悔し、今直ぐ僕に会いに仙台へ行きたいとって訊（き）かなかった。

それは、彼女の掴み所をすっかり見失い、確立された大人への分岐点で新たな道標を探し始めようとしていた新しい僕の心を度々揺さ振りながらズルズルと時を稼いで行ったのでもあった。

彼女との愛の関係が、もはや復元しないのではないかと真剣に思い悩んでいたその年の初冬の事だった。

それまでの様に感情の起伏を細かく繰り返しながらも、彼女は週末たびに仙台にやって来た。多少気まずい思いをしながらも、顔付き合わせて酒を飲み食事をしていると、それ迄の不協和音がまるで嘘の様に思えてくる。

『これなら、大丈夫じゃないか・・・？。』

と思いながら恐る恐る『城』へ誘うと、のこのこと平気で彼女はついて来た。

しかし濃密な愛の交換が終わると安堵する僕を尻目に、

「もう、わたし帰るから・・・。」

と、彼女は何の余韻に浸る事無く別人の様にそう言うと、朝一番の列車に乗って追われるようにまた戻って行くのだった。

大切な週末を犠牲にして、彼女は一体何しに来るのだろうか・・・？。

決して振り向きもせず帰っていく彼女の後ろ姿を見送るたびに僕はいつもそんな疑問を感じていた。

\*\*\*\*\*

その頃、確かに僕は未だ彼女を根底から諦めてはいなかったが、それには、とてつもないエネ

ルギーを消費しとんでもない親不孝を覚悟しなければ成就し得ない事も徐々に分かって行った。時の流れの中で起きて行った幾多の事件が僕に授けてくれた僅かばかりの知恵だったのかも知れない。

とにかく卒業をして、確実に社会人としての第一歩を踏み出さなければ何も始まらないと思う様になっていった。

僕は、すっかり荒廃し切った自分の心の中から僅かずつでも藤本麗子を排除し、彼女の居ない生活を密かに覚悟し始めて行ったのでもある。

### 3. かすかな望み

---

#### 3. 微かな望み

民法三部・四部・五部、商法三部、行政法、労働法、法制史、憲法、強制執行法、国際法、刑事訴訟法、比較外国憲法…。

まさに失神寸前の科目と科目数だった。好きなテニスに自ら費やしたとは云え、僕は失った時間の大きさに呆れ残された時間の余りの少なさに嘆きながらも、待った無しの卒業試験に最後の準備を怠らなかつた。

その年の年末は、正月だからといって帰省する余裕など僕にはあろう筈も無かつたが、彼女に会いたい衝動に駆られ、僕はふらふらと晦日（みそか）に帰ってしまった。

その日の午後、田舎の駅に降り立った僕を背後から呼ぶ女性の声があった。河本みどりだった。彼女は僕達の一級先輩で、藤本麗子にとっては同じ大学の先輩でもあり以前から彼女が尊敬していた大の仲良しの一人でもあつた。横浜の中学校で既に教鞭を執っており、帰省したところだったのである。

「丁度良かったわ。岡田くん、ちょっとだけお茶しない・・・？」

改札口を出ながら彼女は僕にそう言った。

彼女は中学校の時同じテニス部で、僕が新入生の頃よく教えてくれた先輩でもあり、丸型の顔に笑顔を絶やさない素敵な女性である。僕は快く彼女の誘いに応じ、近くの店でお茶を飲んだ。彼女は、先生になってからもテニスは継続していたらしく、ひ陽焼けしたその顔から気持ちの良い白い歯を覗かせていた。

「久しぶりだわね、岡田くん！」

と、型どおりの挨拶をすると

「岡田くん、麗子の為に骨折までしたんですって・・・？。彼女から聞いてるわ。いろいろと大変の様ね。」

彼女は、もはや完治していた僕の右手にその目を遣りながら僕を労う様にそう言ったが、

「麗子の辛い気持ちも、良く組んであげないと。彼女そろそろ限界かもよ！！。」

と、結局は藤本麗子の肩を持った。

「岡田くん、貴方ね・・・。あなた本当に麗子が欲しいんなら貴方のお父さんから麗子、力づくで取り上げなきゃダメよ・・・！。私、永年付き合ってるから良く分かるの。もう、イチかバチかって処まできてるんじゃない？」

テニスの試合なら、マッチ・ポイントってところかなア・・・。」

僕に話す余裕を一切与えず、一気にそこまで喋ると、

「悪かったわね、岡田くん。じゃ、これね・・・。」

と、言って二人分の料金をテーブルの上に置いた。

貴重な忠告にぼくは礼を言う間もなく、彼女は慌だしく雑踏の中へ消えて行った。

予想もしなかつた彼女の話しに僕は暫し啞然としたが、それは当に的を得た見事な進言で現実的にはその時の僕に事実上最後の『二者択一』を迫るものでもあつた。

真冬の陽は早くも西に傾き、未だ三時過ぎだというのに辺りは夕暮れ時の様に暗かった。僕は先輩と別れると、冬枯れの田圃路を歩いて然程戻りたくも無い家路に着いた。

農耕用の荷車程度しか入れない細い畦道（あぜみち）は、一度溶けた霜柱が再び凍り始めて、足を踏み出すたびにザクッ・ザクッと小気味良く乾いた音を奏でていた。

コーヒー店を出て十五分もすると、西に大きく黒くその図体を横たえる鯨が丘の前方の右端に、我が家の灯りがはっきりと赤く見えてくる。僕は彼女の忠告を深刻に受け止め、その灯りの下でどの様な『二者択一』をして行くべきかを考えていた。

藤本麗子にとっては勿論の事、一発勝負の卒業試験を目の前に控えていた自分にとっても、残された時間は限りなく無かった。年が明けてそのまま帰仙すれば、試験地獄の中で徒だ『侍して破局を待つ』だけになることは明白だった。

\*\*\*\*\*

「ねえ、母さん。もう一回、オヤジに話したいんだけど・・・？」

裏庭から戻ったおふくろを勝手口で捉まえると小声で訊いた。

「もう一回、って何を・・・？」

「・・・ん。あの話よ・・・。」

「あの・・・って、藤本さんの・・・？」

「あ、そ、そう・・・。」

おふくろは瞬時に顔を曇らせた。その両手から使い古した軍手を脱ぎ、割烹着の袖口で顔についた蜘蛛の巣を払いながら僕に言った。

「なんだって、困ったわねえ・・・。あれでお父さんはもう結論出たと思ってるわよ。それで、なに、その後まだ彼女とは続いているわけ・・・？」

「・・・。」

困った困ったを連発していた。おふくろは水をちょろちょろと出して手を洗いそれを拭きながら、オヤジとはその先もはや進展する事はある事はない事を僕にはっきり予告すると、オヤジの所へ歩み寄って行った。

何やら二人でぼそぼそと話をしていたが、間もなくオヤジは席を立ち座敷へと向かって行った。

火の気の全く無い真冬の座敷には、身体の芯まで沁み込んでいく様な木目の細かい寒さがあった。おふくろは炭火を座敷に運んで来ると、直径が7、80センチもある大きな火鉢にそれを埋（い）けて行った。

黒々とした新鮮な固炭（かたずみ）は熱せられた蒼白い炎を揺らしながら、ぱちん・ぱちんと乾いた金属音を立てている。

オヤジは真鍮（しんちゅう）の長火箸（ながひばし）を上手に使って、おふくろの入れた灼熱の炭火を一つずつ置き替えて行く。僕は火鉢を挟んで親父と対峙して座り、幅広な火鉢の縁にその両肘を置いた。

二人とも暫し沈黙を保った。僕は赤々と燃える炭で遊ぶオヤジの何気ない動作を意味も無く追っていた。

その日、僕にはそれ迄の様な気負いは無かった。二者択一とは云え、オヤジのどうせ『判り切った答え』を最終的に確認したいと思っていたに過ぎない。

オヤジは無言のまゝ、小さな火種を火箸で採るとそこから直接煙草に火をつけ、同じ火種を僕に差し向けた。育つ頃、人一倍可愛がってくれたオヤジの心に久々に触れた想いがした。オヤジも僕も二、三度煙草を大きく吸い込んで、そして吐いた。吐き出された煙は火鉢の上で混ざり合い舞い上がると、薄暗い天井の片隅に消えて行った。

「父さん、あれ・・・、どうしても駄目なの？」

「そんな事より、お前・・・。その手、その後どうだ？」

「ああ、もう大分いいよ。」

「そうか。それは良かったな。でもな、お前には悪いけど、あっちの話は幾ら頼まれてもダメだぞ。」

「・・・ん、何で？。大学も就職も、みんなオヤジの言った通りにやってきたじゃない。僕には好きな人と一緒にいる自由は無いの・・・？」

その日、オヤジと言い争う積もりは最早無く、ぼくは別人の様に落ち着き払っていた。

「駄目なものは何年たっても絶対ダメだよ、昭・・・。」

お前が生涯を共にする女性が『私生児』だなんて、親戚中の誰が祝福してくれる？以ての外だ。お前に何と罵（ののし）られようと生涯怨まれようと、どうしても認める訳には行かんよ。冷酷・残忍なオヤジと思って諦めてもらうしかないな・・・！」

オヤジの答えはおふくろの予告通りのものだった。父親の強い威厳をまざまざと見せ付けられたような気がしていたが、僕は努めて冷静さを保っていた。然し、例え様も無く重苦しい挫折感が、烈しく脈打つ血液の流れに乗って今更の様に僕の身体中を襲って行った。

僕は一旦天を仰いで腕組みすると俯きながら、目を固く閉じた顔面を右手で大きく覆った。

掌の中で止めど無く流れ出る大粒の悔し涙と共に、『藤本麗子』とのあらゆる可能性が僕の視界から消えて行った。僕は肩で何遍も深く息を吸って、そしてそれを吐いた。親父は静かに席を立つと居間に戻って行った。

がっくりと肩を下ろした僕は、火鉢にもたれ掛かったまま暫く放心していた。

最後の微かな望みを断たれた僕は、顔面を覆っていた手から顔を解放し、目の前の床柱にゆっくりと視線を遣った。

『親不孝は、二度とするなよ！。』

褐色の木肌に不気味に残った疵痕がまるで僕にそう言っていた様に見えた。

『もう、駄目かも知れないな・・・。』

僕は誰もいない部屋で何度も何度も自分自身にそう言い聞かせ、藤本麗子との訣別へ向かって苦渋の選択を自ら迫って行かなければならなかった。

\*\*\*\*\*

然し、相変わらず情緒不安定だったその頃の彼女は気分が『陽』になると、そんな僕の悲壮な

覚悟を掻き乱し掻き消してしまうかの様な電話を頻繁に掛けてきた。

すると微かな望みさえ絶たれていた筈なのに、僕はそれ迄の絶望感を最小化し時には忘れて、『卒業まで頑張れば何とか行けるのでは・・・？。』等と極めて都合のいい愚かな妄想を頭に描く優柔不断な自分でもあった。

その年の冬、仙台では記録的な大雪が降り続き外出する事さえ俥ならなかった。しかし、それは卒業試験にのみ自分を埋没させるにはもってこいの条件ではあった。

終日部屋に籠っていると、六帖の狭い部屋には煙草の煙が充満し窒息しそうになってくる。そんな時、僕は決まって北側の窓を開けて熱いコーヒーを飲んだ。

澄み渡った北の空には、いつもより深く白を纏った鋭鋒・泉ガ岳が闇の中で蒼白くあった。顔に痛いほどの冷気の中で、『これも見納めだな・・・』僕は一人そう呟いた。

## 4. 最後の夜

---

### 4. 最後の夜

試験を直前に控えた一月最後の週末の事だった。その日、朝掛けて来た電話で彼女は珍しく仕事の愚痴を僕にこぼした。

建設的な意見は積極的に言うべし、と上司のお墨付きをもらって述べた意見が引き金となり関係部門の先輩女性と人間関係を大いに損ねてしまった話である。

「どうせ言っても分からないわよね、学生さんには・・・」

喋るだけ喋った後、彼女は口癖だった殺し文句を僕に囁ませた。

「そんな事無いって・・・。」

と僕が言えば、終いには

「電話なんかじゃわかんないよ・・・！」

と言って、話がうまく通じないのは電話のせいだと今度はその鋒先を変えて来た。

その頃の二人はそれぞれにそう遠くは無い『終末』を確実に予感していたものの確証めいた別れ話を口にしてはいた訳では無かった。僕達から初期の『純愛』は消失していたが未練にも似た『愛欲』はそうは云っても未だ確かなものとして存在していたのである。

会いたくても会えない悲しい宿命を背負い続けて来た僕達には、可能な限り一緒に居たいと云う根強い願望があった。その日の彼女はそれをストレートに言えず駄々をこねているだけだった。僕の誘導尋問をすんなり受け容れると彼女は二ヶ月振りの来仙を決意した。然し、

「行こうか、行くまいか、迷ってるの・・・。」

と、昼過ぎに掛けてきた電話で、彼女は未だ躊躇（ためら）っていた。その理由は僕には良く分かっていて、僕とて同じ迷いはあった。然し、麻薬患者の様に一度覚えてしまったあの恍惚（こうこつ）の誘いをそう容易に断ち切る事は出来なかった。

その日の、何時もの急行に乗って彼女は仙台に来てくれた。改札を出る彼女には、仙台行きを最後まで迷っていた痕跡がありありとあって、その表情はことごとく冴えなかった。

出迎えた僕にも同様の不安があった。そんなお互いのわだかまりは以心伝心をして、仙台で迎える事が出来た久し振りの再会を直ぐには喜べない微妙な空気の層を二人の間に造っていた。

強い疑心暗鬼に苛まれていた僕が彼女の来仙を歡ばない筈も無かったが、それとは別に確かな疑問もあった。

あれ程の事件に一進一退を繰り返して、一步間違えば『終焉』の待つその時期に、仙台までのこのことやって来ると云う事がどんな事なのか、僕は明確にしておきたかった。

二人で夜明かした未明に、何時も決まってぶち壊す彼女の悲痛な姿を僕はもはや見たくは無かったからである。

若いカップル達で華やぐ繁華街のとある喫茶店で僕達は話し合っていた。

「ホントに来ちゃったね。」

「そうなの。でも麗子、迷ったわ。本当に・・・。今でも少し、未だ迷ってるの。」

彼女が本当は何に迷っていたのか、僕は言葉で確かめたかった。



「何に・・・？」

と訊く僕に、

「じゃあ、貴方は迷ってないの・・・？」

と、彼女は痛い所を空かさず突いた。

「ん、あるよ。僕だって・・・。」

「なら、それは何なの？」

「それは、きっと、君と同じものだよ。」

「でしょ！。ほらね。だったら同じじゃん。ふふふ・・・。」

彼女はおどけながら首を窄め、勝ち誇った様に笑った。僕をやっつけて少しは良い気分でもなったのか、彼女はそれまでの表情をぐっと緩めた。

結局、彼女の巧妙なトリックに巻かれ僕の疑問を明らかにする事は出来なかった。

その日、彼女はそれまで幾度となくして来た様に、僕の部屋へ泥棒の様に忍び込むのはもう厭だと言った。その代り下宿の友人達に紹介して欲しいと言って聞かなかった。

彼女にはそれなりの勝算があってそう僕に申し出たのか、それとも何時もの気まぐれだったのか僕には良く解らなかった。先行きどっちに転ぶか皆目見当も付かず、すっかり自信を失っていたその頃の僕に、そんな勇氣は毛頭無かった。

しかし、話すごとに元気になっていく彼女を見ていると何時もの『力』が漲って来て、僕は彼女の希望を呆気なく呑みこんでしまうのである。

何時もより二時間ほど早く下宿に戻った。その日に限って下宿の連中は皆在室だった。

下宿に着いた僕は、母屋にある自分の部屋には行かず下宿生専用の方に入行って行った。僕は彼女を連れて散らけ放題だった汚い階段を上ると、最初に村岡の部屋のドアの前に立った。

入り口付近のトイレから階段を駆け上がって来た異臭が強烈に鼻をつき、部屋からは『モーツアルトの歌劇【魔笛】による主題と変奏』の軽快な旋律が聴こえていた。その余りのミスマッチに僕達は顔を見合わせた。

彼は銘々の部屋を走り回ると、早速残りの三人を彼の部屋に呼んでくれた。

粗末で息苦しささえ感じる四畳半の狭い部屋には、鴨居に渡された一本の紐（ひも）に色気の無い下着とちぐはぐの靴下が無造作に掛けてあった。その中で、彼女はひと際美しくまるで王女様のように光り輝いていて僕は鼻高々だった。

午前零時を過ぎ母屋の方も寝静まった頃、氣を利かした村岡が、

「もういいんじゃないの、母屋の方・・・？」

と、僕にサインを送ってくれた。他の連中は、

「あ、そう云う事・・・？」

と、ブツブツ言いながらも納得の表情で夫々の部屋に戻って行った。

麗子と僕は村岡の部屋を出ると母屋に向かい、彼女を先に玄関の中に入れた。脱いだ靴を手に持たせ、そろりそろりと摺り足で『城』に上がって行った。

真っ暗な部屋で、久し振りに二人だけになれた独特の開放感と嬉しさを全身で感じながら、僕達はどちらからとも無く抱き合ってキスをした。然し凍てつく寒さの中で、それも永くは続か

ない。僕は彼女から身体を離し、蛍光灯の紐を引いた。

「あら、今日は綺麗じゃない・・・？」

万年床が敷いて無かった分だけそう見えたのかもしれない。彼女はそう言っていつものひねた挨拶を僕にした。

余りの寒さに彼女は立ったままぶるぶると震える。僕は慌てて石油ストーブに点火し、炬燵と湯沸しのスイッチを入れる。

勉強机は、部屋の北西の隅に西向きに置いてあった。その正面の壁に、僕は好きだった座右の銘を掲げ、その横には気違いじみた試験の過密スケジュールを貼っておいた。学生生活最後の難関に立ち向かう自分の意識を高揚させる為のものである。

彼女は真っ白く湯気の立ち上るコーヒーカップを寒そうに両手で持った。美味そうにそれを飲みながら試験日程に目を遣ると何度か頷いた。

僕は炬燵から立ち上がり、いつでも好きな時に寝られる様にと、押入れを開け珍しくその中に畳んであった布団を取り出した。それを見て、

「わたし、やるから・・・。」

と、彼女も慌てて立った。

その日、僕の頭の中では幾つかの雑多な想いが交錯していた。

それまで彼女の秘境に未だ一度も到達していなかった僕にはそれに対する強い性衝動があった。夜も明けぬうちに突然また帰ると言い出すかもしれない彼女への大きな危惧もあった。

一方では、昼間遣り残していた勉強を少しでも取り戻さなければという差し迫っていた現実への焦りもあった。

そんな諸々が複雑に絡み合う中で、ひょっとするとその日が二人にとって最後の夜になるのでは、との妙な予感もあったのである。僕はセーター姿で炬燵に潜り込んでいた彼女を突然抱き込むと荒々しく唇を重ね、そのまま彼女を布団の上に押し倒して行った。

僕からの攻勢は珍しかったが、彼女はずっとそれを待ち焦がれていたのかも知れない。何時もより烈しい僕の抱擁と愛撫に彼女は十分に応えてくれた。

「麗子、欲しかった。君の・・・。」

小声でそう言いながら、僕は目の前の熟れた肉体を弄って行く。

「わたしもよ。もっとして、強く・・・。」

そう、もっと・・・！。ああ、あああッ・・・！！。」

心と身体のパクトルが最早互い違いになっていたのに、それでも二人は激しく燃えて行った。

彼女は何かにしがみ付く様に喘ぎ深い吐息を洩らしながら、その指先で布団カバーを小さく抓んでいる。

僕は一旦彼女から身を起こし、ゆっくりと上体を倒しながら彼女の下腹に顔を落とすと、そこで両頬を擦った。なだらかな彼女の丘陵の温もりが僕に伝わって来た。

彼女は少し苦しそうな顔付きに変わって行く。眉間に浅く皺を寄せ、真っ白に生え揃った上歯でその下唇を噛んでいる。

部屋の薄明かりを反射してきらきらと白く光るストッキングの中に、淡いピンクの下着が恥ずかしそうにその小さな姿を透かして見せた。

卑猥だった。それは自慰する時の幻想を遥かに超えていた。もっと、もっと卑猥であって欲しいと僕は自らを演出し、ほとんど全裸のまま僕に身を任せる彼女にもそれを求めて行った。

僕は彼女のストッキングを一気に脱がせ、僕は祈る想いで彼女の草叢を覆う最後の一枚に手を掛けそれを剥いだ。

かって味わったことのない異常な興奮にいきり立った僕は、はじめて露（あらわ）になった麗子の柔らかな蜜部にまるで吸い込まれるように導かれると、あっという間に果ててしまったのである。

\*\*\*\*\*

出口を塞がれたその日の二人に、溶けあった後の爽快感はまるで無く、それどころか独特の空しさだけが急速に増幅されていく。

寒々しい部屋で、ぼくは手に息を吹きかけながらギターを弾いた。温かい吐息は部屋の薄明かりに蒼白く光り天井に消えていった。彼女はとっぴりと毛布を被り、向こう側を向きながら軽い寝息をかいている。

「なんだ、もう寝ちゃったの・・・？」

僕はギターを弾きながら訊いた。

「うーん、ちゃんと聴いてるわ・・・。」

背を向けたまま僕にそう言うと彼女は布団の中でその身を起こした。その目には零れ落ちる涙があった。

その後、彼女は少し仮眠をとった。夜明け前、彼女は不快感を急に露（あらわ）にすると、「岡田さん、さようなら・・・。」

と、こと改まった挨拶を僕にして、すたすたと階下へ降りて行った。

身を切るような冷たさの中、追いつがる僕を一気に振り払い、彼女は通りかかったタクシーに乗り込んで僕の視界からあっという間に消えて行ってしまった。

『やっぱり・・・でも、どうして・・・？。』

と、今更ながら的中したその日の予感に僕は大きく天を仰いだ。僕は背中を丸め、夜の明けかかった住宅街を抜けて部屋に戻って行った。

ストーブは赤々と燃え続け、炬燵には灯が入った俣だった。テーブルの上には口紅の付いた飲み掛けのコーヒーカップがあり、そして布団の中には冷え切った僕を暖めてくれる彼女の柔らかな温もりが未だ充分あった。

僕は机の下に目を遣った。ついさっきまで彼女の愛らしい靴があったと思っていたのに、其処にはもう何も無かった。

本当に居なくなった彼女を知ると、たまらない寂寥感が僕を包んで行った。

僕は急迫してきた『終焉』を身近に感じながらも、『卒業』し『就職』さえすれば何とかなる筈、と云う未だ微かな望みを信じながら、ただ一心不乱で机に向かうしか無かったのである。

## 5. 卒業したのに・・・

---

### 5. 卒業したのに・・・

彼女が離仙して一ヶ月程が経った。なんだかんだと云いながら、それまでは定期便の様に頻繁にあった彼女からの電話と手紙がその間ぷつぷつと途絶えて行った。僅かに下宿に入いった電話は僕が試験の最中だったため、その俣すれ違う格好になってしまった。

一方、卒業への強い望みと絶望との狭間を行きつ戻りつつ、僕は連続する烈しい睡魔にも打ち勝って必要だった全科目の試験を終了する事が出来た。

梅の話題がちらほらと出掛かった三月中旬に卒業合格者が掲示され、その中に自分の名前はあった。

かくして、念願の卒業を無事果たした僕は筆舌に尽くせぬ数々の思い出を抱いて1971年3月末、杜の都・仙台を離れて行ったのである。

\*\*\*\*\*

世界中にその名を馳せる大手電機メーカーH社のその年の学卒新入社員は何と600名を超えていた。ビッグな入社式を終えると早速二週間に亘る入社研修が始まった。研修は合宿形式で、起床に始まって講義研修・食事・反省会・レポート提出・就寝消灯に至るまで数名単位の完全グループ責任制が採られ、僕達新入社員は完璧に管理されていた。

その間、僅かな夜の自由時間を見て、あれ以来連絡の途絶えていた藤本麗子に電話をしてみたが、何故かそれまでと較べて不在の時が多かった。

研修の終わる日に、全員の配属先が発表され、僕はS工場だった。それは、たまたま田舎の家から充分に通える範囲ではあったが、同僚や先輩達とのコミュニケーションを第一義に考え、僕は工場に隣接していたK寮に入寮する事となった。

その翌日は土曜日だった。朝から僕は入寮のための引越し準備を家でしていた。

午前中に荷造りと発送を完了し、午後には先方に出向いて荷受を終わらせた。奔放だった下宿生活から、社会人としての新しい生活に向かって、僕は麓を染め始まった瑞々しい新緑の様に、否、それよりももっと清々しい想いに満ち満ちていた。

そんな僕の爽やかな気分を、そのまま藤本麗子にも伝えたかった。

『学生には、わかんないよ・・・』が口癖だった彼女に、僕の卒業と就職を共に喜んで欲しいと願っていた。

『オヤジ』という最大の関門は未解決のまま最後まで残ったものの、社会人になったその時、それまで大切に育ててきた二人の夢に向かってやっと『現実』に歩き始める事が出来ると未だ僕は思い込んでいたのである。

K寮で荷受と簡単な挨拶を済ませると、僕は新調した背広に着替え、その日の夕方にはバスに乗って彼女の家に向かっていった。その途中、僕は珍しくショートケーキを幾つか買った。初め

ての給与さえ未だ手にしていなかったが、もはや学生では無く社会人としての自分を誇示したかったのである。

僕は彼女の家の門に立った。久々に訪れた彼女の家に変わった様子は何も無かったが、その日は何故か異様な気分を感じていた。

\*\*\*\*\*

『そんな事、麗子にはもう関係無いよ！。報告なんかしに、わざわざ来なくたっていいのに・・・！。』

あれほどまでに待ち焦がれていた卒業と就職を真っ先に報告に行った僕を待たせるだけ待たせ、彼女は開口一番そう言い放った。

あれほど待ち侘びていた筈の僕の卒業を祝福もせず、いきなり硬直した態度を僕にした彼女の身辺にまた何か重大な事が起きたのだと直感し僕は烈しく戦慄（せんりつ）して行った。

何処か場違いの様な異様な雰囲気にも包まれ、当に出鼻をくじかれた複雑・怪奇な想いのまま僕はいたたまれず呆気なく彼女の家を後にしてしまった。

おかしい・・・？。彼女の様子は余りにもおかし過ぎた。どう考えても腑に落ちぬまま、僕は自宅に帰り着いた。

家では、卒業・就職・配属・入寮と概ね予定のコースを辿った僕を祝って珍しく赤飯が炊かれていた。両親は、

「おめでとう！」

と言って僕に心からの祝杯を上げてくれた。不得手なビールに自ら口をつけ、オヤジも僕を精一杯祝福してくれた。然し、それを『ありがとう！』と言って素直に歓べるその日の自分では無かった。

僕を跳ね避けるように辛辣（しんらつ）だった言葉の数々が深く突き刺さり、その晩僕の寝付きは頗る悪かった。

僕が翌日起きたのは正午を過ぎてからだった。学生時代を髣髴（ほうふつ）とする時間帯に朝飯を食べた。ついこの間までのそんな毎日がずっと昔の事の様に思えてくるのは不思議な事だった。

台所で洗い事を終わると、おふくろは老眼鏡を懸けながら裁縫台に戻り、僕に背を向けて座っていた。縫い物をしながら新入社員教育のあらましやK寮に付いて僕に尋ねる事はあったが、藤本麗子とのその後については何も訊いてはくれなかった。オヤジやおふくろにしてみれば、もうとっくに『勝負あり』の事だったに違いない。

「友達に会ってそのまま入寮するから・・・。」

と言い残し、僕はK寮の住所と部屋番・電話番号の記されたメモをお袋に手渡した。前の日の何だか分からない話しを背負い込んだまま新しい生活に入りたくなかった。僕はそれが何故『もう関係無い』事だったのか、考えられ得るケースを想定しながら彼女の家に向かっていた。

その日僕は珍しく茶の間に通された。

いつもは愛想の無い彼女の父親（らしき人）が自ら蛍光灯の紐を引いてくれた。

「ご卒業とご就職おめでとうございます。またうちの娘がいろいろとご厄介をお掛けしてる様  
でして。これからも何卒宜しく願いますよ。」

と、彼は改まった様に僕にそう言った。彼は、その時目の前で起ころうとしている急迫の事態  
を認識しているとは到底思えなかった。

間も無く麗子は台所のフロアーに突っ立ち、茶の間に顔を覗かせた。

『また来たの・・・？。』と云う顔をわざとして、

「人ん家に来るなら、電話ぐらいしてからにしてよ！。こっちだって都合あるんだから・・・！。

」

と、僕に顔をしかめた。両親を前にして僕の顔は見る見る強張って行った。

「麗子、折角いらしてくれたのにそんな言い方ないでしょ！。こっちへ来て座ったらどうなの。

」

母親は太々しい彼女の言動を叱った。彼女は半身になって渋々食卓の椅子に腰を懸け、

「なら、それで・・・？」

とだけ短く言うと、鼻から大きく息を抜いてそっぽを向いた。

厭な予感が背筋を走った。しかし僕も最早覚悟を決めて言った。

「昨日の君、何だったの・・・？。また何かあったの？」

僕の問いに彼女は俯き、足先で意味も無くスリッパを弄り回した。明らかに何かを躊躇（ためら）っていた。それは、決定的な次の言葉を選んでいる様にも見えた。

今度は終局の予感が僕を襲った。彼女は顔を上げた。僕の方を向くと一瞬怖い顔になって言った。

「この際、はっきり言うわ。今、お付き合いしてる人がいるの！。だから、今直ぐ帰  
って・・・！！。」

何と云う告白だったのだろうか。鳥肌が立ち僕は蒼然となった。全身から血の気は引き、身を  
支える事さえ出来なかった。

それは昨日・今日にわかに準備した言葉とは到底思えなかった。何十日或いは何ヶ月も前から  
用意周到に準備され、機を見て発せられた永訣（わかれ）の言葉に相違無い。居合わせた四人の  
視線は、瞬時にして生気を失った。そしてそれぞれはまた別の処にあった。

僕は、そう言い放った彼女から眼を逸らし、うな垂れて目を閉じた。その瞬間、拘り続けた  
親友・河田の言葉が閃光の様に走り抜けて僕の脳天を鋭く刺して行った。

失恋とはこう云うものだったのだろうか・・・。育んできた恋の終わりの儚さを思い知らされた  
空しい想いだった。

悲痛だった。悔しかった。頑張ってきたのに、あんなに楽しく遣ってきたのに・・・と。

『みんな、オヤジがいけないんだ！。オヤジとおふくろに潰されたんだア・・・！。』

僕は、彼女の家の茶の間に座りながら、言うに言えず泣くに泣けない断腸の時を過ごしていた。  
如何にもやり場の無い空白の時間が過ぎて行く・・・。

覚悟が出来ていたとは云え、それは現実とは天と地ほどの違いがあった。完全に打ち拉がれ、がっくりと肩を落とした僕に気遣いをして叔母さんがポツリと言った。

「御免なさいね。あの子、少しどうかしてるのよ、きっと……。思い直す様、親からも言っておきますから。ね、お父さん……。？」

僕にとって、それはせめてもの救いではあった。

## 6. 未練

---

### 6. 未練

満身創痍（まんしんそうい）だった。もう僕はこの家の門を潜る事はないと思った。

「いろいろとお世話になりました・・・。」

流れ出る涙を堪えながら、僕は声にならぬ声を出し手を付き頭を下げて彼女の両親にそれまでしてくれた好意に謝意を表したのである。

僕に、振られたという感覚は無かった。むしろ、それは『やられた』か『負けた』に近いものだった。そこに到達する迄の道のりが彼女にとってどんなに険しくて辛いものであったか、僕には良く判っていた。僕との将来を描けば描くほどまとわりついて離れないあのオヤジの幻影に怯え、トンネルの出口を塞がれた彼女は、半ば窒息状態で針ムシロの辛い日々だったに違いない。

二年間、彼女は僕に幾つかのSOSを送ってくれた。『オヤジ問題』を棚上げしたまま、その救助信号に何一つ応えて上げられなかった頼りない僕に、彼女はいわば三行半（みくだりはん）を付きつけてきたのであろう。

理由がどこにあって僕がオヤジの病的とも云える非人道的な妨害行為を到底忘れる訳には行かなかったが、さりとてそれを責めて彼女の気持ちの復元する訳でも無かった。結局は自らのみその責めを負わせ、その中でまた新たな活路を見出して行くしかその時の僕には無かったのである。

種々な事が秒刻みで頭の中を駆け巡って行く。

付き合ってる男なんて、本当に居るんだろうか。僕を排除する為の口実に過ぎなかったのではないか。もしそれが本当なら、あの熟れた身体は僕だけのものではなかったのかもしれない。そう云えば、あの時の大胆で淫らな仕草は・・・？。

何か酷くおぞましい物に襲われる想いから逃れられぬまま、僕は何時しかK寮の玄関を跨（また）いでいた。

\*\*\*\*\*

S工場に配属になったとは云え、直ぐ実務に就いた訳ではなかった。

配属された僕達は二週間の座学を経て、その後更に二ヶ月間に及ぶ現場体験実習をこなす事になっていた。

S工場は乗用車の電装部品を供給する専門のミルで、従業員は約千人。うちホワイトカラーは二百人ほどである。

製造現場はベルトコンベアー方式で、その流れに沿ってその両側に作業員が立ち並び、凡そその三分の二は若い女性が占めていた。そのせいか、工場内の雰囲気は極めて明かるかった。

研修中、僕は藤本麗子を片時も忘れ去る事が出来なかった。或る日突然訪れた二人の終焉を僕は未だ現実のものとして受け止める事が出来ていなかったのである。

僕は研修の合間を縫って未練がましい電話を彼女に頻りに掛けた。朝・昼・晩。彼女の自宅か



ら勤め先へ。そしてまた自宅へと、まるで僕は狂ったストーカーの様にそれを遣った。

「もういい加減に諦めたらどうなの・・・！」

電話に出ると、彼女は日増しに酷い罵声を僕に浴びせる様になって行った。

彼女の話しは本当だったのかもしれない。そうする事によってのみ、彼女は一刻も早く僕の残像から逃れ様としていたに違いない。僕は次第にそう思い始めていた。

然し、僕にはその準備が未だ不十分だった四月末ごろの或る日の事。

二週間の座学を終えた僕達がいよいよ現場実習に入らんとしていた週末の夜、K寮で新入社員を盛大に歓迎する催しがあった。

入社時の集合研修から凡そ一ヶ月を経過していた僕達は、もはや一端のサラリーマンを気取り、その風格を醸し出していた頃でもある。

歓迎会に参加した工場の偉い人達は、

「諸君は、H社の将来を背負って立つ幹部候補生なのだから・・・」

と、目一杯持ち上げては厭と云うほど僕達に酒を飲ませた。オヤジ譲りで幾らも飲めなかった酒を、僕もつい飲んでしまった。彼女との一件を、飲んで少しでも忘れられるものならそうしたいと思っていた。でも僕に、そんな事は出来なかった。飲めば飲むほどに悔しさは倍加し、酔うほどにもう一回燃りは戻らないものかと、有り得る筈のない妄想に駆られて行った。

予め準備した酒もその大半が底を突き、会のお開きが近付いた夜更け頃、会場となっていた社員食堂を抜け出した僕は、強い衝動を抑えられず寮の玄関口にあった公衆電話から、彼女の自宅へダイヤルをまわし始まっていた。彼女が受話器を取った。

「昭だけど・・・」

酒のせいで僕は少しもつれていたのかも知れない。彼女は神妙な声で聴き返して来る。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「岡田です・・・。」

「.....」

「もしもし・・・？」

「...」

「もしもし、もしもし・・・？」

電話の相手が僕とわかってから彼女はしばらく応答しなかった。

長い沈黙が続いたあと、彼女は耐えきれなかったのだろう。

最後には、

「あれほど止めてって言ったでしょう！。変態みたいな事しないでよ・・・！！」

と、堰（せき）を切ったように彼女は受話器の向こうから思い切り僕を罵倒（ばとう）したのであった。

歓迎会はクライマックスを迎えていた。同室の先輩が僕の名を甲高く呼んで僕を探す声が聞こえた。夫々、出身大学の応援歌を同窓メンバーで唄おうとの事だった。僕は失意のまま喧騒の中へ戻って行った。

## 7. 手紙を焼いて

---

### 7. 手紙を焼いて

翌朝、僕はひどい二日酔いだった。夜中に何度も吐いた。

朝飯どころではなかったが、庄（お）して家に戻った。

卒業してから、週末になると毎週のように家に帰ってくる僕に両親はどこと無く安堵してる様だった。一時断念し掛けていた卒業を無事果たし、念願のH社に腰を据えていた事が親にとっては何よりの事だったに違いない。

仙台の下宿から返送しておいた生活物品の在り処をおふくろに尋ねると、それ等はダンボールに入ったまま自室の押入れに押し込んであると言った。

箱は直ぐに見つかった。卒業後帰省して直ぐ開けたもの、過日入寮の時開けたもの、そして全く開梱していない物等いろいろだった。夫々には、『専門書』・『衣類雑貨』・『テニス関係』・『その他』等と太い黒のマジックで明瞭に書いてあった。

『その他』と書かれていた箱には、その何箇所かに『開封厳禁』と更に大きな字で朱書してあった。押入れからそれを引っ張り出し、幾重にも念入りに貼られていたテープを剥がして行った。

僕は箱の上蓋を開けた。まだひと月余りしか経ってないが今となっては懐かしい下宿の部屋の煙草の匂いが鼻を突いた。

そして、星の数ほどの愛を綴った黒いインクの微かな香りが辺り一面に漂ってくる様でもあった。手紙は凡そ年代順にびっしりと並んで積まれていた。三百通ほどはあった。その中からランダムに幾つか手に採った。

ついこの間のもので、記憶も封筒もまだ真新しいもの。僕が未だ彼女との交際を躊躇してた頃のもの。オヤジの妨害に、その理由が分からず悩み続けていた時のもの……。……………。

とても一気に読み切る事の出来ないそれら総ては、僕と彼女が育んできた大事な、大事な愛の玉手箱だった。忘れ様にも忘れられないあれ程までの愛の記しを、

『成り行きだった。間違いだった。みんな嘘だった……。』と、君は果たして言うのだろうか……？。

そんな事もあるうかと、それなりの準備と覚悟をして来た筈ではなかったのか。親不孝をせずに済んだじゃないか……。そう思って諦めるしか無いじゃないか……。

どんなに自分を宥めてみても、僕の心は癒やせなかった。心の奥底からどくどくと音を立てて流れ出る鮮血は身体中を一周りすると、純白だった彼女の愛をまるで娼婦の様にふしだらで薄汚ない色に見る見る変えて行った。

そして、彼女の『永遠』を誓った僕への愛は或る日突然『過去』になり、僕の彼女への偽らざる『愛』はもはや『憎しみ』に変わって行った。

僕は読み漁った幾通かの手紙を元に戻し、静かに蓋をした。ビニールテープでもう一回眼張りをするとダンボールを丸ごと肩に担ぎ、それを自転車の荷台に確りと括り付けた。この晴れがましい時にする事かと、僕は情けない思いだった。然し、止めど無く込み上げてくる悔しさと復讐心にも似た強い憎悪の念は僕に重いペダルを踏ませ、傷心の僕を一路彼女の家に向かわせて行

った。

彼女の家の門の前で僕は自転車を降りた。僕は、積んできたダンボールを荷台から降ろしそれを両手で抱えると門扉を開け、のこのこと玄関に向かって行った。

いち早く麗子の母親が顔を覗かせサンダル履きでやって来て、  
「あら、お休みですか・・・？」

とだけ言うと、僕を怪訝そうに見詰め一抱えのダンボール箱に不穏な視線を送った。  
「ところで、何なんですか。それ・・・？」

改めて叔母さんが僕に訊いた。僕は抱える様に持っていたダンボールを庭に降ろした。  
「手紙なんです。これ全部・・・！」

母親は降ろされた箱のすぐ傍に両膝を立ててしゃがみこむと、興味深そうにそれに見入った。僕も同じようにしゃがんだ。そして眼張りしたテープを一つずつ剥がして行った。僕は蓋を開けた。箱一杯にぎゅうぎゅう詰まった手紙を見ると母親はそれに驚愕して訊いた。

「こ、これ、全部なの・・・？」

「ええ、まあ・・・。」

「ちょっと拝見していいかしら・・・？」

僕は首を少しだけ動かし、無言でOKの合図を出した。本当は手紙の中まで全部見て欲しいと願っていた。

彼女はその内の何通かを代わる代わる手に取り出すと、封筒の表と裏を交互に見ながら僕に言った。

「あらァ、これ全部麗子の字じゃないのォ・・・。随分とあるのねえ・・・。」

母親は、自分の娘が惚れた男に書いた手紙の余りの多さに幾度も深い嘆息を洩らした。

その手紙の数だけ僕を愛してくれていた筈なのに、或る日忽然（こつぜん）としてそれを吐き捨ててしまうのは余りにも惨（むご）たらしい。それが僕には到底耐えられない。彼女の仕打ちは余りにも酷過ぎる・・・。

と、僕は心底から迸（ほとばし）り出る感情の老廃物を藤本麗子の母親に形振り構わず吐露して行った。それは次第に昂揚し、捨て場の無いヘドロと化して行った。

僕はポケットからライターを取り出すと手紙の一つに火をつけ、庭の片隅にあったドラム缶を置いただけの塵（ごみ）焼きにそれを投げ入れた。

僕はダンボール箱から取り出した封筒を片っ端からビリビリと引き千切り、燃え盛る蒼い炎の中に次々と放り込んで行った。乾いた手紙は、めらめらと音を立てて良く燃えた。びっしりと書き綴られた黒いインクの文字が、焼け出されて苦しそうに喘いでいるのがよく見えた。

やるせない僕を励まし続けてくれた愛の形見とは到底思えなかった。最早それは紙くず同然だった。真っ黒く煤（すす）に汚れたドラム缶の中で燃え盛る炎と立ち上る黒褐色の煙は、小春日和の白昼の空をみるみる焦がして行った。

僕は何通かの封筒から手紙を抜き出すと、目に留まった文章を突然読み始めて行った。

『私達があればほど待ち焦がれていた貴方の卒業は、もう直ぐ其処にあるわ。

眠くなったら熱く沸かしたお湯を注いで飲んで下さい。今日は昆布茶を送ります・・・。』

『岡田家で、私は一体どんな風に映っているのかしら・・・？。

早く貴方のお父さんに会いたい。いいお嫁さんになりたいから・・・。』

初め僕の声は、目の前でへたった様にしゃがみ込む叔母さんに聞こえる程度だったが、感情の高ぶりと共にそのトーンは見る見るエスカレートして行った。

『テニスとギター。動的な貴方と静的な貴方。私はどちらの貴方も大好きです。

何時の日か、私のフルートと二重奏が出きると良いわね。』

『貴方の大きなその胸に抱かれていると、麗子は蕩けてしまいそう・・・。』

『私、少し弱気になったのかしら・・・？。 構わないから、ぐんぐん私を引っ張って・・・。』

『.....』

僕は、読み終わると縦横に破り捨て、構わずそれを炎の中に投げ入れた。その時の僕はもはや何時もの僕ではなかった。心の平衡を見失ない、僕は何処までも落ちて行く狂った屍（しかばね）の様だった。

僕が狂い始めて暫く経った時。それまで固く閉ざしてあった二階の部屋で庭側の窓が僅かに開き、その中で人影が動いた。僕は麗子の在宅をその時初めて知った。

麗子は慌てふためいてドカドカと階段を駆け降りてきた。熱く焼けたドラム缶の横で喚（わめ）き立てながら手紙を破り続ける僕にじっとその視線を向けると、そこでただ呆然と立ちすくんだ。僕は近づくクライマックスを全身で感じ取っていた。僕は彼女の方を見遣った。その眼は既に真っ赤に充血し、大粒の涙が頬を伝ってぼろぼろと床に落ちて行った。

「もう、止めてよ！。お願いだからア...！！」

渾身の力で絶叫すると海老の様に身体を屈ませた。彼女はその場で烈しく泣き崩れ、両手で顔面を覆った。

目の前で繰り広げられて行く陰惨な光景に、僕の心は寧ろ鎮まって行った。

膨大な手紙の数々は僕にとって紛れも無く彼女そのものだった。然しそれが適わなくなった以上それ等総てを焼き去り、そこで演出された惨劇を記憶に留める事によって逆に二人の間に確かな愛が実存した事を永遠のものにしたいという奇妙な願望が僕には強くあった。又そうしなければその望みは叶えられないものだとも考えていたからなのである。

それは、まるで惚れ過ぎた男を永遠に自分だけのものにしたいと念じた女が引き起こした異常且つ凄惨な過去の事件を髣髴（ほうふつ）とさせたのであった。

## 第5章 運命（さだめ）

## 1. 出会い

二ヶ月に及ぶ現場実習が始まってから凡そその半分が過ぎていた。

僕の配属された生産現場はベルトコンベアー方式による連続流れ作業で、誰かがつまずくと後工程がごとごとくストップするという厄介な作業だった。作業費をコストミニマムでとの主旨だったのだろうか。コンベアラインで数珠玉の様にへばり付く作業系社員の殆どは中卒の未だ若い女の子達だった。

僕はS工場に配属されていた三十余名の同期仲間とは満遍無く良好な関係を保っていたが、その中でもH大の機械工学を出ていた馬淵とはテニス仲間と云う事もあり取り分け親しかった。

建ち並ぶ幾棟かの工場には皆夫々大きな社員食堂があり、昼のサイレンが鳴るともうそこは我先にと争うほどの混み様だった。僕は其処で良く馬淵と昼食を摂った。彼はそこでお喋りするハイティーンのギャル達に不謹慎な視線を送りながら、大好物だったカレーうどんを美味そうに啜るのが好きだった。

あと数日で実習も終わろうとしていたある日の昼の事。

「お前、どうせ同じカレーじゃないか！。たまには一緒に並ぼうぜ！」

と言う彼の強引な誘惑に負けて、何時もはカレーライスだった僕はその日、彼と同じカレーうどんの長い行列の最後尾に並んだ。直ぐ横隣りのカレーの並びは僕達の列より長さがその倍程はあったらろうか、普段よりだいぶ混雑している様だった。それを見た馬淵は、

「な、お前・・・。ほら、こっちで良かったろ、こっちで・・・？」

と、早速僕にそう言うと、誇らしげな顔をして見せた。

丁度その時だった。その長い列の後方で若い女性がひょこんと頭を下げると僕に爽やかに微笑んだ。僕も反射的に頭を下げた。然しそれが誰だったのか、僕が思い出す事は暫く無かった。ほんの一瞬の出来事だったのに、その様子をしっかりと目撃した馬淵は何やらひどく驚いて僕に言った。

「お、おい。何だよ、お前・・・？」

「... ..」

「だ、誰よ。あいつ？。あの赤い超ミニは・・・？」

「・・・？。いや、ちょっと？。実は俺も思い出せねんだ。あれ、誰だったっけ・・・？」

「ほ、ほんとかよ？。お前も欲がねえ奴だな・・・。だったら、俺に紹介しろよ・・・。」

「・・・！？。」

そんな馬鹿話を交わしながら立ち止まってしまった僕と彼に、後列から痛烈なブーイングが飛んだ。僕達は慌てふためいて前に進んで行った。

現場実習を無事終了した僕達は、その年の七月、遂に正式に職場配属される日を迎えていた。現場の油焼けとテニスの日焼けで真っ黒だった僕は、まるで永い刑期を終えた黒い受刑囚のよ

うだった。

配属先は経理部で、総勢二十人程の所帯だった。その日の朝、僕は部員の一人一人から自己紹介を受けていた。一番最後に、

「小早川咲です。どうも・・・。」

と、笑顔で話した女性がいた。その瞬間、『あ、あの子だ・・・！。』と、僕は永い間の記憶喪失から醒めたような想いがしたのである。彼女は、週末になると仲の良い女友達と会社のコートにふらっと来ていたテニス部員であり、そしてそれは又、過日社員食堂で杉本を前に頭を下げたあの時の娘でもあった。

「あ、この間はどうも・・・。」

つい無意識に出て仕舞った僕に、

「何だお前達、もう知り合ってるのかよウ・・・？。」

と、先輩達から早速冷やかされる始末となった。

彼女とは背中合わせの席だったが、その様子を窺い知る余裕などその頃の僕に未だある筈も無かった。

課員の職務は各々の商品や製造部門ごとに分担されており、その日から数日間は銘々から指導を受ける事になった。小早川さんからも複式簿記の要となる振替伝票について手解きを受けた。しかし、彼女は機械的にそれを覚えているだけで、その原理を僕に教える事は出来なかった。それは無理も無い事だった。彼女は地元の高校を出て僅か一年前に入社した未だ幼い十九歳の少女だったのである。

S工場では昼食後、ゆっくり食休みをする人は少なかった。それは老若男女を問わず皆『パンポン』なるものに興じるからである。

それは、30～40cm四方の板切れをラケット代わりに使い、構内路上に描かれた数メートルにも満たない縦長の小さなコートの中でするミニテニスの様なものだった。

しかしH社においてそれは、全事業所参加の社長杯争奪戦が毎年行なわれて居り、まさに伝統的で由緒ある最もメジャーな社内スポーツの一つだった。

最初、僕達新入社員はその余りの熱気に押されてプレーの輪の中に容易に入っては行けなかった。精々、良く手入れされた近くの芝生で胡座を掻き、だらしなく煙草を吸いながらそれを観戦するのが落ちだった。

「ウワーッ、凄いぞ！。ナイスショット！」

軟式のボールを使いながらも各ショットのスタイルは硬式テニスの感覚に限りなく近いゲームを見ながら、何時もの様に僕は相棒の馬淵と拍手喝采を送っていた。

彼は技術屋で、僕の配属された経理部とは徒歩で10分ほども離れた或る部品の設計部門に配属になっていた。正規に配属になってから、彼は昼飯を食べ終わると、のこのこと僕の処まで性懲りも無く日参して来ていたのである。

「おい、何見てんだよ！？」

何の応答も無い馬淵に僕は訊いた。

「お前とは違うの見てんの！」

彼はそう言うと、ニタニタと厭らしい笑いを浮かべて僕を見た。

「何だよ…？」

と訊くと、

「とぼけんなよ。お前…。ほら、良く見えんだろ？。あれよ、あれ…。」

と言って煙草臭い下唇をその方向につん出した。

彼が指し示したその先には、真っ赤なミニスカートに白いパンプスを履いて無心にプレーする小早川咲の姿があった。

なるほど、周囲には目もくれず夢中でプレーする彼女の下半身の動きを見ていると、彼の言う通りそれは確かにセクシーなものだった。膝上20cm程もあろうかと思われる超ミニは、彼女が動くたびに大きく揺れ、時にはふっくらとした彼女のお尻と太腿との括れ辺りが卑猥にも見え隠れしていたのであった。

それから幾日もしない週末の休みの日に、僕は職場の先輩からドライブに誘われた。特に断る理由も無く僕は一つ返事でOKした。それはS工場が毎月定期的に発行している社内誌で連載中の『社員リレードライブ』なるものに、編集部から寄稿依頼が先輩にあったというものだった。

行き先や同行のメンバー選びは先輩の裁量の中にあつた。その顔触れは彼の奥さんともう一人は何とあの小早川咲と云う事だった。場所は隣県のキャンプ地にしたが、どうせ行くならテント泊がいいと云う事になり、僕はそれに従った。先輩夫婦や彼女達と一つテントの中で寝るのは些か遠慮もあつたが、道中はなかなか愉快満載の楽しい一泊二日ではあつた。

仕事・テニス・思い掛けない同伴の旅…。

僕と彼女は、急激に接近して行かざるを得ない状況の中に否応無く置かれて行ったのである。

\*\*\*\*\*

小早川咲には同じ高卒で、事務所配属になっていた入社同期の仲間が矢張り三十人程度はいた。うち男子は二十人ほどで、彼等は入社以来『同期会』なるものを創って四季折々に会合を開き最後のティーンエイジを謳歌している様だった。

彼女は集団の中で自らリーダーシップを取るタイプの子では決して無かったが、従順で素直な性格にその評判は一様に高かった。

全体的にやや小造りではあつたが、健康的で弾けそうなその身体を惜しまずに強調して見せる彼女には、工場の助平な男達の間で不動の人気があつた。

或る日、小さなこんな事件があつた。それは、彼女と彼女の属する同期会のメンバーが親睦旅行から戻った週初めの午前中の事だった。

旅行中に撮られた何枚かのスナップ写真が職場に出回っていた。その内の一枚に小早川咲が友人の男と二人肩を組んで親しそうに写したものがあり、皆の関心を呼んでいた。

職場の大半はやっかみ半分、冷やかし半分で騒ぎ捲っていたが、その写真を強引に奪い取ると机の引出しからマジックを取り出しそれを真っ黒に塗り潰す一人の男がいた。それは、僕の直ぐ隣りに座る前年入社を進藤だった。

僅か一瞬の出来事だったが、その一部始終を見た小早川咲は顔をしかめ、何やら困り果てた様子で湯沸し室の方へ逃げ出して行ってしまった。

彼はその後、真っ黒く塗りつぶして最早何が何だかわからなくなった写真を自分の机の上の黒いゴムマットの上に乗せると、次にカッターナイフで原形を留めなくなるまでそれを切り刻んで行った。

執務中、机の上で展開された訳の判らぬ悲痛なドラマだった。それを見た周りの者は、余りの陰惨な光景に絶句し、其処ではそれ以上何も語らなかった。

その晩、寮に戻って夕食を済ませた僕は同じ寮で階上の彼を尋ねた。その日の事件に僕は何か深い関心があった。

夕方に早々と退社すると、決まって何処か場末の飲み屋に立ち寄りなければ寮には帰らないという噂のあった彼だったが、その日は珍しく寮に戻っていて在室だった。

寡黙な彼は未だ入社して間も無い僕に多くを語ろうとはしなかった。しかし、彼の止まない酒に週に二度三度と厭な顔もせず付き合う彼女は彼にとって無くてはならない心の妻だと、彼は僕に真顔でそう語ってくれた。それでも一つだけ珍しくムキになって悔しがる事があった。

「あいつ、素直だし可愛いもんだからさ他の誰からも惚れられちゃうんだよ・・・！」

彼はもの恥ずかしそうに僕にそう言うと、その顔を一段と皺（しわ）くしゃにして飯より好きだった水割りを一気に飲み干した。

\*\*\*\*\*

夏の実業団対抗を近県で終えたその日の夕刻、同行のメンバーとはH駅で散会すると僕は応援に駆けつけて呉れていた小早川咲と駅前のレストランでジョッキを傾けていた。

「じゃ、乾ばーい・・・！」

冷えたビールは炎天下の死闘で焼けた喉もとを切り裂く様に通り過ぎて行った。僕は初め威勢良くビールを飲んだが、それも精々ジョッキの半分ほど迄で、以降そのペースはグンと落ちた。

彼女はその日、ノースリーブのシャツと短めの半ズボンで、そのどちらも白だった。その上、小麦色に日焼けした小さめの顔と少し突き出た胸の二つの脹らみが、いかにも若々しい艶やかさを演出していた。

僕は苦味を増したビールを少しずつ口にしながら、茫洋とそんな彼女を眺めていた。襟元や袖口から時折見え隠れし、僅かにはみ出ていた健康的な彼女の胸周りに目を遣りながら、僕は決して追ってはならない過去の面影をダブつかせ、取り返しのつかない回想について耽っていた。

奥深い心の襞に刻み込まれたトラウマは、僕から人を愛する気持ちを激しく奪い剥がしてしまったのだろうか。目の前の目映いばかりの愛くるしい少女に、僕は不思議にも愛の欠片（かけら）さえ何一つ懐く事も無かったのである。

\*\*\*\*\*

「ね、聴いて！。私たち女の子の間で岡田さんの事、何て言ってるか判ります・・・？」



ほんのりと顔を赤らめて彼女が聞いてきた。

「ん・、何だろうね・・？」

「あのね、うふふ・・。『黒ン坊や』って呼んでるの・・」

そう言うと、トウモロコシの実の様に見事に生え揃った白い歯を見せてあどけなく又笑った。

「黒ン坊やか、うーん・・?!。」

実は、僕は入社して最初の実業団で負けた時、片意地を張って丸坊主にしていたのである。その時の自分には当に的を得たニックネームだったが、田舎では『会長』と呼ばれていた事など僕は事細かく話して行った。話題が僕の学生時代に飛ぶと、

「好きな人はいるんでしょ・・？」

と、間髪を入れず彼女は僕に訊いて来た。

その日の彼女にとって、それは或いは僕に訊きたい最大の関心事の一つだったのかもしれない。無論、その頃の自分とて胸に痞えたままになっていた悲恋の全てを誰かに吐露したい強い想いに駆られていた時でもあった。

「ん・・。居ないよ。今は・・。」

少し間を置いたが僕はそう彼女に答えた。

「えッ!？」

「ウン、振られたのかな?。結局・・。」

他人の失敗談義はそれほどまでに興味深い事だったのだろうか。彼女は張り出していた胸の下でその両腕を軽く組みながら一段と前に身を乗り出して来た。

彼女の若い肌が放つ匂いは店内の冷えた心地よい風に乗ると、フェロモンの香りとなって僕の臭覚を捉えて行った。

「何時なの?。それは、何故?。」

「ついこないだの事さ。いろいろ複雑な事情(わけ)があつてね・・。」

「岡田さんが好きになった女性って、どんな女性なのかなあ?。」

理知的で、きっと綺麗な女性(ひと)なんでしょうね。会ってみたい気もするわ、私。

「ねえ、その人の事、本気で好きだったんでしょ?。」

「あア、まあね・・。」

「岡田さん、ひょっとして今でも彼女の事、好きなんじゃ・・?。」

「かも知れない・・。」

「へえエ、そうなんだア・・。」

僕を知らない小早川咲が、未だじくじくして塞がらない僕の生傷を平気で掘り返して来たのは致し方の無い事だった。彼女と一緒に乗りこんだタイムカプセルは、その日の僕を何処までも無垢(むく)にしてくれた。

彼女の、いわば誘導尋問につられるまま、僕は破局へ到らざるを得なかった藤本麗子との顛末の一部始終を淡々と彼女に話して行ったのである。

\*\*\*\*\*

「私生児って・・・？」

「それはね、正しくは『嫡出（ちやくしゅつ）でない子』と言ってね。自分の父親が誰か判らない、って事。 わかる・・・？」

「ふーん・・・。そんな事って、あるんですかねエ...・・・？」

容赦無く大地を照らした陽はやや西に傾いたものの、店の外は未だ焼けるような暑さにむっとしていた。駅前から同じバスに乗り込んだが、途中で下車して行った彼女の事も分からぬほど僕は寝込んでしまっていたのであった。

## 2. 何気なく

---

### 2. 落とし穴

ちょうどその頃、僕より1年先輩の進藤は、どうにも馴染めない実務社会を離脱し北海道で親の営む呉服店の後を継ごうかと思案している最中だった。

「折入って相談したいんだが・・・。」

と、彼から持ち掛けられた僕はある退勤後、彼の部屋を訪れていた。

相変わらず掃き溜（ため）の様な埃っぽい畳の上に愛用のボトルを置いて、彼は何時のものか判らぬ古びたスルメを引き裂きながらちびり、ちびりと遣っていた。

「オ、岡田、よく来てくれた。まあ座れや・・・。」

彼は僕にそう言うと、早速作ってくれた水割りにサイコロほども小さくなった氷を幾つか投げ入れ、それを僕に差し出した。それから暫くは、彼の会社や職場に対する愚痴を延々と聞くことになった。

「それでさ、俺田舎に帰るって言ったら、あの娘一緒に来てくれるかなア？。岡田よオ、お前から上手く言ってくんない？。頼むからさア・・・。」

「なに情け無い事言ってんの。そんな事、自分で言わなきゃ・・・！」

その晩の最後になってやっと切り出した彼の願いを冷たくそうあしらうと、僕は部屋を後にした。

進藤の思い詰めた話を聞いた僕は、彼のいわば『慰安婦』では無いかと職場で噂される小早川咲の不思議な心境を逆に問い質して見たい気持ちに駆られて行った。

それから幾日か経った週末の午後、テニスコートで僕は進藤や小早川咲と珍しく一緒になる日があった。二人のテニスは、いわば羽根突きのように様にはならなかったが、それでも彼女の方が未だ増しだった。

「後でコーヒーでも飲まない？。ちょっと聞きたい事あるんだけどさア・・・。」

「何かしら・・・？」

彼女は少し怪訝な顔をしたが、僕の要請を一つ返事で了解してくれた。

ネットを挟んで話しを付ける僕と彼女を進藤はベースラインの向こうで見て見ぬ振りを装っていた。

以前にも立ち寄った事のある駅前のレストランで約束のコーヒーを飲みながら、僕は彼女の進藤観について単刀直入に訊いて行った。

仕事が厭で、出来るだけ早い時期に田舎の北海道に帰りたいという彼の意向は彼女も充分知っていた。しかし、話が彼との結婚にまで飛ぶと、とても其処まで深く考えている様子は無かった。

。

持ち前の明るさと気取りの無い性格から社内の人気者だった彼女は同期会を中心に大きな友達

の輪を持っていて、交友関係は極めて広がった。そんな彼女にとって進藤は単にその中の一人であったに過ぎなかったのだろうか・・・？。小早川咲を溺愛していた彼に、僕はその時強い哀れみさえ覚えたのでもある。

小早川咲と進藤と僕達三人は、奇妙で微妙な関係を保ったまま同じ職場に居続けた。

先輩の進藤は、退勤後に彼女を誘う時、一体どのような連絡方法をとっていたのか最初僕には何の興味も無かったし、良く分からなかった。

しかし、知らず知らずのうちに僕も彼女と一緒に居たいと思う時間が増えて来ると、退勤時刻までお互いが確実にその意思を相手に伝達する方法を編み出さなければならなくなって行った。何時しか僕達は、どちらかが職場の入り口に置いてあったタイムカードの向きを逆さまにする事でその意思表示とする秘密協定を取り交わしていた。当にそれはゲーム感覚に近かった。無論、待ち合わせの時刻と場所は予め決めておいた。ひょっとすると、彼女はその頃、目まぐるしく向きが変わる二枚のタイムカードを頻繁にチェックしていたのかもしれない。

協定が出来ると、その日の都合や気分次第でどちらからとも無く其れを乱用し、僕達二人の密会は急に安易なものになって行った。協定の最初の活用は、それが成立した翌日に然もそれは彼女の方から先にあった。

約束のレストランでお茶を飲みながら彼女の話聞いた。

「この間友達から言われちゃった・・・。」

「何て？」

「いいとこ、見ちゃったわよ、だって・・・。」

「ふーん・・・。」

そう云えば、過日僕も同期の何人かに同じ事を言われていたのを思い出した。

予め決めておいた待ち合わせの場所と云っても、それは時間の経過と共に余り良い場所では無くなって行った。仕事やテニスを通じて僕の顔が工場内でそこそこ知れてくると、結構いろんな人に目撃され次第に良からぬ噂が立って行くのであった。

「別に気にする事は無いよ。」

「そうですよね。岡田さんとは何の関係も無いし、唯の友達ですもんね・・・。」

彼女は少しわざとらしく念を押す様に僕にそう言った。そう、それは確かに彼女の言う通りだった。その頃の僕と彼女に、人から言われるような関係は未だ何も無かった。

僕はその日、彼女の主題は進藤との一件だろうと勝手な予測を立てていたが違っていた。

不可解だった彼女と彼との件も済み、とっぴりと日も暮れてそろそろ帰ろうかと云う時だった。

「良かったら、来ない・・・？」

彼女は忽然と僕にそう切り出すと、僕の反応を何う様に少し首を傾げた。

そんな期待感はその時の僕の何処を見渡しても無かった筈なのに、身体中を電気が突き抜ける程の衝撃があった。

多少の思い過ごしがあるにせよ、入寮以来自慰さえ遠ざけていた自分にとって、それは願って

も無い甘い誘惑ではあった。然し、同時にそれはその先どんな展開になるかまでその道筋を明快に見極めなければ安易に応じられない恐怖の誘いでもあった。

「だってさ、誰か家にいるんだろ・・・？」

実は、身震いが出るほどおぞましく厭らしい牡の本能を感じながら僕は彼女に確かめた。

「ううん・・・」

とだけ言って彼女は2,3度、首を横に振った。

父親が永らく入院中だと云う事は知っていたが、母親も信仰の関係で度々家を空けると云う事だった。

彼女の誘いに男の強い衝動が無い筈は無かった。吞んでしまえばその先どうなるかは自明の理だった。然し、そうまでして飢えた狼になりたくも無かったし、事実、妹の様に愛くるしい彼女を玩具代わりにしようとする自分に激しい嫌悪感が渦巻いていた。

「誘ってくれるのは嬉しいんだけどさあ、だけどね、誰も居ないのに男なんか家に入れちゃダメだって・・・。」

又と無い絶好の誘惑に舌を噛み切る想いでそう云った僕とはまるで対照的に、彼女は全くと云って良いほど無警戒な表情で言った。

「だって、私一人で淋しいんだもん。でも、如何してそれがいけない事なの・・・？」

そのころ、彼女の性に対する認識や興味は浅く、純粹で無垢な未だ少女のレベルだったのである。

その功罪の裏表を総て知りながらも、淋しさの余り僕の手を引く彼女をそのまま見過ごす訳には行かず、その夜は結局、彼女の家まで同行し僕は一時間ほど茶飲み話をして寮に戻って行った。

\*\*\*\*\*

暫く続いた残暑も影を潜め心なしか日も短くなって行った頃、僕が彼女の家を訪れる頻度は徐々に増えて行った。僕は彼女のいわば『ガードマン』的な役割でその殆どはせいぜい二、三時間程度の身辺警護だった。しかしそれは或る日、その後の展開を決定付ける大きな分岐点となって行ったのである。

その晩彼女は僕を六畳ほどの洋間に通し、

「汚なくて恥ずかしいんだけど、ここで少し待っててね・・・。」

と言うと、台所の方へまた戻って行った。其処は初めて通された部屋だったが、きっと彼女の部屋に違いないと勝手な想いを巡らせながら僕は部屋の中を物珍しそうに見漁っていた。

勉強机とそのすぐ横にある本棚にはついこの間まで女学生だった彼女の面影が随所に残されていた。ソファとベッド。そして、誰が弾くのか真新しいエレクトーンが一台あった。部屋の右隅には赤茶色のギターが立て掛けてあったがそれはたっぷりと埃を被っていた。

建設業を営んでいた彼女の父親が自ら建てたと云うその家は築後まだ日も浅かったが、室内外の荒れ具合は一人淋しがっていた彼女のそれ迄の話しを充分に裏付けるものでもあった。

間もなく彼女は缶ビールと少々の粗末な摘みを盆に載せて持って来たが、

「すみません・・・。」

と言ってちょこんと頭を下げると、慌しく又部屋を出て行った。今度は恐らくシャワーにでも行ったのであろう。そう思いながら僕はただ茫洋と時を過ごしていた。

愛くるしい少女の『身辺警護』と称して彼女の家を度々訪れるようになっていた僕は、実は急速に増幅して行く烈しい呵責（かしゃく）の念に苛（さいな）まれていた。

それは、たった一人で夜を明かす彼女への不憫（ふびん）な想いにその端を発したとは云うものの、純朴な彼女との間に流れる心地よい時間空間を楽しむに飽き足らず、未成熟だが弾むような若い牝の匂いを嗅ぎ付けてしまった自分の飢えた性をその時の自分にはっきりと覚えたからに他ならなかった。

ベッドは部屋の左側に、壁に押し付ける様にしてあった。他の部屋と同じように整理整頓が行き届いているとはお世辞にも言えなかったが、それでも女の子の部屋らしくピンク色の可愛いベッドカバーがその上には掛けられていた。

僕は缶ビールの栓を開け、それを口にしながら立て掛けてあった埃っぽいギターを手にとると僕はベッドに座った。ギターを手にするのは久し振りだった。案の定、音はまるで狂ったままである。

残ったビールを一気に飲み干すと僕は手際良く調弦をして行った。たっぷりと含んだ湿気のせいか、その音色はくすんでいて伸びがない。少しだけスケール練習をすると僕は何時の間にか好きな旋律を弾いていた。

僕の家で、下宿で、中学校の宿直室で・・・。

『あれは、虚像だったのか・・・？』

消えかかっていた筈の映像が薄ぼんやりと映し出され、流れ星の様にまた深い闇の中へ消えて行った。

弾き終わると彼女が入り口に立ったまま僕に拍手をしてくれた。

「ウワー、すごい！。岡田さんて、何でもやるのね。とっても悲しそうなメロディね！その曲、何ていうの・・・？」

美しい哀愁の旋律の奥に潜むおぞましい牡の生理の事など、彼女には知る由も無かった。彼女はまるで親猫の廻りに寄り付く子猫の様に、弾き終ってベッドで大の字になる僕の隣に来ると平気で其処にちょこんと座るのだった。

僕は天井を見上げていた。そんな僕を無邪気に覗き込む彼女の前で、彼女には全く知り得ない汚らわしい陰謀を企てている自分に気付いていた。

『やる・やらない・やる・やらない...・・・。』

僕は野獣のような性本能と理性との狭間を幾度と無く行き来していたが、一度覚えた甘い悦楽の中へ流される俣となってしまった。

\*\*\*\*\*

「ねえ、止めてえ！。お願い・・・！」

しゃくりあげる様に力なく哀願する彼女を目の当たりにしながらも、僕は登り始めた山を途中で下りてしまうことは出来なかった。その時、彼女の何処までも清く澄んだあどけない瞳の中

には、切り裂かれる痛みと何か判然としない苦痛に耐えきれず流れ出る涙とがあった。

然しそれとは裏腹に、一気に上り詰めようとする僕の激しい動きにも微妙に反応を変えてくる彼女の微かな表情を確かめながら、僕は目標の頂きに達するのだった。

ほろ苦い恍惚の時間が終わった。その瞬間、僕達二人は、ただ快樂だけを求め合う卑しい男と女に成り下がった様な、そんな悲しい想いに身を震わせた。

烈しい愛を燃え盛る褐色の炎の中に葬ったあの陰惨な光景が瞼に残る以上、水・火を潜るような恋愛ごっこは真っ平御免と心に固く決めていた僕は、恍惚の後の独特の虚脱感を覚えながら何処か格好の逃げ場を探し始めて行くのでもあった。

### 3. 一枚のメモ

---

#### 3. 一枚のメモ

彼女と性的関係を持ったからといって、会社や職場内において僕達二人には何の変化も来さなかった。それどころか中井川咲と僕とは、その後も例の協定をフルに活用し続けて頻繁にお茶を飲んでいて。そしてそれが無い時、彼女は相変わらず進藤の心の捌け口としてその機能を充分に果たし続けているのでもあった。

僕は意に反して、その後も断続的に彼女の家に行った。当然、二人の間には何らかの形で性的関係はあり続けたが、その割には何故かエスカレートしては行かなかった。

それは、彼女が僕に明確な恋愛感情を懐いてはいなかった事がその大きな理由の一つにあった。

従って、一定の肉体関係を持つに至った以降においてさえ僕は彼女にとって恋人でも何でもなく、安心して話せる唯のお兄さんに過ぎなかったのである。進藤との間に、陰湿だが意味不明の関係が相変わらず存在し続けていた事の影響も或いはあったのかも知れない。

いずれにせよ、その頃の中井川咲には、『結婚』という概念そのものがまったく存在せず、まして僕の事などその対象である筈も無かったのである。

一方、僕の方にも恋愛感情はさらさら無かった。顔・身体・性格と三拍子が凡そ揃っていた彼女の事を『好きか、嫌いか・・・？』と訊かれればそれは好きに決まっていたが、それは僕で無くとも職場まるごと皆同じである。

然し、僅か数ヶ月前に見た地獄から僕は未だ完全に這い出ていなかったし、それら一部始終が僕には致命的なトラウマとなって中途半端な恋愛や結婚には極端なアレルギー症状を示していたのは紛れも無い事実だった。

自分が理想の女性といつ結婚するのか、その頃の自分に判る筈も無かったが、結婚を前提としない異性は僕にとって『遊び』かせいぜい『つなぎ』でしかなかったのでもある。

\*\*\*\*\*

それはある金曜日の夕刻の事だった。終業時間を過ぎて誰も居ない職場に戻ると、僕の机の上に裏返しされた一枚の小さなメモが置かれていた。その差出人が小早川咲である事は僕にはすぐ解った。

「何だろう・・・？」

デートの誘いならタイムカードがひっくり返っているはずなのに。憶測できない疑念を覚えながら僕はそれを読んだ。

『大切な話があります。いつもの所で待ってます。                      咲。』

と云う簡単なものだった。落ち着いて書く場所と時間が無かったのだろうか。それは擦り減った鉛筆で乱暴に走り書きされていた。

学生時代後半の悲恋を除けばその殆どが順風満帆だった自分にとって、彼女から持ちかけられたその日の打ち明け話しが人生を賭すべきとんでもない苦渋の選択に繋がる事になるなどとは、



まさか想いにも寄らなかったのである。

僕が約束の場所に着いたのは、それからだいぶ遅くなってからだった。窓際の小さな丸テーブルで、彼女は飲み物一つ頼まず窓の下に行き交う人々をただ淋しそうに見下ろしていたようだ。

「やあ、遅くなってゴメン。でも如何したの。急にメモなんか…?。」

僕は座席に腰を下ろしながら軽い気持ちで彼女に訊いた。

彼女は珍しく浮かぬ顔をして何も答えなかった

「ところで、大切な話して…?」

「…。」

何処から話せば良いのか迷っている様子だったが、どうにか切り出した彼女の話はこうだったのである。

前日、普段は外出が多くすれ違いの多かった母親と久し振りに落ち着いて団欒する時間が彼女には珍しくあった。いろいろと近況を話しながら何気なく僕の話をしたらしい。

破談した藤本麗子との結婚に触れて行くと、

『どうして…?』

と、不思議がってその訳を訊く母親に、それは麗子が『私生児』だったとの説明を加えて行った。

その時、彼女の母親は顔色も変えず黙って『ふーん…』とだけ言い、何も言わずにその場を立って行ってしまった。

母親は暫くして戻って来ると、今度は想い貯めた様に彼女に言った。

『咲、その人とは付き合わん方がええ。深みに嵌（はま）らん内に止めとけ…!』

其処までは比較的淡々と僕に話す彼女だったが、その直後、彼女は突如として貝の様に堅く口を閉ざした。

ラッシュアワーが過ぎ、何時の間にか人通りの少なくなった駅前通りをほの暗く照らす水銀灯を店の窓越しにじっと見つめながら、彼女は自分の母親から聞いてしまった重大事項を僕に言うべきか否か、大きく迷い続けていたに違い無い。

太陽の子のように朗らかで明るい彼女が僕に示した異常なためらいは一体何なのか、その時の僕には予測もつかなかったが、それが何であるにせよ小早川咲が自ら話し始めるまで待つしか無かった。僕は消したばかりの煙草にせわしなくまた火をつけ時を待った。

気だるく開いた僕の口と鼻から幾筋にもなって吐き出された煙が暗がりの戸外を見続ける彼女の右頬に流れ彼女の臭覚を捉えた。彼女はむせった。それが切っ掛けになって彼女はその視線を窓の外から僕に転じた。

「結局、何だったの…?。」

暫く続いた静寂を待ちきれなかった僕がもう一回訊き直した。

「岡田さん…。お願いだから、私に、同情なんか、絶対しないでね…!」

永い沈黙を破った彼女は、急に訳の判らぬ前置きを一つだけすると覚悟を決めた様に僕に言った。

「母からそんな話、私だってその時初めて聞いたの。驚いたわ。

それはね・・・、私もね・・・。それと同じだからって言うのよオ・・・！！」

「だって、君にはお父さんいるじゃん、入院中の・・・」

「あの人は、本当のお父さんじゃない・・・」

「・・・！、.....・？」

僕は自分の聴き違いでは無いか、彼女の母親の嫌がらせではなかったのか。

彼女の事実誤認では無かったのか、とその時の総てを疑ってみたが、それを聞き返す勇気は僕には無かった。そんな話を繰り返し彼女にさせたく無かったし、僕もそれ以上聴きたくはなかった。

僕は胸で大きく息を吸い込むと、両頬を脹らませながらそれをゆっくり吐き出して行った。

『こんな事って、本当にあり得るのだろうか・・・？。』

実業団対抗テニスの後、何気なく蒔いた種から決して花を咲かせない不遇の蕾（つぼみ）を芽吹かせてしまったあの日の愚かな自分を思いっきり悔いたのである。

極く限られた僅かな生活半径の中で、まるでモグラ叩きの様に現れては消え、そして又生ずる奇怪な難題に僕は呆れ、がっくりとその肩を落とした。

『女難の相が出てますよ・・・！』

藤本麗子との雲行きが急速に悪化し始まった大学四年の半ば頃、夜更けに通り掛った仙台のとある繁華街でズバリ僕にそう言い放った占い師の言葉を、その時僕はしみじみと思い浮かべていた。

『当たってるな・・・。』

僕は心の中でそうつぶやいた。

その夜の小早川咲の衝撃的な告白を、だからといって素直に現実のものとは受け入れることは出来なかったが、自分の人生には幸せな結婚がプログラムされていないことを今さらのように思い知らされ、また壮大な覚悟をもしなければならなかったのもある。

目の前の十九歳の少女は、自分の母親から訊かされた事実を残らず僕に吐露し終わると、喉の痞（つか）えが取れた様にもとの彼女に戻って行った。

今度は急に寡黙になった僕を彼女は逆に案じてくれたが、僕は決して足を踏み入れてはならない底無し沼にズルズルと引きずり込まれて行くような猛烈な恐怖に襲われて行った。

辺りはもうすっかり初秋の気配だった。

彼女から逃れる事さえ思いあぐねていた筈なのに、その日僕は珍しくタクシーを拾って彼女を家に送り届けた。いつもは留守がちだった彼女の母親が玄関先に出て来てくれた。

実は、ずっと以前から誰も居ないその家で彼女とのおぞましい肉体関係を持ち続けていたが、『それも、最早お咎めされる事も無かろう・・・。』と、自分でさえも末恐ろしくなるほど病的で異常な決断を僕は既にしていたのであった。

「S工場の岡田です。遅くなりましたのでお送りさせていただきました。」

僕は、極めて整然とそう言って彼女の母親に初対面の挨拶をした。

「一つお茶でも・・・。」

と勧められたが、僕の心は余りにも複雑過ぎて呆気なくそれを固辞した。

待たせておいたタクシーに乗り込むと、運転手に僕は寮ではなく実家の方へ行く様その後の行先を指示した。

真暗闇の農道にも似た田舎道を突っ走る車の中から、田圃以外何も見えはしないモノトーンの景色にその目を遣った。それまで自分が描き続けてきた人生の軌道から大きく外れて行くもう一人の哀れな自分の姿がそこには鮮明に映し出されていた。然しまたそれは同時に、自分には如何にもならない神の『啓示』かも知れないとの神妙且つ確かな想いが心の何処かに根付いて行ったのでもあった。

## 4. それなら、前の方が良かった・・・

---

### 4. それなら、前の方が良かった・・・

久し振りに家の門を潜った。その両側には、まるで製図された様に直線的にきちんと剪定された古い山茶花（さざんか）の生垣が門灯に照らし出されていた。

家には休みを取った次兄が、勤務地の名古屋から帰省していた。学生時代から半ば同棲的に付き合っていた女性と、やっと挙式するに到り、その日取りの調整で来ていた様だった。相手の女性は兄貴の出身大学に永らく事務員として勤務していた人で、東北出身の人だった。思い起こせば、僕が大学に入った頃、東京にあった兄貴のアパートを訪ねてそこに泊まると、兄貴の横隣りに何故か一緒に眠る彼女の記憶が甦って来た。

彼女は田舎の女性らしく控え目で粘り強く、良く出来た人だという評判だった。あの頑固オヤジが折れたのだから・・・、と思えば僕にその辺の推測は容易に立った。

当のオヤジはそれでも、

「選りによって、何でも高卒ばかりを・・・!?。」

と、やはり高卒だった長男の嫁をボヤキ、次男の見る目の低さを嘆いていた。

その晩は遅くまで次兄の話題がもちきりで僕は相手にされなかった。

夜更け頃、僕は自分の部屋に戻った。そして何時の間にかおふくろが敷いてくれたふかふかの布団に寝転びながら、僕は何かあったとき何時もした様に仰向けになって天井を見上げていた。

高い天井板の幾何学的な文様は、疲弊した自分を決まって安堵の世界に導いてくれたものだった。しかしその晩だけは叶わなかった。僅か数時間前に小早川咲から聞かされたあの衝撃的な事実と現実を、未消化のまま繰り返し反芻（はんすう）するしか僕に術（すべ）は無かった。

自分には何の責任も無いのだから、『あ、そう・・・』で済ませて仕舞えば良いじゃないか。この世の中に女なんか星の数ほど居るのに・・・。

かといって、打算のみに走りきれない僕は右に左に幾度も寝返りを打ちながら自問自答してみたものの、被害意識と極度の厭世観に支配されていたその日の自分にまともな解を探し当てる事など到底出来なかった。

\*\*\*\*\*

ちょうどその頃、オヤジの度重なる事業の失敗に絡んだ多額の借金問題も長兄の努力で一通り峠を越し、永い間債鬼に悩まされ続けてきた我が家にも久々に和やかな雰囲気に戻りつつあった。

翌日の昼下がり。

初秋の心地良い陽が射し込む縁側に、相変わらず引切り無しに煙草を吸いながら新聞の隅々に目を通すオヤジと、そのすぐ傍で縫い物をするおふくろの姿があった。

「昭、その後どうなの？。変わり無いんでしょ？。」

掛けていた老眼鏡の縁越しに僕を睨みながらお袋は僕に訊いてきた。

「ん、まあ・・・。」

「何かあったの・・・？」

「……ん。・・・」

特に躊躇していた訳ではなかったが、僕は一度言葉を呑み込んだ。その日、僕には言うしか無いと思っていたし、その覚悟は充分にあった。しかしその時僕が考えていたものは単なる報告であり、一方的な通知に過ぎなかった。

親の了解を取り付けたい気持ちが無い訳では無かったが、その後に及んで同意が得られるとは微塵（みじん）にも思えなかった。

僕はわざとオヤジに聞こえるよう、毅然（きぜん）として切り出した。

「俺…、好きな女性（ひと）出来たので・・・。」

「もう・・・？」

おふくろは呆れ顔をしてそう言った。

「それに・・・俺、その人と一緒になるからさ・・・。」

新聞を食い入る様に読むオヤジの目が一瞬止まった。しかし、オヤジはその時何も言わなかった。

『又バカな事ばかり・・・！。』

オヤジとおふくろの僕を詰る声が聞こえてくる様だった。

初め、オヤジもおふくろもそんな僕を気に留める様子は無かった。然し、僕がその場から立ち去ろうとした時、おふくろは眼鏡の縁を指先で押し上げると、僕の方をジロツと見て言った。

「昭！、ちょっと…。今の話し、どういう事なの・・・？」

「……・・・」

「待ちなさい、昭！」

今度はオヤジが怒鳴り調子で僕を呼び止める。

「改めて訊くけど、昭。何、さっきの話し・・・？」

「だから言っただろうに。」

俺、好きな人できたから、その娘と結婚するからって！！。」

『相手は誰？。何処の人？。学歴は？年齢は？

何処で知り合ったの？。仕事は？。親は何してるの？。兄弟姉妹は？・・・？』

二人は矢継ぎ早に僕に訊いた。最小限は答えたが、その日僕が親の前で言って置きたかったのはそんな事では毛頭なかった。

硬直し切った声帯を震わせながら僕は言った。

「申し訳ありません・・・。彼女は・・・、どう云う訳か、また『私生児』だそうですから・・・。」

ぼくが改まったように言ったそのひと言は、瞬時にしてその場を凍りつかせるほどの凄みがあった。

親に如何してそんな事を通知し、宣言しなければならないのか。僕はその時の自分をどう表現したら良いのか、本当は良く分からなかった。身の置き場も無く、泣き喚きながらそのまま発狂でもして仕舞いたかった。僕は、オヤジとおふくろがまるで堰を切ったように僕に浴びせる質問を総て無視すると、追われる様に家を飛び出して行った。

玄関口へ走り寄って僕を呼び止めるおふくろの切ない声が初秋の庭先に空悲しく響き渡って

いた。

\*\*\*\*\*

その後、それ等一連の問題が直ちに僕の会社生活やその他の日常生活に変化を来した訳では無かった。ただ、過日僕が最後に言い残した事に只ならぬ懸念と危機感とを懐いていた両親は勿論の事、其処から漏れ聞いて僕を気遣う兄や姉達迄が会社や寮に替わる代わる電話をして来る様になって行った。

『また私生児なんだってエ・・・？！』

しかも、今度の子は高卒？。それなら前の方が、よっぽど良かったじゃないの！』

等と、ふざけた事を言ってくる家族に僕は本気になって腹を立てて暴言を吐いた。自分と女性との余りにも異常な巡り合わせに烈しく心を病んでいた僕は、誰にも解ってはもらえない『宿命』に一抹の覚悟を固めて行きながらも、何時しか一人殻に閉じ籠り孤立化への一途を辿って行ったのである。

## 5. 仕掛けられた罠（わな）

---

### 5. 仕掛けられた罠

自分の人生にとってその選択はとてつもなく一大事な筈だったのに、その決断は電光石火の如きで僕に迷いは無かった。

僕達は社内に完備されていた結婚式場の空きを早速調べて、挙式は年明けの二月と決めた。仲人（なこうど）は、入社時から僕に良く目を懸けてくれていた総務部長が極めて好意的に内諾してくれた。

職場では、ある程度の予測はあったものの結構センセーショナルなニュースとなって伝播されて行った。

一方、職場とテニスに加えて、その『女』までもいわば共有関係にあった先輩・進藤に対して僕はスポーツマンらしく正々堂々と真正面から男の仁義を切った。

「ま、そう言う訳なんで。きっと僕が幸せにしますから、先輩！。彼女の事は、どうか諦めて下さい！。お願いします。」

「そこまではっきり言われちゃうとなあ。もう、俺はお前にはとても勝てっこねえよ。とにかく頑張っって二人で幸せになって呉れよ！！。」

進藤は、細い目に涙を浮かべながら僕にそう言うと大きく溜め息をついた。別れ際に彼は僕の手を両手で握り、潔く彼女から手を引いてくれたのである。

\*\*\*\*\*

外堀は割りと順調に埋まって行ったが、相変わらず家の方がじっくり行かなかった。過日の通告は、僕の一方的なものだったとは云え、オヤジとおふくろには可成りのインパクトがあった。然しまだ記憶に新しいあの騒動の後だけに、親としても不用意に僕に物は言わなかった。さりとして彼女の出生上の劣悪な条件は前回と何ら変わりなく、彼女自身に学歴が不足していた分だけその悩みが増幅された感じさえあった。

『どんな子なのか、早く会って見たい・・・』

などと、親の方から僕に言って来る事は決して無かった。だからと言って、仲人や日取りあるいは式場などを早々と決め結婚すると心に固く決めた以上、何時までも親に紹介しないのは自分の気が許せず、或る日僕の方から勝手に彼女を家に連れて行く事になった。

その日の顛末（てんまつ）はこうである。

小早川咲は僕に連れられて我が家の門を呆気なく潜った。当にそれは玉碎に近かった。公式的には一度も潜る事の出来なかった藤本麗子に、僕は心の中でそっと十字を切り深く詫びた。

彼女が家に上がると案の定、自己紹介もろくに終わらぬうちから意地悪な質問が矢玉の様に飛び交う。

「お父さんは・・・？」

一旦そう訊いておきながら、

「あっ、お父さん・・・誰なのかわからなかったのよね・・・？」

と、母。

「あ、はい・・・。建築業を営んでいますが、暫く前から身体を壊して入院しております。」

「あ、そう。それじゃ、生活も大変だわねえ・・・。大学は何処か出てらっしゃるの？」

「いいえ・・・」

「あらあら・・・高卒なのね。で、お幾つになるの？」

「今度二十歳（はたち）になります。」

「あら、まあお若いこと！？。じゃあ、貴方・・・、せめて短大ぐらいは出ないと・・・。それからよね、結婚なんて！」

「……………?!。」

オヤジとおふくろは、戸籍上の問題や家風・格式や親兄弟の最終学歴など十九歳の女の子には如何にもならない事ばかりをまるで選りすぐった様に浴びせて行った。

しかし、その一つ一つに彼女は謙虚に応え、最後まで決してふて腐れる事は無かった。

僕から、問答無用の告知を受けたからと言ってあのオヤジ達が僕達二人の結婚をそう簡単に許諾する筈も無かった。それどころか、出生上の問題のほか新たに加わってしまった『高卒』と云う劣勢の条件をネタに、オヤジはより陰湿な作戦を展開して行こうとさえしていた。

ただ、前回の反省を踏まえ、僕に対する露骨な刺激は表向き回避されていたが、それが嵐の前の静けさだったとはまさか思いにも寄らなかったのである。

小早川咲との一件で、オヤジ・おふくろの考えが僕と交わる事は無かった。

『これを認めたら、あの麗子さんに申し訳が立たん・・・』

とまで言われた時は開いた口が塞がらなかった。

一方、会社生活の方は初め極く普通に流れて行った。余りにも唐突な結婚宣言に一部では彼女の妊娠説が囁かれたものの、多少のやっかみもあり、さほど気になるものでも無かった。

然し、最後の最後まで天は僕に味方してはくれなかった。

ある日突然上司に呼ばれたその時から、僕と小早川咲との結婚局面は一段と大きく様変わりを呈して行ったのである。

その朝、僕の出勤をまるで待ち構えていたかのように上司に呼ばれ、僕は指定された場所に向かって行った。其処は、工場長室のすぐ隣にあった豪華な応接室で僕達新人が妄りに入られるような処では無かった。

「実は、ねえ君・・・。入社同期を代表して、今日にも君にある研修に参加してもらおうという事になってねえ・・・。大変だが行ってもらえるだろうね・・・？」

何処か含みのある様な上司の言い方ではあったが、僕はそれを余り気にはしなかった。

僕はその主旨を素直に理解し、寧ろ有り難い気持ちでそれを了解した。

間もなく総務部長も入って来た。

「やあ、やっとなるかね君ィ・・・！」

その豪放磊落さには何時もと変わらぬ爽快さがあった。



「あ、はい。お蔭様で。又過日はご迷惑なお願いをいたしまして…。」

と、僕は受けて貰った仲人の件でお礼を述べた。

「いや、そんなのいいんだよ。

それより君ィ…。その話し、お父さんの方の承諾が未だ得られて無いらしいじゃないか!？」

「ええ、はい…。でも、そのうち…。」

いきなり突っ込まれ僕は言葉に詰まり、苦し紛れにそう交わした積もりだったが、それが大人社会で通用しない事くらい僕にも判っていた。

「そのうちじゃ困るんだな、こっちが…。俺も迂闊（うかつ）に受けちゃって。上の方から変なプレッシャーかかってしょうがねえんだよ、全くウ…!。」

こげ茶色をした本革の応接椅子に深々とその図体を沈めた彼は、経理部長の顔と僕とにその目を交互に遣りながら、やや憮然としてそう言った。

それにしても僕のオヤジが未だ了解していない等という我が家の内情を会社の総務部長が何故知っていたのか、僕には腑に落ちない事ではあった。然し、その日それ以上私的な話は無かった。

研修先は近畿圏と云う事だった。僕は早速帰寮し、その日のうちに現地に赴いた。

研修地には、全国から百名を超えるほど大勢の人達が集まっていた。其処は何と著名な神宮の敷地内に併設されていた精神の鍛錬道場だった。数日間のプログラムを見ると、その中には断食や禊がふんだんに取り込まれてあり、まるで僧のする荒苦行と余り変わりは無かった。

俗世間とは一味もふた味もかけ離れた研修は僕には辛いものだった。研修の苦しみと疲れとがピークに達し、実務社会との接点に疑問さえ湧いてきた頃、同グループだった中年のサラリーマンが僕に首を傾げながらこう言った。

「君は、その若さで一体何をやらかしてきたの…?。」

全く予想外の質問に僕は返答に困り果てた。彼は、自らの大きな瑕疵によって会社に与えた損失の罪償いだと言っていた。

『入社同期の代表として』送り出されて来た筈の自分の認識とは余りにも食い違う異様な雰囲気寝汗を掻くほど不可解な疑問を感じながらも、異例の禊ぎ研修に僕を急遽派遣した会社にとって本当の狙いが何だったのか、その時の僕には未だ知る由もなかった。

ひとまず大任を果たして帰任すると、幾日もしないのに何故か次の研修が僕を待ち受けていた。次の週も、そして又その次も…。

何週間か、それは立て続けに続いて行った。会社は、『将来を担う幹部候補社員としての自覚と見識を高揚させる為に…』という建前を僕の前で崩す事は決して無かった。

断続的な研修スケジュールに何処か判然としない疑問を懐きながらも会社の業務命令とあらば、の気持ち未だ旺盛だった僕は悉くそれ等に応じざるを得なかったのである。

入社して半年。入社同期の連中達が会社人間としてそろそろ一人立ちし始める頃、何故か一人だけ浮いた様に外部派遣の研修に明け暮れる自分に強烈な孤独感と不安を覚えて行った。

「お前さあ、仕事もろくすっぽ出来ないうちから結婚だなんて烽火（のろし）を挙げるからいけないんじゃないか…？」

自分の味方なのか、或いはそうでは無いのか。それがどちらなのか、容易に判別つかぬ様な辛辣（しんらつ）な忠告が棘（とげ）になってぬかるみ始めた僕の心に鋭く突き刺さって行った。

又その頃になると、電話口に出る彼女からも売り物だった若く弾むような声が日毎に失せて行った。僕との結婚話が社内に広まって行くに連れ、人気者だった彼女の周りでそれまで幾重にもなって渦を巻き涎（よだれ）を垂らしていた男達が皆一斉に距離を置く様になって行ったのもその大きな一因だった。

『十九じゃ、結婚なんて未だ先。短大でも出てから又ゆっくり考え直しなさい…。』

等と僕の親の言った嫌味が彼女の小さな心をざらつかせ、

『咲ちゃんが、この時期に結婚だなんて同意するから彼も外へばっかり出されちゃうんだよ…。』

と、職場の同僚や先輩達に窘（たしな）められた。

『私、何でこんな目に会わなきゃならないの…！？』と、或る日突然僕の運命の渦に巻き込まれその流れに身を任せざるを得なかった彼女は、恰も藤本麗子がそうだった様に神経を尖らせ疲弊しながら次第にその心を閉ざして行ったのである。

\*\*\*\*\*

『研修』イコール『給与』と考えて仕舞えば確かに気は楽だったが、然し其処まで開き直った考えには未だ至らなかった。

外にばかり出ていると、たまに自分の机に戻っても仕事が無かった。外部研修から戻ると僕は終日掛けてそのレポートを作成した。そして直属の上司と総務部長にそれを報告する事が偶の出勤日にする僕の日課となって行った。

完全に戦力から外されている自分にやっと気付いたのはその頃だった。僕の結婚とその辺りの事との間に一体どんな因果があったのか、僕は真剣に悩み始めていたが、大人社会の知恵の輪を解く力を僕は未だ十分に備えては居なかった。

丁度その頃、その後の僕の行動を大きく左右する事件が又一つ勃発した。

九月の中間決算業務で、職場全体が一種独特のパニック状態になっていた或る日、仕事の割り当てでも特に無くただ一人、暇を弄んでいた僕が分厚い会計全書のページをただべらべらっと宛もなく捲っていると、総務から電話が入りいつもの部屋にすぐ来る様にとの事だった。

『今度は、どんな研修なのかなあ…？』

ふわふわの応接椅子に座りながら、僕はそう思っていた。

総務部長がノックもせずに入ってくると、例によって座りもしないうちからべらべらと喋り始まった。

「良く読んだよ、君のレポート。達筆なんだね君は。然も良く書けてるじゃないか。」

と言うと、やけに神妙な顔つきをして、

「それから君ねえ、誠に申し訳ないんだけど・・・。ほら・あれ、結婚式の仲人なんだけど、どうしても、お引き受け出来なくなってねえ・・・。会社にも難しい事がいろいろあってさァ。怨まんでくれよ、な。頼むから・・・。」

と、彼は糊の良く効いた真っ白なワイシャツの胸ポケットから煙草を取出した。

あれほど喜んでくれていた筈なのに・・・。その様はどう見ても不自然だった。僕が素朴な疑問をぶつけると、

「いや、これは上から入って来た話しに抛ればなんだがね・・・。」

と前置きし、彼は急に身を屈めて小声になった。

「とにかく『君たち二人を切り離せ！！』と云う事なんだな。何でも君のお父さんとウチのずっと上の方で話しが出来てるらしいよ。君達も大変だろうが、業務命令とあらば僕らもねえ・・・。」

ただ黙って会釈をすると僕は部屋を出た。

意味不明の度重なる研修も、一度は受けてくれた仲人の忌避も、肉親である自分のオヤジが蔭で仕組んだいわば『罨』だったかと思うと身体中に震えが来て、暫くそれは止まなかった。

何の用件で僕が呼び出されたのか、僕の背向かいであたふたと仕事に追われていた彼女にはそれを知るはずもなかったが、力なく机に戻った僕に心配そうな目線を送った。

そんな内外のごたごたは直接・間接を問わず小早川家の両親や兄・姉達にも伝わると、大きな反響と反感を呼んで行った。

「出生上の問題は私に責任があり娘には何の責任もありません。咲（さき）は私にとって可愛い末娘（すえっこ）なんです。その娘が岡田さんと一緒に成る為になんか何でこうも不必要な苦勞をしなければならないのかと思うと、母親として不憫で仕方ありません。こう言っては何なんです、私達としては何も岡田さんでなくても良いんですから・・・。」

本当に嫁に貰って戴けるんでしょうか？。この子を幸せにして貰えるんでしょうか・・・？。」

厚い信仰を持ち合わせている人らしく控え目で深みのある方だった。

彼女の母親は高ぶる感情を精一杯抑えながらも我が家への強い憤りと、慈しんで育ててきた末娘への止めど無い不安な気持ちを或る日僕にぶつけたのである。

入院中の義父を除く彼女の家族全員が揃う前で、僕は正に身を詰まされる辛い思いだった。

「いろいろ、ご心配かけて申し訳ないと思ってます。彼女の全責任は僕が持ちます。どうか信じて下さい・・・。」

僕はそう言い切った。

「そうまで言って戴けるなら安心です。この娘の事を、なにぶんにも宜しく願います・・・。」

畳の上へ泣き崩れる様に両手を付いて僕にそう言い終えると、小早川咲の母親はそれまで必死に耐えていた大粒の涙をどっと流したのである。

## 6. 四面楚歌（しめんそか）

---

### 6. 四面楚歌

オヤジ色の強い罨に気付いた僕は、当然真偽の程を正した。オヤジもおふくろも、そんな事はして無い、知らないと言って何処までも白を切った。

真相は明らかに成らなかったが、僕はそれ以上糾弾しなかった。そのせいもあって親子の関係は学生時代の様にそれ以上険悪にはなっていかなかった。其処まで来ると、オヤジ達にも内心一種の諦めに似たものが芽生えていたし、何よりも床柱に付いたあの痛々しい傷痕がいわゆる『学習効果』となって立派にその抑止力となっていたに違いない。

師走が近づく頃までに、僕は嫌がる彼女を強引に何度か家に連れて行った。オヤジもおふくろも、無論良い顔などする筈も無かった。

「昭の嫁になる気があったら、今からでも大学に行かないとダメですからね。結婚なんか、それからで充分！。ウチの息子が会社辞めるなんて言ってるようだけれど、もしそんな事があったら貴方の責任問題ですから、良いですね…！」

学生時代、麗子がされたように彼女が門前払いされる事は無かったものの、結婚前の険悪な嫁虐めに彼女のか細い神経はざらざらと音を立てながら擦り減って行った。

総務部長から決して公言しない約束のもと内幕の一端が暴露された後にも、会社による研修という大義名分にその名を借りた僕と彼女の隔離作戦はむしろエスカレートさえして行った。

我が家においては若い『彼女いじめ』が、会社では烈しい『僕いじめ』が、まるで歩調を合わせるかのように凄然と行われて行ったのである。

総務部長から仲人役を丁重に断られた僕は或る日、已む無く直属上司であった経理部長にその鋒先を向けた。その返事は、

「ダメなんだ。申し訳ない。個人的に大意は無い。怨まんでくれ…。」

と、予想通りのものだった。普段から好意的にしてくれていたその他二・三の役付の人に頼んでも見たが、まるで版で押したかの様にそれらも皆全滅だった。『臭いものに蓋』のもの凄さを、この時ほど身に沁みて感じた事は無かった。

禊の研修に始まって以来、僕の中にはそれまでに余り感じた事の無い被害意識に似たものが急速に芽生えて行った。

それは、足元からじわじわと火炙りにされ会社という世間に晒されながら皆の物笑いにされているのでは無いかという、かつて経験した事の無い自信喪失に似たものでもあった。

自分の周りに仲人の受け手が皆無だと判ったその日の夕刻に、僕は経営者でもあり工場のトップでもあった工場長を思い切って単独で尋ねていた。その長男が学生時代テニスと一緒にやった僕の後輩と云う事もあり、就職以前から懇意にして呉れていた数少ない一人でもあった。

工場長には、若い僕達二人が苦悶する様子は部下からの報告で粗方判っているようだった。眼鏡の奥の少し目尻の垂れた優しい瞳から、経営者として、或いは工場の最高責任者として新入社

員の僕に寄せる期待の大きさを押し量る事は容易に出来た。

しかし、それとこれとは別という事だったのだろうか・・・。

四面楚歌になる前に、その大きな一角を何とか切り崩しておきたいと密かに願っていたその日の僕には、正しく『火に油』を注がれた全く逆の結果となってしまうのだった。

「君は、まだまだ若い。将来も大きく広がっているし、結婚なんか焦らなくとも何時でも出来る。今は、とにかく会社人として一人前になる事が先決。いいお嫁さんなら僕が何時でも世話してあげるから・・・。」

結局は、彼も同じ穴の貉（むじな）だったに違いない。

大人社会の極めて初歩的なからくりさえ見抜けなかった自分の愚かさを知り、もはや僕の行く道は完全に閉ざされている事を思い知らされたのである。

家の中ではもちろんの事、会社に於いてさえも心と身体の逃げ場を完全に失って行った僕。そして、何故そこまで酷い目に会わなければならないのか、その理由を本当は未だ十分に消化し切れないまま、それでも一心不乱になって僕に付いて来てくれる健気な彼女・・・。

そんな僕達二人は、四面楚歌の冷たい視線を避ける様に忍び会い励まし合って、凡そそう遠くは無い激震に備えて行くのでもあった。

## 7. 配置転換

---

### 7. 配置転換

「これから私、一人でどうしたらいいの…？」

「そう言うなよ。せっかくその気になったのに、君を残して行けなくなっちゃうじゃ無いか…！？」

「だってエ……。」

「俺、毎日電話したり手紙書くから。頑張れるとこまでやって見ようよ…。ねえ、大丈夫、やれるよね…？。」

「…ん…?!。」

むずかる彼女を宥（なだ）めながら、僕はむしろ自分にそう言い聞かせていたのである。

余りにも急だった僕の長期出張命令を知った彼女は、自分だけ取り残されてしまうのではないかと容赦無く襲い掛かる不安に耐えられず、僕をはるばる東京駅まで見送りに来てくれたのだった。彼女を懸命になって宥（なだ）める僕の悲愴な姿が其処にあった。

その年の十一月。最後の日曜日の夜に、僕を乗せた下りの東海道新幹線『こだま』は小雨煙る東京駅を音も無く出て行った。

それはその日の二日前。週末金曜日の遅い午後の時間に余りにも突然にやって来たのである。

それは、やや下火になりつつあった外部派遣の研修に内心ホッとしていた僕と彼女から、僅かに残っていた耐え忍ぼうとする微かな気力さえも根こそぎ奪い取ろうとするものだった。

『自工場で製造された商品について、その流通経路をつぶさに勉強して来る事。』との名目で、『テーマに習熟したと認められるまで、当分の間。』という内容の業務命令だった。

三十余名の同期の連中をどう見渡しても、自分の様に会社側から完全管理されている者は一人として見当たらない。僕は切れそうだった。しかし、切れた自分がどうなるかもよく分かっていた。幼少の頃から入iriたかった会社を、その位の事で辞めてたまるかとの強い意志もあった。ほとぼしり出そうな感情を全て抑えて、業務命令を出した上司に僕は訊いた。

「今回の出張は、どうしてもダメなんですか…？」

「駄目だ。業務命令だ！」

「もし、受けなかったら…？」

「そんな事は聞いた事も無い。もしあれば、それは就業規則違反で処罰もんだ！」

『処罰されるのはそっちじゃないか…！』

と、内心僕は強い憤りを感じていた。然し僕に耐える余力は未だほんの少しだけ残っていたのだろうか。長期出張に名を借りた事実上の『配置転換』に一旦僕は甘んじる処となった。

僕の出張先は、中京地区一帯を管轄する営業所だった。所長や僕の指導に当たる先輩達は、過去に余り前例の無い僕の出張の深い訳を良く知っていた。彼等は、

「君も大変だよなァ…。うちの会社は昔からそんな古臭いところがあるからさあ。気を付けた方がいいよ」

等と、入社早々結婚話をぶち上げてしまった僕を遠回しに批判した。出向いた営業所にとって

僕は、当に『招かれざる客』だった。僕は、まるで腫れ物にでも触られる様に怖々と取扱われ、酷い『お荷物』に成り下がって行った。

営業所の入っていたビルの階上にあった喫茶店から僕は毎日、何回も何回も彼女に電話し、約束の手紙も連日の様に書いた。そして、立ち枯れ寸前だったお互いの病んだ心を支え合った。しかし、切羽詰まって来る所まで来てしまっていた僕達二人に慰め合う言葉などある筈も無く、まして傷口を舐め合う事など出来る訳も無かった。

僕の、いわば島流しによって否応なしに一人ぼっちにされてしまった彼女の方も日に日に孤独感を強めナーバスになって行った。

「咲ちゃん、あいつ、もう戻れないかもしれないぞ？。今なら未だ間に合うんだろ？。あんな奴となんか、別れちゃえよ・・・！」

永い間彼女のファンだった職場の先輩達の口から何気なく飛び出すたった一言のブラックジョークが、相談相手も無く逃げ場を探していた彼女にとっては、とても惨たらしい仕打ちとなり到底耐え忍ぶ事の出来ない屈辱に思えた。

もはや僕達には限界だった。むしろ、それは僕の方に強かった。僕の心の燃料タンクは何時しかエンプティを指し示すと派手な点滅をし始めて行った。

『ああ... ..、今は一体何なんだ？。オヤジやそれとグルになった会社の罫にはまり、またあの時の二の舞を踏むだけじゃないか... ?。素っ裸で生き抜く勇気と力は、お前には無かったのか! ?。』

苦しい自問自答を繰り返しつつ、もはや絶望的な失意のどん底で僕は得体の知れない巨大な化け物の支配から自らを解き放つ悲壮な決意をしようとしていた。

然しそれは同時に、永年の夢でもあった(株)H社の社員としてまがりながらもスタートした『今』と云う現実からも訣別しなければならないという償いきれない代償を覚悟しなければ到底為し得る事では無かった。

\*\*\*\*\*

かろうじて繋がっていた最後の一本の糸を繕いながら、仕事納めの日まで何とか辛抱した僕は、三十日の日、何事も無かったかのように一ヶ月ぶりの帰省を果たした。

立ち続けた超満員の新幹線の中で、脳天が割れるほど自問自答を繰り返した。

『本当にやるの？。落ちこぼれになってもいいの... ?』

落ちこぼれになるのは死ぬほど厭だった。それまでの輝かしい青春が全部台無しになってしまう、と思っていた。幼い頃から、こうだと思い描いてきた通りの人生を歩み続けたいとも願っていた。それまでの努力は、総てその為にあつた。だから、会社なんかとても辞められないと思ってきた。

しかし...、僕には許せなかった。ただ、結婚すると言っただけじゃないか。それだけなのに...。寄って集って僕達を虐め抜いた連中を、片っ端からぶっ殺さなければとても容赦できなかった。

でも・・・、そんな事出来るわけがない。だから・・・。自ら、そうするしか僕に再び生きる道は無かったのである。



## 第6章 駆け落ち

---

### 第6章 駆け落ち

降り立った駅前の公衆電話から、今戻った旨を彼女に伝えた。

「答え難かったら、返事だけで構わないから。」

僕は、一旦そう前置きすると、

「明日夜十時。いつもの場所。」

と、短くそれだけを彼女に伝えた。

「えエッ・・・！？。ほんとにやるのオ・・・？」

営業所からヒソヒソかけた電話や、出した手紙の中で頻繁にしてきた僕の話しを、『まさか・・・！？』と半信半疑で受け止めていたのかもしれない。敢行する日時・場所を僕から聞いたその時の彼女の偽らざる気持ちがそのままの言葉になって受話器から出てきたのだった。

「わ、わかったわ。でも、二・三日待っちゃ駄目・・・？」

「・・・！？。待てるなら、最初からこんな事しない。どうする・・・？」

「・・・うん、わかったわ・・・。」

そう言って彼女も、本当に覚悟を決めて頷いた。自分のお金は最大限、持ち物は最小限にする様、僕は彼女に厳しく指示をした。

「明日、出る直前にもう一回だけ電話する。但しベルを二回だけ鳴らす。取らなくていい。それまで、絶対誰にも公言しない様に。いいね。じゃ・・・。」

それだけ言うと、僕は公衆電話ボックスの中で赤い受話器を置いた。多目に入れておいた十円玉が何枚かガチャガチャと音を立てて戻ってきた。

その晩、我が家では皆帰省していた。六人兄弟が全員揃っていたその年の暮れは、いつも以上に賑やかで、家中に年末独特の華やいだ明かるい雰囲気を感じる事が出来た。

僕が玄関のガラス戸を開けると、皆が一斉に僕を出迎えてくれた。悩める弟の事を精一杯気遣ってくれる家族の気持ちが、僕には有り難いほどよく伝わって来た。

台所で正月のおせち料理造りに余念の無かったおふくろも、その手を休めると少し遅れて来てくれた。

逆転ホームランを打った野球選手が大勢のナインに祝福されながらダックアウトに戻る時の様に、僕は持てはやされながら茶の間に入って行った。そこでは、戦時中の古びた帽子を被ったオヤジが正月に備え神棚周りの掃除をしていた。開口一番、僕に訊いてきた。

「どうだ・・・。少しはほとぼり醒めたか・・・？」

「・・・。」

久し振りで会ったのに、オヤジが言い放った咄嗟（とっさ）の嫌味に僕は返事さえしなかった。そうする事でしかその時の極度の不快感を示す方法が僕には無かった。でも、そんな不快感はすぐに消えて行った。

『どうせ、あと一昼夜の辛抱じゃないか・・・。』

そう僕は一人呟いた。僕は大きなボストンバッグを持ったまま台所を通り抜けると、一番奥にあ

った自分の部屋にそのまま箒って仕舞った。

翌朝、その夜のためにもう少し寝ようと思っていたのに、働き者の姉に呆気なく叩き起こされてしまった。

その日は、朝から鉛色の雲が重く押し掛かるように垂れ込めていた。その時節にしては珍しい天候だったが、陰惨な気分の自分には丁度よかった。特に寒くは無かったが、今にも雪が降り出しそうな雲行きだった。

家の裏手から年末恒例の餅を突く軽快な音が家中に心地良く木霊（こだま）していた。それは全員参加の年中行事だった。僕も一枚分だけ餅を突いた。縁側の雑巾懸けや天井のスス払いも手伝った。それは、あと半日もすると確実に実行されるとんでもない企てから家族の気を必死に逸らす為でもあった。

それに・・・、それから暫くは遠去かる事になるであろう、僕を育ててくれたその家と家族との和やかで柔らかな空気を身体中一杯に吸い込んでおきたいという切なる想いが何よりも強く僕にはあった。

夕方近くになると、パチンコをしに出かける兄貴達が僕に声をかけてくれた。僕はさりげなくそれを断った。僕は部屋に戻り、人目を避ける様に荷造ろいをして行った。

『バカな事やって！。じっとしてれば総て時間が解決してくれるのに・・・。』  
ぼくのホンネは紛れも無くそうだった。

それなのに・・・、  
僕の迷いは止む事無く、心は大きく揺れ蠢いていた。

『止めとけ！』、という気持ちが九割で圧倒的だった。それなのに、深く根を這ったもう一人の自分を越える事は何故か最後まで出来なかったのである。

恒例の歌番組が始まった頃、いつもと変わりなく家族団欒の輪の中で僕は夕食をとり始めたが、それも次第に喉を通らなくなって行った。身体中の血流が急速に変わり、顔面から血の気が引いて行くのが良く分かった。

人気歌手の饗宴に家族の関心はあった。然しその中で、何故か長兄の気が漫ろに思えて仕方なかった。誘ってくれたパチンコを断って以降、僕の何処と無く浮ついた心を見透かされているのではないかとの気配があった。そんな事などある筈も無いのに、それを見破られまいと僕はわざといろいろなポーズを取ってごま化した。

早めに食事を済ませると、僕は自分の食器を台所まで運んだ。そしてそのまま再び自室に立て箒った。

食事中には、テレビの大きな音に掻き消されて分からなかったのだろうか。部屋に戻る途中の廊下で、トタン屋根を強く叩く雨の音を聞いた。外は、季節はずれの大雨が降っていた。

時々刻々とその時が迫り来るのが分かって来ると、心臓は烈しく動悸した。

またそれは強い不整脈となってかって無い嫌悪感を僕に示した。

『いや、もう駄目だ。俺には、もう止められ無い・・・！！。』

僕は深い呼吸を二・三度すると、本当に最後の覚悟を固めて行った。

あらかじめ自分の部屋に回しておいた革靴を履いた僕は部屋のガラス戸をそっと閉めると、庭を大きく半周し門を出て行った。家族に気付かれる事はなかった。

門扉は開けたままにした。閉める音も避けたかったが、きっと戻ってくるからその時にはまた入れてくれよ…、と悲しい願を掛けた積もりもあった。

門の外から家に向かって僕は深々と一礼した。そして表通りに向かって行った。近くの公衆電話から約束のダイヤルを彼女に回した。約束通りベルを二回だけ鳴らすと、僕はそのまま切った。戦々恐々として今か今かとそれを待っていた彼女の姿が目に見え、怖さゝえあった。

あと二時間もすると元朝詣りで大賑わいを見せる通りにも、まだほとんど人の影は見当たらなかった。自分の不審な動きが何処かで見られているような気がした。僕はその周辺を注意深く見回したが気のせいだった。

時折強く降る雨が、人知れぬ長旅に出る僕の全てを包み隠してくれている様でもあった。

拾ったタクシーに早々と乗ると、僕は約束の場所へ向かって行った。指定した時間には、まだ間が少しあった。彼女はまだ来ていない。

『上手く家から抜け出せなかったんだろうか…？』そんな不安が僕の脳裡を過ぎて行った。

\*\*\*\*\*

家の方では烈しかった雨もその辺りでは大分小降りになっていたが、暖かい気温のせいかな今度は少し霏（もや）が立ちこめていた。

『そもそもの始まりは、T駅前のこのレストランからだったな…。』

T駅へと続くペディストリアン・デッキの上で複雑な想いを馳せながら、僕は二階屋のそれを見上げていた。

『あの日、学生時代のあんな話さえしなければ、こんな事にはならなかったのかも知れないのに。引き返すチャンスなら幾らでもあったのに…。』

僕は未だ来ない彼女を待ちながらタイムスリップすると、はや後悔にも似た愚かな回想に耽っているのだった。

僕は、自分の腕時計を頻繁に見ていた。雨は然程でも無かったが、霏は一段と濃くなって少し底冷えして来た様だった。僕は持っていたマフラーを首に巻きつけ、着ていたトレンチコートの襟を立てた。

約束の時刻を少し回った頃、視界の落ちた国道方向から此方を照らすヘッドライトが急に見えてくると、鈍いブレーキ音を響かせながら一台のタクシーが目の前で止まった。

しっかりと着込んで手荷物を一つだけ持った彼女が、タクシーの後部座席から濡れた歩道に降り立った。それは晦日の晩には到底似つかない彼女の姿だった。

「ごめん。少し遅れちゃった…。」

「ん、心配したけど。それより…、何て言って来たの…？」

「しょうがないから、友達ん家、行って来るって…。」

その時の彼女に悲壮感はそれほど未だ漂っては居なかった。

自分には、学生時代から永い尾を引く因縁が感情の激しい起伏を創っていたが、彼女にとってその時目の前にしていたものは、ちょっとハードな恋愛ゲームでしか無かったのかも知れない。

僕が彼女を道連れにしようとしているのか、それとも逆だったのか、本当は僕にも良くは解らなかつた。が、文句の一つも言わずただひたすら僕に付いて来る健気な彼女の姿に、僕は重い十字架を背負う想いだつた。

二人は降りしきる小雨を避けて商店街の庇の下に入つた。暗がりの中で僕は彼女を力いっぱい抱き締めた。

確証の無い旅立ちを知らせる僕の激しい鼓動が着膨れの彼女の胸を叩いて行つた。僕は彼女から抱擁の手を解いた。雨にしっかりと濡れた彼女の長い髪が僕の頬にまとわり付いた。

\*\*\*\*\*

突っ走る車が跳ね上げて行く水飛沫とクラクションに時折身を凄めながら、僕達は氷雨降り靄（もや）立ち込める国道を南に向かってただひたすら歩いて行つた。

僕達に当てなど何も無かつた。血筋や家柄、学卒だの高卒だのと、そんな形骸とは無縁の世界に我が身を投じてしまいたかつただけだつた。

『みんな、それはお前の為なんだ…。』という分厚い仮面の下で公然と行なわれ続けてきた、いわば『屈辱と人権蹂躪（じゅうりん）』から逃れられさえするならばどうでも良かった。

一つ傘に入つて歩き続ける僕達を、雨は容赦無く濡らしていった。大晦日だというのに、国道はずっと交通量が少なかつた。思いがけない悪天候のせいだつたのかもしれない。

二時間近く歩つただろうか。国道の左側を歩き続ける僕達の背後から二筋のヘッドライトがゆっくりと近付いて来ると、

『プッ、プーッ・・・！』と軽くクラクションが鳴るのを聞いた。初め気にならなかつたが繰り返し鳴つた。

『この天気、随分な嫌がらせだな・・・？。』僕はそう思った。下手に振り向かぬ様彼女にも言つた。彼女は黙って頷いた。

僕達は下を向いたまま、ただ黙々と歩き続けた。アイボリーホワイトの白い車は減速し、国道の内側を歩く僕のすぐ横に付いた。そして遂に僕達の歩幅と同じスピードになった。

僕達はそれでも無視して歩き続けたが、半分ほど開いた助手席側の窓から突如として僕の名を呼ぶ声が闇を劈いた。

「昭ア・・・！。何やってんだ、お前達イ・・・！！。」

僕達は驚いて、暗がりの運転席に目を遣つた。兄貴だつた。それは一番上の兄貴だつた。どうして兄貴が追い駆けて来たのか、頭が変になるくらい僕には解らなかつた。逃避行の世界から葛藤の渦巻く現実へ引き戻される恐怖が走つた。

二人で顔を見合わせた。容赦無く降りかかる雨と汗でぐしょぐしょになっていた彼女は、それ迄かつて見せた事も無い厳しい形相を僕に初めてして見せた。全く予測しなかつた極度の緊張感が、二人の心の中を猛烈なスピードで走り抜けて行つた。

僕達は何処までも兄貴を無視した。歩き続ける脚を決して休める事をしなかつた。兄貴は車を

国道の路肩に止めると、今度は傘もささず走りながら僕達を追い駆けてきた。

「昭…。咲ちゃんも…。おい、止まりなさい！！。あきら…。止まれエーッ…！」

追いつがる兄貴を尚も振り切って、僕達は歩速を上げた。前後・左右に見え隠れしながら、兄貴は何回も何回も二人の名を交互に呼んだ。

僕は返事するのを堪えていた。振り向く事もしなかった。彼女も同じだった。健気な彼女だった。

兄貴も諦めず、執拗に僕達を追った。そして…。如何にもならない事が分かって来ると、苦し紛れに泣き叫ぶ様に最後に言った。

「結婚も、会社の方も、みんな俺が何とかしてやるから…。だから…。戻ってくれよオ…！！。」

有り難い想いが無い訳では無かった。しかし、薄汚れた現実から一歩・一歩、確実に離れ始まっていた僕にとって、その時兄貴の口をついて出た言葉は尚も理不尽な響きでしかなかった。それに…。何よりも僕達には余りにもその時期を失っていたのであった。

二人だけの新しい生命に向かって一直線に歩き始めてしまった僕達に、付きまとう兄貴はもはや障害物でしか無かった。

「今さら、うるせエ！。兄貴ィ、放っといてくれよ…！！。」

僕は何かに慄（おのの）いて、怒涛の様に荒れ狂った。

「お兄さん、お願いだから行かせてエ…！」

僕に続けとばかり彼女までも絶叫した。

二人の悲痛なる叫び声は真っ暗な闇を破って甲高く響き渡って行ったが、国道を叩く雨音に消されて行った。兄貴は放心したかのように、茫然とその場に立ち尽くしていた。

僕達は、尚も歩き続けた。暫くして振り返ると、兄の姿は霧に紛れてもう何処にも見えなかった。国道の左側で橙色に点滅するハザードランプが霧に霞んでいつまでも見えていた。

\*\*\*\*\*

何時の間にか雨は止んでいた。傘に付いた大粒の滴を振り払いながら僕は時計を見た。もうとっくに午前零時を回っていた。

歩き出して初めて足を止めた。夫々持っていたバッグを濡れた路面に静かに降ろし、僕達は向き合って互いに言った。

「新年おめでとう！。今年こそよろしく…！」

月並みだった。唇がかじかんで上手く言えなかった。しかしそれは二人にとって、紛れも無く真新しい一日がスタートした記念すべき瞬間でもあった。ずぶ濡れに身を震わせながら僕達は抱き合うと、その場で大きく泣き崩れて行った。

エピローグ

1. アパート

それから、早いものでもう十ヶ月余りが過ぎていた。

その後幾日か僕達は上野の寂れた旅館で過ごしたが、正月が明けると都内のとあるアパートに入居した。区役所に出向いて直ぐ入籍もした。永年、紆余曲折した僕の『結婚』はその日呆気なく終止符を打った。それ迄の騒ぎがまるで嘘の様に安らいだ気持ちになって行った。

アパートは閑静な場所にあった。上・下数世帯ずつの二階屋だったが、戦争で焼け残った建物らしく滅法古びた汚い家だった。トイレは所謂（いわゆる）ぼっとん式で共用だった。

僕は下宿時代の経験がモノを云ってさほどでも無かったが、不慣れな『女房』はそれが発する強烈な異臭に酷い便秘症を患うほどだった。

部屋は僅かに六畳の間だけだった。その入り口付近に幅4、50センチほどのそれはそれは小さな台所が申し訳無さそうについていた。炊事も洗濯も共にそこでやるしかなかった。無論風呂など有る筈も無い。

僕達には二人分を合わせても、ひと月先まで暮らせる金も無かった。持っていた僅かな預金はアパートの契約時に跡形も無くなっていた。

入居すると間もなく彼女は近くの小さな工務店に勤めるようになった。幾らにもならなかったが、部屋代を払うと、その後何日か食える程度のものだった。僕も細々とアルバイトをしたが、その不足分を補うほどにはならなかった。

金は無かった。来る日もくる日も、具の無い即席ラーメンで食いつないだ。

たまに、昔取った杵柄のパチンコで大勝ちすると定食屋で大好きだったカレーを食べた。

当にその日暮らしの生活で、若い女房は家計に煩かった。しかし或る時、僅かに残った金で超安物のギターを買う事だけは笑顔で許してくれた。

## 2. 涙（なみだ）

---

### 2. 涙（なみだ）

東京の夏は暑かった。外は灼熱、内はまるで蒸し風呂の様だった。扇風機も無くむさ苦しい六畳一間のアパートの一室で初めての夏に耐え抜いた頃、彼女は二度目の妊娠をしていた。

診断を受けたその初期は、極めて順調だと言われて安心していた。今度こそはと考えていたが、相変わらずくるし過ぎた家計の中では十分に栄養を取る事も適わなかった。

決して顔には出さない健気な彼女だったが、押し量る事の出来ない精神的な苦勞も彼女に重く押し掛かっていたに違いない。

朝・夕の空気が少しひんやりとして心地よい初秋の頃、慌てて手配したタクシーの中で痛む腹に顔を顰（しか）めながら、彼女は悲しみの流産をしてしまった。処置室のベッドの上でその身を横たえ、彼女は麻酔から醒めずに眠っていた。

その傍（かたわら）で、

「ご主人ですね。これですから…。」

駆け込んだ病院の医者は極めて事務的にそう言うと、褐色の小さな血痕を僕に指し示した。

『今度こそ、頑張っって元気な赤ちゃんを産むわ…！。』

そう言いながら、二十歳の若い母親に向かってほんの少しずつその気構えを持ち始めた矢先だったのに…。それは、余りにも残酷な神の仕打ちではあった。

\*\*\*\*\*

未だ、完全に麻酔から醒めていなかった。薄暗いアパートの自室に敷いた粗末なせんべい布団の中で、彼女は時折うなされた様に幾度も顔を左右に振った。顔面蒼白で、それは死人の様だった。僕には如何する事も出来なかった。

一緒に勤めていた会社で、昼休みに真っ赤なミニスカートを履いて楽しそうにパンポンではしゃぐ彼女の姿が僕は一番好きだった。陽気で人気者の彼女を何でこんな目にと、僕は自責の念に烈しく駆られ、不甲斐ない自分にただ呆れるばかりだった。

僕は、部屋の傍らに立てかけてあったギターを手にとると、未だ眠る彼女の邪魔にならぬ様それを静かに弾いた。

旋律は彼女の耳に届いていたのだろうか。彼女の疲れた心と身体を癒してくれているのだろうか。薄ぼんやりとした朦朧（もうろう）の中で、彼女は永い眠りから醒めて幾度か目を開けた。その目から大粒の涙が頬を伝って、枕元に落ちた。弾く手を休め僕はそれを拭いた。

「良かった、醒めて…。でも、どうしたの？。そんなに涙なんか流して…？」

僕は彼女に訊いた。

彼女は言った。

「泣いて、赤ちゃんとお別れしたの…。」

そう僕に答えると、彼女はまた沢山の涙を瞼に溜めた。

彼女は再び軽くその目を閉じた。

涙は無色透明の一条の線を引きながら、蒼白い彼女の頬に零れ落ちて行った。



### 3. 回想

---

#### 3. 回 想

僕は再びギターを弾いた。

瞼の奥の真っ暗なスクリーンに目まぐるしく映し出されてくる数奇な運命を辿っていた。僕は不思議な陶酔に波打たれながら、目の前の現実と虚像との狭間（はざま）を幾度と無くさ迷い続けていた。

遠くで鳴り始めた踏切の警報機の金属音が、戸外の静寂を微かに破って、そしていつの間にかまた失せて行った。

「ね、ねえ……。それ、何……。て……。いう……。の……。？」

未だ混濁の眼差しで、彼女はうわ言の様に何かを言った。

完